翼を失った竜と血塗られた聖女

小鳥遊輝

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
翼を失った竜と血塗られた聖女

【Ｎコード】
Ｎ２２９５Ｓ

【作者名】
小鳥遊輝

【あらすじ】
過去に魔王と呼ばれる存在を打倒し、後の世で「勇者を救った緋色の聖女」と讃えられている少女がいた。その少女の名はセリーナ・Ａ・アインスフィアと言う。セリーナは、五百年後の世界に魔王を復活させようとした者たちに、魔王が死ぬ寸前にセリーナにかけた封印を解かれ、五百年後の世界に復活し様々な出会いを通じまた世界を救うまでの物語です。※なお、セリーナは最強設定です。

登場人物紹介（前書き）

人物紹介です。

登場人物紹介

セリーナ・アリア・アインスフィア

種族：人→真祖の吸血鬼
年齢：２０（見た目は１０歳くらいの少女）
性別：女
魔法：古代魔法・召喚魔法
召喚：ゼアノート（詳細はまだです）・フェンリル
特殊：全てを記せし禁断の書庫≪ロストライブラリ≫

真祖の吸血鬼で緋色の聖女様。
魔王ゼノン討伐隊で実際に魔王を倒した英雄。世界的にも有名だが死んだことになっている。
現在、背は低い。髪は二つ名の通り緋色。目は赤銅だが戦闘時は灼銅の色に変わる。
性格はベイに強制されており、一国の姫と同等の受け答えができるが、比較的好戦的で戦闘時はかなり非情であり、種族のせいか死に対しあまり頓着しない。
両親に禁呪である種族転換の魔法を１７の時に受けている。その時、妹であるサフィにもかけようとしたため両親を殺し、彷徨っているところをベイに助けられる。

ベイシス・クリストフ・ラブリオール→ベイシス・クリストフ・アインスフィア

種族：人

年齢：２２（魔王討伐時）・すでに死去
性別：男
魔法：古代魔法
特殊：絶対王権≪大いなる言葉≫

魔王ゼノン討伐隊のリーダーで勇者。
スフィア王国の建国者にしてラブリオール王国の最後の王子。
性格等は比較的温厚。他人のために怒れるタイプで誠実な人物。
すでに亡くなってはいるが、魔王を倒したセリーナを見つけた人物としてや、世界の種族すべてを平等に扱ったことからすべての種族から英雄視されている。
生涯、ノーブレスオブリージュを貫いた。その為、彼には民に絶対なる命令権のあるスキルである絶対王権を得ていたがそれを私利私欲に使うことなく民を守るためだけに使われた。

セフィリア・ティス・アインスフィア

種族：人→守護精霊
年齢：１１（魔王討伐時）→５１１（現在）
性別：女
魔法：古代魔法
特殊：現在（いま）を記せし禁断の書庫≪セカンドライブラリ≫

緋色の聖女セリーナ・Ａ・アインスフィアの妹でスフィア王国の初代王妃。
性格は姉同様強制されているが、腹黒い。
背は１６５ｃｍ程度でスタイルもそこそこ。髪は空色で目は茶色。
姉のことが大好きで姉を悪く言ったりする人は大嫌い。

セリーナが封印されたときに宿った現在を記せし禁断の書庫≪セカンドライブラリ≫から情報を読み取り禁呪を使用。現在まで生きており、王都メアスフィアのスフィア城の奥に隠れ住んでいる。
禁呪を使った結果精霊となり国そのものと契約して国の守護精霊となっている。そのため、首都のメアスフィアは陥落することなくこの５００年を過ごしている。

ルーキス・メフィスト・アインスフィア

種族：人
年齢：１８
性別：男
魔法：召喚魔法・現代魔法
召喚：楯の精霊セフィール・剣の精霊ヴァルア・炎の精霊イフリート・水の精霊ウンディーネ・風の精霊シルフ・土の精霊ドリアード・雷の精霊ヴォルト・氷の精霊フロスト・光の精霊アーリアル・闇の精霊ティアリアル
特殊：精霊の加護

スフィア王国の第三皇子だが、王位継承権の序列は一位。
性格が非常に温厚でやさしい。その為、生きている兄二人と姉一人を抜いて継承権一位を持っている。
見た目は背が高く引き締まっている。髪は空色で瞳は青紫。
生まれたときより精霊に好かれていることから多くの精霊の加護を受けている。その為か魔法は苦手で、召喚契約を結んだ多くの精霊達と戦うスタイルをとる。

ミア・シア・カシミア

種族：人
年齢：１７
性別：女
魔法：現代魔法・融合魔法
特殊：魔眼（人の情報を見る）

商業国家カシミア王国の第二王女でルーキスの婚約者。
ルーキス同様、性格は非常に良い。人当たりも良く結構な人気者。
背はあまり高くないが１６０程度でスタイルは非常に良い。髪は長髪の茶色、瞳は黒。
幼いころよりルーキスが好きで念願叶って婚約者となった。
人の情報を見ることができる魔眼を持つが、魔眼で見れる情報は名前・出身地・所属国等の割と普通の情報のみだがスパイであるかなども見破ることができる。偽名すら見抜ける。本人としてはあまり盗み見るのも悪いと思い滅多なことでは使わない。

登場人物紹介（後書き）

随時更新していきます。

現在までの出演キャラまでできていません。
がんばって書きますがご容赦を…。

第零話　ありふれた魔王の終わり（前書き）

はじめまして小鳥遊輝です。
本当は初めてではございませんが＾＾；
皆様が読んで楽しんでいただけるような作品ができれば幸いです。

第零話　ありふれた魔王の終わり

「ゼノン。あなたの野望もここまでよ」

少女がどこか誇らしげにい言う。ただ、少女はほぼ満身創痍の様相であり、ゼノンと呼ばれた男はどこか嘲笑うように少女に答える。

「その状態でどうするのだ？勇者はすでに我に倒され、その他の仲間たちもここに来るまでに倒れておる。そなたが我に勝てる要素などどこにも見当たらぬな。諦めるべきはそなたではないのか？」

そういう彼に少女は言い返す。

「ベイだってあなたに勝てるかわからないのにここに来るほどバカじゃないわよ。最初から私をここまで連れてくるのが彼らの目的であってあなたを打ち倒すのは最初から私の役目よ」

少女はそういうと戦闘態勢をとる。ゼノンも同じように戦闘態勢へと移る。

「そうか。だが、我に勝てるものはおらぬよ。我が魔王と呼ばれる理由（わけ）を知らぬということはなかろう？」

「わかっていないわけないでしょう？でもね、それを何とかできるからここそここに私は来たのよ」

ゼノンはやはり嘲笑う。そんなわけはない、何故自分が魔王と呼ばれるのか。

それは彼に一切の魔法が効かないことと強靭な肉体によりほとん

どの物理的な攻撃が通らないことによるものである。

「ふむ。では、やってみるがよい。これでそなたが倒れれば勇者達は我に負け、世界は我に刃向うこともなくなるであろう」

そうして戦いは始まったかのように見えた。だが、次の瞬間には戦いは終わっていた。

少女がゼノンの後ろに立ちその首筋に噛みついていた。

「な!?まさか……貴様…吸血種か!!」

ゼノンの驚きの声に少女は笑いながら答える。

「そう、あなたに魔法が効かないことは誰でも知っていること。でもね、直接体内に魔法を流し込んでしまえばどんな種族のものだって効く。それを知らないはずはないわよね、魔王様?」

少女がそう言うとゼノンの体が光りだした。

「くそっっ!!離れろ!!」

ゼノンは焦り少女を引きはがそうと必死になっている。しかし、一度噛みついた吸血種を引きはがすなど不可能に近い。

そして、しばらくした後少女は自分から離れた。

「これで終わりよ。破滅の術式を打ち込んだから半刻もせずにあなたは死ぬわ。まあ、私もただでは済まないけどね」

そう言う少女の体はただでさえ小さかったのに先ほどより縮んでいた。
するとゼノンは大きな声で笑い始めた。
「ふはははははははははははははは！！」
「なにがおかしいのかしら？」
少女は問う。ゼノンはその後もしばらく笑った後、語り始めた。
「なるほどな。なるほどなるほど。つまりはそなたは最初から我と相討つ覚悟であったということか」
「そうよ。打ち込んだ術式は破滅と呼ばれるものだわ。そんなものを零距離で撃ってとしてもあなたには通じない。そしたら私の魔力は尽きて私たちが負けるのは目に見えてる。そんなことはわかってた。だからこそ、こんな方法でしか勝負を決めることにしたの。でも、この方法での結末になるのを知っていたのは勇者であるベイと妹のサフィだけよ。
これは、私が死んでもいいなんてことじゃないけど、それでこの世界の未来が救われるならいいの。彼らは止めたけど私はいいのよ。どうせ生き残っても永遠に近い時間を生きることなんて私には耐えられないもの」
そう言うと少女はその場座り、魔王ゼノンに向けて言った。
「さあ、私を殺しなさい。今なら私を殺せるわ。すべての魔力を使い切り、足りなかった魔力を自分自身で補った後の真祖ならば人間にでも殺せるわ。ましてや、あなたは魔王よ。できないはずないわ

よね？」

少女はその場で目を閉じ刻を待った。しかし、いくら待てどその時は来ない。

しばらく経った後、ゼノンはこう言った。

「そんなことできるか。我は負けたただの敗北者だ。いまさら、そんなことであがけるか！！死にたいのならば勝手に野たれ死ね！！我に殺された者としてでも名を残すつもりか！！」

少女はビックリし思わず眼を見開いてしまった。

「そうか…。魔王にも義の心はあったのね……」

そうして両社はだまり時のみが過ぎゆき、魔王の体が消え始めたとき突如として魔王が言った。

「死にたいようだったなそなたは。しかし、そんなことさせてやるものか。永き時を苦しみ悩むがよい。それが我が最後に落とす絶望なり…！」

そう言うと少女の足元に魔法陣は発生した。それは、少女の体を飲み込みながら魔王と共に少女を消してゆく。

「それは封印だ。永遠に世界の狭間でさまよい死に続けながら生き続けよ！！死よりも恐ろしき永遠の絶望を味わうがいい！！はっはっはっはっは……」

そう言うと魔王は姿を消した。
少女は、
「あぁぁ。最後の最後で詰めを誤ったかな…。ごめんねベイ、サフィ。もう会えないとは思うけど、いつかきっとまた戻ってくるからね……。」
少女はそう言うと姿を完全に消した。

こうして魔王ゼノンの起こした戦争は幕を閉じ、世界に平和がもたらされた。

一人の少女の死によって……

第壱話　魔王召喚の儀式と聖女の復活（前書き）

書いてますがきついです。
時間かかりつつも細々と続けることになるのかなぁ…。

第壱話　魔王召喚の儀式と聖女の復活

ここはどこだろう。
ずっとここにいたような気がするのにここがどこだかわからない。
私は誰なのだろう。
大きな何かを成し遂げたはずなのに今は誰だかわからない。
なんでこんなところにいるのだろう。
私をここに追いやったあいつの声は思い出せるのに、なんて言っていたのか全く思いだせない。
大切な何かを守るために戦ってたはずなのにその何かが思い出せない。
そんな思考の繰り返し。いい加減に、眠っているであろう私は目覚めたいと思うけれど目覚め方なんてわからない。
いいや。そもそも、目覚めながらに眠っている。眠りながら目覚めている。そんな矛盾が矛盾でないこの場所でどうすれば良いのかなど全くわからない。
だから、私はここに永遠にいるんだろう。そう思う。
生きながらにして死んでいる。死んでいながら生きているこ場所

で…。

＋＋＋　†　＋＋＋

ある世界のある場所では今、魔王を復活させ、その力をもって世界を手に入れようとしている愚か者たちが集まり玉座の前で奇妙な儀式が行われていた。

黒衣を着た男や女が入り混じり、大きな壺の周りで奇妙な言葉を並びたて、今か今かと儀式の成功を夢見ている。

大きな杖を持った恰幅の良い太った司祭のような人物が躍り出て、壺の前で何かを唱え始めた。

「ああ、魔王よ。復活したまえ。そして我らにその力を与えたまえ」

つまり彼らは魔王を復活させ、力を手に入れようとして、この危険な地まで赴きこのような儀式を行っているのだ。

今、彼らのいる場所は、今は亡き魔王ゼノンが倒された場所であ

り、魔王の城の玉座の間であった。

魔王の城付近は危険地帯であり、≪黒の庭園≫と呼ばれる強力な魔物が住み着いている場所の真ん中に魔王の城は存在する。

ここを越えてくるに当たり彼らは当初の人数のおよそ五分の一まで減っていた。それでも膨大な数の人間がこの場にいる。

彼らが何を考え、何を欲しているのか。それは、簡単な言葉で言えることではないが、つまるところ世界に絶望し、「この世界を魔王と共に自分たちの手で壊してしまおう」とか、大きな権力や金を欲し「力を得て国を作り、豊かな生活をしよう」などの腐った人間たちがつまらぬ希望を叶えんと魔王を復活させようとしているのである。

「おお、魔王よ。復活したまえ。そして我らにその力を与えたまえ」

長い時間彼らはここでこのように祈り続けている。一心不乱に。

「ああ、魔王よ。復活したまえ。そして我らにその力を与えたまえ」

そして彼らの待ち望んだ時はきた。壺からは光が放たれ何かを示す兆候が現れ始める。そして彼らは狂喜乱舞する。

彼らの思惑とは全く違う存在が出てくるというのに…。

＋＋＋　†　＋＋＋

≪ここ≫にいた少女は一筋の白い光を見つけた。

少女にはそれが何かはわからなかったが≪ここ≫にいることに気付いてから初めての変化だった。

だから少女はその光のある方へと進んでいく。

≪ここ≫にいた少女にはその光は温かいものに感じるのだろうか。目を細め、その顔は笑顔に満ち溢れていた。

そして少女は光の前にたどり着き、その光に触れた。

そして少女は忘れていたすべてを思い出し、≪ここ≫つまり魔王が自分に掛けた封印の空間より抜け出した。

＋＋＋　†　＋＋＋

少女が気付いたとき、そこは大きな壺の中だった。

しゃがんでいたようで立ち上がると目に映ったのは大量の黒衣を纏った愚か者だった。

少女が壺より出てきたことに気付いたのか愚か者たちは再び大きな声を張り上げ、周りの者たちと喜びを分かち合っている。

（ええっと、何この状況。全くわからないんだけど…。私何かしたのかな？）

少女は彼らがなぜ喜んでいるのか全く分からなかったようで首をかしげ状況を把握しようとしている。

そこに大きな杖を持った恰幅の良い太った司祭が出てきて言った。

「おお、魔王ゼノンよ。我こそはお前を蘇らせし者なり。わが名はアルベルト・ディーン・バッハなり。我に従え」

司祭がそういうと周りにいた者たちは静かにかしずき少女の前に歩いてくる。

（こいつ何言ってんの？魔王ゼノン？なんでここで、あのいけすかない私を封印しやがった魔王の名前が出てくんのよ）

そのように少女が思っていると、司祭は

「聞こえておらんのか？もう一度言うぞ、魔王ゼノンよ。我こそはお前を蘇らせし者なり。わが名はアルベルト・ディーン・バッハなり。我に従え」

馬鹿馬鹿しい。少女は思った。

（つまり、こいつらはゼノンを復活させて力を手に入れようとしたわけだ）

少女は瞬間的に理解すると、周りにいる阿呆共に向けて言葉を放った。

「何を勘違いしてるかわかんないけど、魔王ゼノンは死んでるは間違いなくね。そして、私はゼノンなんかじゃないわ」

少女が事実を述べた瞬間、愚か者たちは一斉に騒がしくなる。

それを司祭は時間をかけ治めると、少女にこう問いかけた。

「では、そなたは何者だ？」

問いかけられた少女は答える。

「私はセリーナ・A・アインスフィア。ラブリオール王国より派遣された魔王討伐隊の隊員。つまり、勇者の仲間よ」

第壱話　魔王召喚の儀式と聖女の復活（後書き）

文章が稚拙です。
３人称で書くのは難しいです…。

第弐話　残酷な聖女（前書き）

※一部魔法の発動呪文を変更［１１／０４／２５］
一部段落等を修正［１１／０５／１８］

第弐話　残酷な聖女

「私はセリーナ・A・アインスフィア。ラブリオール王国より派遣された魔王討伐隊の隊員。つまり、勇者の仲間よ」

セリーナがそう言った瞬間、そこにいた者たちは凍りついた。

セリーナは何が起こっているのかわからず、しばらく黙ることにした。

黙りつつも今自分のいる場所に気付き、とりあえず壺から脱出し、辺りを見回し、玉座に座った。

すると、凍りついていた黒衣の集団が我を取り戻し、一斉に騒ぎ始める。

「セリーナ・A・アインスフィアだって!?」「なんで魔王様じゃなくて聖女が復活を!?」「何故だ!!何故だ!!魔王様復活のはずが!!」「馬鹿な!?何故聖女が!?」「こんな筈は…。」「嘘だろ…。嘘だよなぁ!!」「どうして!?どうしてなの!?」

次々と飛び出してくる言葉の数々。するとあの恰幅の良い司祭アルベルトが騒ぎを鎮めた。

「静まれーい!!静まらんか!!」

司祭はその場を鎮めた後、玉座に座る少女に向けて言葉を放つ。

「その玉座は魔王様のみが座ることの許される場所なり。貴様のよ

うな素姓の知れぬものが座っていい席ではないわ！！」

そう言うとアルベルトは持っている大きな杖をこちらに向けた。
そして何かを口ずさみ始めた。

「【現（あらわ）るは始原。其（そ）は始まりを示す火なり】」

何を言っていたのかセリーナには理解できなかった。だが、目の前の司祭アルベルトの頭上に火の球ができたことで表情を変えた。

アルベルトが口ずさんだのは呪文。俗に言う魔法を発動させるための手段だ。それは、選ばれた者だけが行使できる奇跡の術。それをこの男は使ったのだ。

「驚いているか？そうだろう。だが、苦しむ暇など与えてすらやらん。死ね！！くらえぇぇい！！ファイアーボール！！」

アルベルトの頭上に展開していた火の球は打ち出された。向かうのはセリーナの元。

迫る火の球にセリーナは短く、しかし、意味のある一言を口ずさんだ。

「【消えろ（デリート）】！！」

その言葉が紡がれた瞬間、セリーナの元に迫っていた火の球は消え去った。

何が起きたのか。アルベルトにはわからなかった。自分の放ったファイアーボールは確かに少女の元へと向かって飛んで行ったはず

だ。

なのにもかかわらず、ファイアーボールは少女の元へとたどり着くことなく消え去り、何事もなかったかのように玉座にちょこんと座っている。

確かにアルベルトの起こした魔法はちゃんと少女に向かって行った。しかし、少女が何かを言った瞬間ファイアーボールは消え去った。

彼らの中には何が起こったのか理解できるものはいなかった。

そもそも、彼らの中に魔法が使えるものはごくわずかである。しかも、その知識は魔法学校で習うことのできる初級中の初級の魔法だけである。なので、少女が起こした現象を理解できるほどの知識を持ち合わせているものなどここにはいなかった。

「全く。危ないわね。思わず消しちゃったじゃない」

セリーナは思わず魔法を使った。さすがにくらっても何の影響もないが眼前に突然火の球が迫ってきたら誰だってビックリする。それでとっさに火の球を消した（・・・）。

使う魔力量が半端ではない存在削除の魔法を…。

しかし、セリーナがそれでなにか体に不具合を起こしたりはしていなかった。そもそも、絶対的な魔力量が違いすぎて勝負にすらならないのである。

「何をしたんだ貴様！！」

「簡単な話よ。否定して消した。貴方達ごときが私を打倒し得ることは万が一にもあり得ないことだけど」

セリーナは種を明かしたが、それを理解できているものは一人もいない。

「消した？そんな魔法はないはずだ！！」

「そうだ。そうだ」と、後ろにいた黒衣の集団が口をそろえて言っている。

セリーナは思う。なんて馬鹿な集団だろうと。

「魔法は奇跡を起こすものよ。その魔法という現象で説明できないものはない。つまり、人の思い描くことができるすべてのことは魔法という事象で説明できる。だから、そんな魔法が存在するわけがないというのは凝り固まった考えね」

セリーナは懇切丁寧に説明してやった。簡単なことだ。というよりそれが当たり前だった。

魔法は奇跡の技術である。何時、誰が、どのようにしてこの魔法という奇跡の術を完成させたのかは謎であるが、この魔法という技術において説明できないものはなくなった。故に、魔法とは奇跡の技術なのである。

「どうしたのかしら？もう終わり？」

セリーナはアルベルトを挑発するように言葉を並べた。

「終わるものか！！死んで、そこからどいてもらう！！皆のものあやつを殺せ！！」

アルベルトがそう言うと黒衣の者たちが次々と武器を取り出し始める。中にはアルベルトと同じように杖を持ち出し呪文を唱え始めた者もいる。

「そう。まあ、いいわ。殺される覚悟のある奴だけかかってきなさい。その覚悟がない奴は戦う価値もない！！」

セリーナはそう言うと立ち上がり、空間に手を突っ込んだ。そこから取り出したのは無骨な二本の大剣。先端が垂直に曲がったまさに狩るための剣。

「そうそう言っておくわ。貴方達みたいのを放置して、本当に魔王に復活されると困るから全員殺すつもりだから」

セリーナがそう言った瞬間、戦いは始まった。いや、戦いではなく虐殺が始まった。

そう、勝負になんて一切なっていなかった。

セリーナは考えた末、最後にアルベルトと名乗った司祭を殺すことを決め、黒衣の集団から片付けることにした。

考えなしに向かって来る男を右腕に持った大剣で袈裟切りにする。

その一撃で男は左の肩口から右の腰辺りまで真っ二つに切り落とされる。血が飛び散りかかるが気にせず、次に向かってきている人間を左に持った大剣で水平に切り、これまた真っ二つにする。

それを見ても、黒衣の集団は怖気づいたりせずに向かってくる。

「そうでなくちゃね。かかってきなさい殺してアげル」

そこからは本当に虐殺としか言えない光景が広がっていた。

セリーナは素早く動き回り次々に黒衣の人間の死体を量産していく。あるものは首を切り落とし。あるものは四肢を切断したり。また、あるものは脳天から真っ直ぐに切り下ろし殺したりした。

まさに一方的、黒衣の者たちが放つ魔法はセリーナにはあたらず、味方にあたったりしている。

そうして、殺し、殺し、殺し続けアルベルト以外のすべてのこの玉座の間にいた人間はこの場にはいなくなった。

「さあ、どうするのかしら?他の人間は全員死にましたよ?」

地獄絵図が広がっている。人間からただの肉塊になり下がったものが広がっているこの空間でセリーナとアルベルトは対峙している。

「関係あるものか!!人ならまた集めればよい!!貴様のような正体の知れぬものを放置するよほど危険だ!!」

そう言うと魔法を起動させる。

「【噴き出すは魔炎（まえん）。顕現（けんげん）せしは焼き尽くす業炎（ごうえん）なり。我は業なる炎を背負いて全てを燃やしつくさん】！！ムスペルフレイム！！」

発動させたのは火の上位呪文。その炎に狙われたものは必ず灰となると云わしめた最強クラスの呪文であったが、

「ふうん。よくわかんない呪文（スペル）けど火の魔法が得意みたいね。でも、効かないよ。【すべてを守りし絶対の盾（シールド・オブ・アイギス）】！！」

セリーナの発動させたのは絶対防御の盾の魔法。すべてのものから使用者を守るその盾に守られたセリーナにムスペルフレイムが届くことはなかった。

二つの魔法による勝負は見ずともわかる。阻まれたムスペルフレイムは消え去り、無防備に立つアルベルトだけがその場に残された。

「嘘だ…！！そんな馬鹿な…！！防ぐことができるはずがない……！！」

アルベルトは自分の魔法が防がれたことにパニックを起こし、なにもせずただただ突っ立っている。

「確かによく練られた魔法だったけどただそれだけ。制御がなってない。まあ、どちらにせよアイギスを貫けるほどの威力はなかったけど」

感想を述べたセリーナはゆっくりとアルベルトに近づいてゆく。

「来るな！！来るな！！この化け物め！！」

必死に逃げようとするアルベルト。だが、足がまるで動かないまるで何かにつかまれているかのように。

「化け物であることは否定しないわ。でも、醜い欲望をなすがままに垂れ流す貴方のほうがよっぽど化け物にみえるわ」

ゆっくりゆっくり近づいてくるセリーナに半狂乱になって叫ぶアルベルト。もはやアルベルトには逃げるすべもなく、立ち向かう気力も残されてはいなかった。

そして

「さようなら。もう二度と会うことはないと思うわ」

そう言うと、大剣を振りかぶり振り下ろした。

アルベルトの体は裂け血を噴き出している。

「ふぅ。疲れた」

セリーナはその場で座り込み、今、自分の置かれている状況を把握するために考え始めるのだった。その、血に塗(まみ)れた服のまま。

第弐話　残酷な聖女（後書き）

内容が稚拙すぎるのかなぁ…。
もっと精進したい…。

第参話　≪黒の庭園≫とセリーナの体（前書き）

説明の回です
ほとんど進展しません。

第参話　≪黒の庭園≫とセリーナの体

思い出せたのはゼノンを倒し、消える寸前に封印をかけられたところまで。それ以降のことは一切覚えていない。というよりも封印されていたのだから覚えてるほうがおかしいのかな。

そう思い直すとセリーナは城を出た。空は暗く、夜になっているようだ。

ここは、魔王ゼノンの住んでいた城の外。この場所はこの城が立つずっと前より最悪の地と呼ばれていた。魔王の城が建ってからここは魔王の城を守る庭園として≪黒の庭園≫と呼ばれるようになった。

≪黒の庭園≫は冒険者ギルドが定めている魔物のランクがA以上しかいない危険地帯で、立ち入るものは「その命を覚悟せよ」と言われているまさに最悪の地である。

人間が滅多に立ち入らないこの地の植物には希少価値の強いものも多いため、冒険者がそれを求めて立ち入ることもあるが無傷で帰れることは絶対になく、生きて帰ってこれる確率もまた一割以下という極悪の地なのである。

そんなところを鎧も何も装備していないセリーナが歩いていれば魔物たちにとってはかっこうの餌にしか見えない。

なのにもかかわらず彼らはセリーナを襲わない。襲うはずがない。襲えば自分たちが死ぬことが分かっている以上襲えないのである。

普通の場所で育った魔物と違い多くの強力な魔物が跋扈する≪黒の庭園≫で生き抜くためには自分の力を過信せず、相手の力を見極

めることに特化しているためである。

そんなことは露も知らず≪黒の庭園≫を血塗れの白いワンピースだけを着て歩いている。

今、彼女が考えていることは先ほどの魔王の城での戦闘中に感じた違和感である。

「さっきの呪文(スペル)は一体何なんだろうな？」

セリーナは先ほどの戦闘で司祭が使った呪文(スペル)が自分の知っているものとは全く違うものだった。

彼女が知っている魔法とは基本的に概念を固定、発動させるための呪文(スペル)自体が短く発動まで時間が余りかからないが術者本人の魔力や実力が顕著に出るもので発動は出来ても威力が全く出なかったりするのだ。

しかし、さっきの司祭が使っていた呪文(スペル)は明らかにおかしかった。あの司祭から大きな魔力は感じられなかったのに発動した魔法の威力はすごいものだった。自分の知ってる魔法ならばあの司祭にあのレベルの魔法は発動できないはずである。

だからこそ、この世界は自分のいた世界なのか？いた世界だとしてあの封印から何年たっている？

そんな疑問が浮かぶのだが確かめようがない。だからこそ無理に【空間転移(テレポート)】を使って岩の中にでも転移してしまえば死んでしまいかねない。

そんなことより一番の疑問は自分の体がどうなってしまったのかだ。

あの時、ゼノンを倒すために使った呪文（スペル）は破滅の呪文である。この呪文は使用された人物を破滅、つまり死亡させるものだ。しかし、この呪文は前提条件として莫大な量の魔力を持っていなければそもそも発動できない上に、副作用で使用者本人の生命力等をいくらか持って行く。

（私の場合、戦闘後に話ができるくらいの時間があったからわかる。生命力はさほど持って行かれてない。何を持って行かれたのだろう）

彼女の場合は種族的問題もあったのかほとんど生命力を持っていかれていない。その代わり何かと身長を持って行かれた。

そのため、彼女の身長は縮みただでさえ低かった身長がさらに低くなり、十歳くらいの子供に見える。

（身体能力に関しては一切落ちてなかった。じゃあやっぱり不死性を持って行かれたかな）

彼女の種族は真祖。しかし、人間から成り上がった（・・・・・・）真祖である。

そのため、彼女はそう考えたのである。真祖としての特性、吸血鬼としての特性であるその不死性が持って行かれたのだと。

（不死の特性か。つまり下手したら死んじゃうってことだよね…）

彼女は真祖になったその時から、ずっと無理な戦いを続けてきている。それを強制して直していかなければ今後は死んでしまう。

そう考えて、セリーナは憂鬱になる。自分の今やるべきことはわからないけど、何をするにしても不死っていうものはそれほど便利だったのだ。

（とりあえず近くの村まで行って着替えを買わないとさすがに気持ち悪いな…。地図も買ってここがどこなのかの確認とかもしたいな）

そう考えセリーナは足を速めた。

第参話　≪黒の庭園≫とセリーナの体（後書き）

まずは、一区切りです。
はっきりいってこれでようやくプロローグが終わった感じなのかな？

まずは、お礼を。
自分ではよくわかりませんが正直文章が稚拙に思えて仕方ありません。
しかし、そんな文章にも関わらずお気に入り登録をしてくれた方が2人も。
ありがとうございます。

もっと精進しますので、生温かいめで見守ってくれるとうれしいです＾＾

第肆話　辺境の村≪クロウンティア≫（前書き）

学校が始まりました。
これからは不定期に投稿します。

※諸事情により村の名前を変更させていただきました。［１１／０４／１５］
［２０１１／１２／２０］一部変換ミスを修正

第肆話　辺境の村≪クロウンティア≫

記憶を頼りに≪黒の庭園≫を進むと村が見えてきた。村は柵で覆われていて周りから村の様子を窺うことはできなかった。

記憶が確かならばこの村の名前は≪クロウンティア≫。世界の中でも最も有名な冒険者の集まる村であったはず。

この村の周りには≪黒の庭園≫以外にも魔物が多く住む地帯が散在している。そのため、レベルアップを望む多くの冒険者が集まる街である。

ついではあるが、魔物が多く住む場所には頑丈でよい商品となるものも多いためそれを買い取るための多くの商店もある村である。

しかし、それだけ多くの商家がありながらいまだ村なのは、やはり魔物の被害もそれだけ多いということである。

村の前までたどり着き、セリーナが門番に話しかけようとすると門番はセリーナが言葉を発する前に止められた。

「止まりなさい。さすがにその状態で村に入れるわけにはいきませんので先にこちらで洗浄してください」

門番は血塗れの状態で村にはいられるのはさすがに見た目から悪いから風呂に入って洗うように促してきた。

「そうさせていただけると助かります。ですけど、服がこれしかないんでどうしましょう」

もともと、すぐに風呂に入るつもりだったセリーナにとってうれ

しい限りのことだったが、いかんせんお金はあっても服はなかった。

そうすると、門番は

「そういう方は結構多いんですよ。ですから簡易の服が用意してありますのでそこから取っていってください。差し上げますのでご自由にしてください」

そう言うと私を外周にある風呂へと案内し、門番の仕事に戻って行った。

＋＋＋　†　＋＋＋

門番アルフレッド・ピース・ファンクロウンは先ほどの少女が見たことがないはずなのに見たことがある、というより知っているような感覚がしてならなかった。

何故だろうとアルフレッドは疑問に思いつつも考えていた。

「なぁ。お前が対応した少女なんだが、見たことねぇか？つか、知

ってるような気がしないか？」

考えていたら同僚のドルトス・ブリティスに話しかけられた。内容は今自分がまさに思っていたことと同じでびっくりしたが。

「だな。しかしなぜだろう、この胸につっかえた言葉が出てこないような感覚は…」

そう。頭では理解できるのだがそれを答えとして出せない。

あの鈍くも光る緋色の髪とそれを映えさせる赤銅色の目。何だろう聞いたことがあるはずなのにわからないこの感覚。

考えているときにふと言葉が浮かび声に出した。

「緋色の聖女様」

つぶやいた瞬間何故だか頭の中で考えていたすべてがかみ合ったような気がした。

「そうだ。話に聞く緋色の聖女様の姿にそっくりなんだ」

そう。まるで、五百年前に魔王ゼノンを打倒し、世界を救ったとされる。緋色の聖女セリーナ様にそっくりなのである。

といってもその髪の色と眼の色がそっくりであるだけであり、その容姿については一切伝えられてないため本当にそっくりなのかはわからない。

でも、先ほどの少女はまるで生まれ変わりのように容姿がそっくりだった。

「なぁ、アル。風呂入っちまった以上どうしようもないがあのままだと村が大騒ぎになるぞ？」

アルフレッドの言葉で理解したドルトスは懸念を同僚へと伝える。

「そうだな。風呂から出る前に家の使用人に言って隠すようにしてもらうよ」

そうして再び門番の仕事に戻って行った。

＋＋＋　†　＋＋＋

そんなやり取りがなされているとも知らずセリーナは案内された風呂へとやってきた。

「うわ～、ひろ～い」

思わずもれたそんな一言。

今、この風呂場には人は誰もいないようである。しかし、そんな

ことは関係なくマナーとして体を洗うために洗い場へと向かう。

洗い場につくとまずは血で汚れた体をまずは水で洗い流す。その後、置いてある洗剤を使い髪を丹念に洗い、体も洗う。

体を洗っていると、風呂へ入ってくる足音が聞こえた。

「それにしてもやっぱり庭園の奴らは手ごわいわね」

「そりゃそうだよ。Aランク以上しか居ないんだから。でも、出くわしたのがAランクだけでよかったよ。あれでSランクがいたら死んでたね」

どうやら、二人組であるようだ。先ほどまで≪黒の庭園≫にいたようである。

その二人組が洗い場までやってくるとセリーナを見つけた。そして、声をかけた。

「こんにちは。同業者ですか？」

声をかけられるとは思っていなかったので、思わず言葉が詰まる。

「何驚いてるのよ？」

「いきなり声かけられたら誰でも驚くよ。全く。嬢ちゃんごめんね。このアホは無神経でね」

「誰がアホよ。誰が」

二人が話しているのを聞き、我に返ったセリーナは挨拶した。

「すいません。声をかけられるなど思っても見なくて…」

礼儀正しく声を掛け返した。昔、ベイに叩き込まれたため話すときなどはどうも丁寧な口調になってしまう。戦闘時はさすがに違うが。

だが、二人組はまさかそんな礼儀正しく返してくれるとは思っていなかったようで驚いている。

「まさか、そんな礼儀正しく返されるとはビックリしたよ。こちらこそすまんね、いきなり声をかけちまって」

その後、この二人と一緒に話しながら風呂につかると自己紹介をすることになった。

「あたしゃ、ビルレッティ・ポイズンレアだよ。見ての通り猫族（ワーキャット）だよ」

「私はファリアナ・レヴィアンス。鳥族（バーディア）よ」

二人が名乗ったのでセリーナも答えた。

「私はセリーナ・A・アインスフィアです。種族は吸血鬼（ヴァンパイア）で、一応（ハイデライト・ウォーカー）

真祖です」

答えた瞬間、二人は固まった。セリーナは自分がおかしなことを言ってしまったのかと不安になった。

二人が我に気付き、目頭を押さえる。その後、ビルレッティが話し始めた。

「あんた、その名前本気で言ってるのかい？」

「はい。最低だったとはいえ親のくれた名前を捨てるほど私は馬鹿じゃありません」

そう言うと、ビルレッティは頭に手を当て話を続けた。

「今、あんたの言った名前は伝説に残る魔王を倒した緋色の聖女様の名前だよ。フルネームまで知ってる人は多くはないけどね。でもね、さすがに一言一句同じ名前をつける親はいないよ。恐れ多くてね。セリーナって子はいまだに多いけど、あんたみたいにフルネームまでかぶる人は絶対にいないはずだよ」

そう言われて、ビックリした。

（え、何それ？緋色の聖女？それが私？いくらなんでもおかしいでしょ…）

「いまだに聖女様は伝説の英雄よ。さすがに今の名前嘘なら謝りなさい。私たちが良くても世界の人はゆるしてくれないわよ」

今度はファリアナが言った。

セリーナはよくわからなかったが聖女が自分なのか確信が持てなかった。
なので、質問をした。
「一つだけ聞かせてください。今は、いつ（・・）なんですか」
ビルレッティは答えた。
「メルデア暦７８５年の初秋の月だよ」
セリーナは、聞いて確信した。ここは、私のいた世界だと。しかも、魔王を倒した時より五百年もたっていると。
「で、どうなんだい？あんたの名前は嘘なんかい？」
聞かれて正直に答えた。
「ええ。間違いなく、私はセリーナ・Ａ・アインスフィアです」
「じゃあ、貴方は自分が聖女だって言い張るのかしら？」
ファリアナが聞いてくるので、
「それはわからないわ。でも、間違いなく私はセリーナ・Ａ・アインスフィアです。そして、間違いなく私はこの手で魔王ゼノンを殺した。そう、絶対に…」
二人は絶句した。セリーナが言っていることが本当なら、聖女セリーナは生きていたということになり、世界が混乱するだろう。

でも二人はセリーナの言い方から彼女が嘘は言っていないと思ったなので二人は、こう言った。

「疑って悪かったね。でもね、覚えておいて。その名前は、世界的に相当有名になっている。貴方が名乗るとこういう風になってしまうわけだよ。

だから、その…あんたが本物の聖女様でもね……。その…名前は変えといたほうがいいと思うわけだよ」

「そうよ。今の名前を名乗ると今みたいな反応が返ってくることは確実よ。だから、偽名を使うほうがいいわ。それにアインスフィアは今じゃ王家の血筋をひく者だけが許された家名だから、名乗ると危ないわよ?」

こうして、セリーナはこの世界がどうなっているのかを知っていった。

余談ではあるが、この後セリーナは二人と話し込みのぼせてしまい、介抱されたのちアルフレッドの使用人に二人ともども連れて行

かれた。

第肆話　辺境の村≪クロウンティア≫（後書き）

正直、どういう方向に持っていきたいのかわからなくなりましたｗ
しばらくは村でのんびりとかな？

閑話　最後の王子による手記（前書き）

詰まったので、とりあえずお茶濁しの閑話です。

セリーナが聖女と呼ばれるようになった理由です。

［２０１１／１１／１９］ミスを修正

閑話　最後の王子による手記

ここに記すのは私ベイシス・クリストフ・ラブリオールが見聞きしたものであり、真実である。

＋＋＋　†　＋＋＋

魔王をセリーナが倒してから一週間。城の中は相変わらず退屈でやることもなかったそんなある日のことだった。

たまたま、私の父であり国王であるグロリアス・ババルドス・ラブリオールの部屋の前を通りかかった。

父の部屋には他にも何人かいるらしく、話し声が聞こえた。その声は、宰相や大臣・国の中でも有数の貴族たちのものだった。

そして、私は何となく嫌な感じがしたのでその話の盗み聞きをした。その話は私をひどく激怒させるものだった。

簡潔に言おう。彼らは最初から私に近づくセリーナを魔王を討伐して帰ってきたら殺すつもりであったと。そう言っていたのだ。そして、その手間もなく済んで良かったと。そして、自分たちの国が魔王を倒すという大きな手柄をあげたことで他の国からたんまりと謝礼金を受け取り、それをどう分配するかを話し合っていたのである。

私は自分の耳が真実を聞いているのか不安になった。自分の父がまさか自分が好意をよせていた存在に対し、そんなことをしようとしていたのだ。疑いたくもなる。

考えてみれば他にもおかしな点があった。

魔王を倒したのが私ということになっていたことだ。私はセリーナより先に魔王の元へたどり着きはしたが倒された。そのあと、セリーナが来て魔王を一撃をもって倒し、その後、魔王ともども消えてゆくのを見ている。

その時に私に魔王が語った言葉。そして、その消えた魔王が残した日記に書かれていた真実と理想を思い出す。

最初は魔王の言っていたことと日記に書かれたことに疑いを持っていた。だが、この父と国の重鎮たちの会話を聞く限り真実なのだろうと思えてくる。

魔王の語った言葉と日記に書かれてきたことをまとめるとこうなる。

グロリアス・ババルドス・ラブリオールは世界で人間を最高の種とおき、その他すべての種族を奴隷もしくは下等種とし、人間のみが繁栄する帝国を作り、世界を征服するつもりだと。そして、それを止めるために立ち上がり、すべての種とすべての人間を下らない闘争から守るために戦っていたと。

考えてみれば、魔王が襲ってくるのはラブリオール王国のみで他の国で魔王の軍勢が押し寄せただのという話は一切聞かなかった。（同調した一部の魔族が勝手に押し寄せたのは聞いてはいたが、魔王軍ではなかった）

だからこそ私はどうしたらいいのかわからなかった。そのため、このことをセリーナの妹サフィ（本名セフィリア・T（ティス）・アインスフィア）に相談した。すると彼女はとんでもないことを言い出した。

「ならみんな殺して、国を乗っ取ちゃえば？お姉ちゃんを苦しめようとした奴らに容赦なんて絶対にしちゃダメ」

そんなことを言っていた。ついでに、

「貴方がお姉ちゃんのしたことを言いたいのなら、あいつらがいた

ら出来ないものだからこそ、乗っ取っちゃうのが一番だと思うな？」

そう言ったのである。

その通りだと思った。だから私は決断した。

父をこの手で打ち取りセリーナのしたことを世界に示そうと。

そのためには、まずは戦力が必要だ。魔王討伐の際についてきた騎士たちは私の部下だ。せんりょくとしては、サフィの魔力もある。それに、亜人や魔族の人たちにも協力を得よう。皆が安心して暮らせる国を作るためにと頼み。

＋＋＋　†　＋＋＋

この手記の一週間後、ラブリオール王国の首都ハイゼンベルグは一日にして陥落。それは魔族や亜人それに人間が一人の王子の世界を変えるという思想に共感し、危険な思想を持つ一つの国とその国王並びに重鎮達を倒すという目的を果たすためであった。

そして、その王子は聖女の妹と結婚し、スフィア王国を建国し、すべての種族が安心し暮らせる国を建国したのである。

この後、スフィア王国の王となったベイはセリーナが成し遂げたことを書いた本を書き、それは後の世まで伝わる聖女の伝説となった。

閑話　最後の王子による手記（後書き）

「零話の魔王ゼノンとセリーナの話はそんなんじゃなかった」という人がいると思います。が、あれは後の世に書かれた衝撃の事実の部分を抜き聖女セリーナが一撃で倒した。という、都合良く改変されたのちの世に語られている物語ってことにしてください。ちなみにその関係上魔王様ものすごく悪者です。

第伍話　ファンクロウン邸と聖女の変身（前書き）

すみません。
遅れまくってます。

※一部誤字を修正［１１／０４／１５］
　一部表現を変更［１１／０４／１５］

第伍話　ファンクロウン邸と聖女の変身

セリーナが起きるとそこは知らない部屋の一室だった。

風呂でのぼせたセリーナは村に混乱を持ち込まないためにとファンクロウン邸に運ばれた。

「ここはどこ？」

「起きたかい？ここは村長の家だよ」

近くにいたビルレッティはセリーナが起きたのを見て声をかけた。

「ええっと。どうして村長の家にいるんでしょうか？確かお風呂に入ってたのは覚えてるんですが…」

「貴女がのぼせて倒れてしまったのよ。それで、介抱してたらメイドさんが来てね。貴女の髪と眼は聖女のものと一緒だから騒ぎになるってことで、門番をやっていた村長の息子が貴女が風呂からあがったら家に連れてくように言ってたみたいね」

近くにいたファリアナが経緯を説明してくれた。

「そうですか…」

（二人の話から私が世間的には聖女って呼ばれてるみたいね。呼ばれるようなことはしてないのに…）

そう思っていたら、扉が開きメイドが入ってきた。

「あら、起きましたか」

そう言うとメイドは近づいてきて、

「とりあえず、着ているものを脱いでください。服はこちらで用意しましたので」

そう言われ、セリーナは服を脱いだ。

渡された服は着やすい服でまるで何かの制服のようだった。

「よくお似合いですよ。では、当主様のお部屋に案内いたしますのでついてきてください。ビルレッティ様とファリアナ様も来てくださいね」

メイドについて廊下に出て階段を上ると扉の前で止まった。どうやらここが目的の部屋のようだ。

「では、当主様のお部屋です。くれぐれも粗相のないようにお願いします」

メイドはそう言うと扉を開けた。

セリーナ達は開けられた扉をくぐり中に入るとメイドは部屋には入らず静かに扉を閉めた。

部屋の中には少し年老いた魔族とがたいのよい魔族いた。

「君が例の聖女に似た子か確かに似ているな」

そう言葉に出したのはがたいのよい魔族だった。

「すまない。私は、クロウド・グリス・ファンクロウン。現在この村の村長を務めさせていただいているものだ。あっちにいるのは私の祖父でガウェイン・クロン・ファンクロウンだ」

そうすると、年老いた魔族は立ち上がり

「説明の通り私はガウェイン・クロン・ファンクロウンだ。みなさん、どうぞ座ってくれ」

ガウェインにそう言われセリーナ達はイスに座る。ちょうど二人と対面するように座ることになっている。

「ええっと。なんで私たちはここに呼ばれたんでしょうか？」

座ってすぐにセリーナが疑問をぶつけた。

「簡単な話だよ。息子に言われて君を一回家に入れてから髪の色なり変えてもらうつもりだったんだが…。そこの二人に話を聞くとどうやら君は本物の聖女のようだったからね。だから、話を聞こうと思ってね。君を部屋に呼んでもらったんだ」

クロウドの答えは予想通りだったので気にせず話を進める。

「つまり、私の話を聞くために呼んだんですね？では、どんな話を？」

「まあ、君が本物の聖女かどうかの確認と今後の予定についてかな」

クロウドはおもむろにガウェインに話を振った。

「で、ガウェイン爺さん。この子は聖女で間違いない？」

「そうだな。見た目が多少若くなっているが間違いなくセリーナ様だ」

そう断言した。

「まあ、本人確認は今ので良しとして今後はどうするんだセリーナ様？」

「とりあえず様づけや聖女って呼ばないでください…。私はそんな大層なことしたつもりはありませんから…」

セリーナはとりあえず言った。

「後、今後の予定は考えてませんね。なんせ五百年もたっているので、この世界がどうなっているのかも分かりませんから…。できれば、王都に行きたいですが…」

「王都か。まあ、王都はいろんな機関があるから、いいかもしれないな」

納得したようだった。

「まあ、なんにせよその見た目だと目立つからどうにかしないとね。名前も今のままはさすがにやばいでしょ？だからそこら辺を考えよ

っか」

「そうですか…。名前はちょっと変えたくないんですが…」

「一番変えなきゃいけないのは名前だからね。だから髪や目より先に名前を考えるよ」

こうして聖女の見た目を変更もとい変身は始まった。

第伍話　ファンクロウン邸と聖女の変身（後書き）

短くてすいません。
日常会話とか難しいですね。会話でつなげるとあら不思議、何を言っていたのやら…。
そんなわけで、適当な会話になったうえに短くなってしまいました。
セリーナの名前をどうするか…。名字ってか家名の部分を変えようとは思うのですが決まらない…。
とりあえず、更新は木曜か金曜になります。

第陸話　王都≪メアスフィア≫（前書き）

重要キャラ登場です。
［２０１１／１０／２２］変換ミスを修正
［２０１１／１１／１９］表現のミスを修正

第陸話　王都≪メアスフィア≫

セリーナがアズガルドで世界のことを学びながら聖女変身計画に身を投じているころ、王都≪メアスフィア≫の城の一室にて見合いの話がすすめられていたりした。

「父上…。俺はまだ結婚とかするつもりはないんだが、しなきゃならないのか？」

青年の名はルーキス・M（メフィスト）・アインスフィア。隣にいるガッチリとした中年の男性はこの国、スフィア王国の王ブラムス・G（ガスタルド）・アインスフィア。つまり、この青年ルーキスはスフィア王国の王子で時期国王候補であるということである。

「すまんな。本来は自分で伴侶を探してほしかったのだが、見合いの申し込みが多すぎてな。間違えて一人だけＯＫを出してしまったんだ。さすがに王としては今更断ることはできない。だから、会うだけでいいからやってくれんか」

「まあ、それならいいけど…。申し込みがあのカシミア王国じゃ断り辛いのもあるし…」

カシミア王国とはスフィア王国の隣にある国で世界的にも有名な商業をもとに発展した国家で首都である≪ヴァンガルド≫は世界最大級の商業都市でもある。

なお、カシミア王国はスフィア王国が五百年前に建国して以来の仲で当時は相当の金額を融資してくれたそうだ。その為、あちらで何かあると助けることも多いし、こちらで何かあるとあちらも助けてくれる。

そんな関係なので断り辛いのもあり今回の見合いをやらざるを得ないのだ。しかも、あちらの王女のことはよく知っているし、王女もルーキスのことをよく知っている。

だから、受けてしまえばきっと結婚まで一直線だろう。ということで乗り気ではないのだ。

「はぁ、あいつと見合いかよ…。マジで今更な気もするな。あっちは俺に好意を振りまきまくってるしな」

「わかっておるよ。お前があの子のことをどう思ってるかは知らんが、結婚するにしろしないにしろあまりぞんざいに扱ったりせんようにな」

「分かってるさ。一応な」

そう言って父の部屋を出た。

＋＋＋　†　＋＋＋

ルーキスは部屋に戻ると溜息をついた。

「はぁ…。あいつと見合いか…。別に嫌いじゃないしむしろ好きではあるが、今すぐ結婚したいほどではないしな…。」

先ほどから何度も出てきているあいつことカシミア王国の王女はミア・シア・カシミア。ルーキスと同じくスフィア王国にある総合教育機関、通称≪アカデミー≫に在籍し共に学んでいる相手である。

人当たりもよく性格もいい。一国の王女としては規格外の性格の良さから彼女のファンは多く、一週間で少なくとも三回以上は告白されているそうだ。

まあ、本人は前述の通りルーキスのことが好きですべて断っているそうだが。

「だけど、あいつのこと考えると考えさせられるな…。あいつと結婚したら間違いなくいい家庭を築けそうだし…」

考えれば考えるほどドツボにはまっていく。

「そういや、まだ日程は決まったなかったよな…」

ルーキスは何かを思いついたように考え始めた。

「そうか。日程は決まってないんだからしばらく考えたいってことで旅という名の家出を敢行しよう。アカデミーのクエストなら疑われることもないし」

そう考えたルーキスはすぐに準備を始めた。

＋＋＋　†　＋＋＋

メイドが朝の挨拶にルーキスの部屋に着いたときすでに部屋にルーキスの姿はなく机の上に置手紙らしきものが乗っていた。

メイドはそれに気付くとすぐに王のもとにその手紙を持って行った。

「失礼します！ブラムス様！大変でございます。ルーキス様が！」

「どうしたか？あいつが怪我でもしたか？こんな朝早くに」

のんきに話すブラムスに対し、メイドはひどくあわてている。

「のんきに言ってる場合じゃありません！ルーキス様のお部屋に姿がなかったので探してみたらお部屋にこんなものが…」

そう言うとメイドはブラムスに手紙を手渡した。

「何々？

『親愛なる父上へ

失礼とは思いましたがやはり今回の見合いに関しては納得がいきません。いくら相手が恩あるカシミア王国だとしてもさすがに納得のいかない結婚はしたくありません。

あ、別にミアが嫌いというわけではありませんが…。

なので、しばらく考えるために旅をしてきます。ゆっくり考える時間がほしいからです。城にいれば近いうちに見合いの日時を決められてしまうからです。そんなことになったら俺はきっとあいつとの結婚をしぶしぶ決めなければいけなくなると思います。そうしたら、きっとあいつを幸せにしてやることが出来なくなると思います。そんなことは、絶対にしたくありません。あいつのことは好きだからこそそんな軽々しく決めたくない、そういうことです。

P．S．　学園のクエストってことで出てくるので心配はいりません。帰ってくるときにはちゃんと決めて帰ってきます。

国王ブラムスが息子　ルーキス・M・アインスフィアより』

か」

読み終えると、ブラムスは笑い出した。

「はっはっは。まさか、わしと同じことをするとは…。血は争えん

な」

そんなことを言う王にメイドは「いいんですか？」と聞いた。すると王は、

「よい、放っておけ。あいつの人生だ。少なくともあいつはミア王女を幸せにしたいから家出したんだ。そんなあいつを連れ戻したところで意味はないだろう？」

「そうですね。では、失礼しました」

メイドが出ていくと、ブラムスはつぶやいた。

「全く…。好きならば好きといえんとは…。つくづくわしと同じだな。ちゃんと考えて帰ってこいよ、バカ息子」

そう言うとブラムスは朝食を食べるために食堂へ向かうのだった。

第陸話　王都≪メアスフィア≫（後書き）

総合教育機関≪アカデミー≫に関しては次話で説明します。

第漆話　変身した聖女と総合教育機関≪アカデミー≫（前書き）

説明ばかりですいません…。

［２０１１／１０／２２］変換ミスを修正

分りずらい表現を修正

第漆話　変身した聖女と総合教育機関≪アカデミー≫

初めに言っておきたい。私はこんなにいろんな人に体をいじられたのは初めてだ。

セリーナは髪の色を自身の魔法で変えることにしたが、服などは買ってきたものをいろいろと着せかえられた。というか着せ替え人形にされた。主にビルレッティとファリアナの二人だが。

着せかえられたものはワンピースから何から何までいろいろと着せかえられた。おかげでかなり憔悴してる。

それが終わると名前を変えるということで家名を変えることにした。最低な親とはいえくれた名前を変えるのは忍びないし、ベイのくれたＡの名前、独奏≪アリア≫という名前を消したくなかったっていうのもある。ちなみにアリアを考えたのは一人で戦う時の美しい姿は一人だからこそ映えていいた。とかいうことで独奏の意味を持つアリアという名前をくれた。まあ、普段名乗る時からアリアとは名乗らずＡを使っているからちょっとあれだけど…。

そんなことはどうでもいいとして、セリーナは村長やビルレッティ達と共に名前を考え、セリーナ・Ａ・エインフェリアと名乗ることにした。一応、名前の関係から普段はセリーナ・エインフェリアと名乗ることになるが。

ミドルネームが入るのは基本的に貴族や騎士の家だけだというからしかたなかったが。

閑話休題。

「それでどうするんだ？王都に行くんだろ？」

「はい。そのつもりなんですが、どうしようにも何も知らないものでよろしければいい案がありませんか？」

セリーナはクロウドに言われ答えつつ質問を返した。

「そうだな。現代を知りたいなら俺たちに聞くよりも、それらを詳しく教えてくれるとこがあるしそこに行くのはどうかな？ちょうど王都にあるし」

そう言うとクロウドはパンフレット的な何かを取り出した。

「これを見てくれ」

渡されたパンフレットは総合教育機関を紹介するものだった

総合教育機関≪アカデミー≫

ここは、ありとあらゆる人種を集め教育をする機関である。
ここは、ありとあらゆる人種を集め鍛練をする機関である。
ここは、ありとあらゆる人種を集め研究をする機関である。

故にここは総合教育機関≪アカデミー≫である。
我々は来るものを拒まず去る者は追わず。

意志あるものよここに集い、学び鍛え探求せよ。

「えっとこれは？」

見た感じは教育をしている機関だとは思ったのだが、それ以上は分からなかった。

「総合教育機関≪アカデミー≫だよ。
謳い文句の通りにあらゆる種族を拒まず集めて教育してくれる機関だよ。
何かを知りたいならここ以上の場所はないし、場所は王都だ」

そう言うとパンフレットを指さしながら続けた。

「一応、学びたいもの学べる最高の機関だよ。
それに、研究とかもできるし、今じゃほとんどの人がアカデミーに一度は入ってるよ」

「なおかつ、生徒であると同時に先生である。これがなかなかいい反響を呼んでいたりするんですよ」

「魔法研究はアカデミーに勝てる機関がないって言われるくらい先端を言っているんだよ」

矢継ぎ早に言われつつ話を理解したセリーナは、

「で、そのアカデミーとやらに入る資格は？」

「ないよ。いってるでしょ。『我々は来るものを拒まず去る者は追わず。』って」

「入学手続きをするならアカデミーに行って受付するだけでいいんだよ。ちなみに無一文でも受け付けてくれるよ」

「寮も完備してる。まあ、お金はクエストやって稼いで返すんだけどね」

要するにこういうことだ。入学したものは同時に冒険者ギルドに登録されてそのうえでクエストをして稼いで学費を払うっていうシステムがあるらしい。ちなみに教師をするか研究室を持ったりしても報酬がはいったりするらしい。

「そうですか。なら、入るのがよさそうですね」

そう言うと村長は、

「ちなみに今着てる服がアカデミーの制服だから行くならあげるよ」

そう言われありがたくもらった。

そのあと、着せ替えに使われた服を貰い、髪の色を魔法で銀色に変えた。

その状態で必要な下着等を買い足し村を旅立つことになった。

第漆話　変身した聖女と総合教育機関≪アカデミー≫（後書き）

そんなわけでうまくいけばルーキスと出合います。
ちなみにルーキスはあだ名で呼ぶことを考えています。

第捌話　向かうは総合教育機関≪アカデミー≫。しかし、金はあらず、食事もまた

［２０１１／１０／２２］変換ミスを修正

第捌話　向かうは総合教育機関≪アカデミー≫。しかし、金はあらず、食事も未

そんなこんなで準備は終わり、総合教育機関≪アカデミー≫に入学するために王都に向かうこととなった。

「では、ありがとうございました」

セリーナは深々と頭を下げた。

「いやいや。こちらこそ。また縁があったらぜひ寄ってくれ」

「分かりました。ではさようなら」

そう言って、セリーナは荷物を持って総合教育機関≪アカデミー≫に向けて出発した。

ちなみに、現在の街道は五百年前と違いかなり変わってしまっていて一人ではたどり着けないとのことだったので、ビルレッティとファリアナと共に行くことになった。

＋＋＋　†　＋＋＋

「お金がない…」

何日か経って今は、街道をかなり進みいくつかの町を越えたところにいた。

しかし、彼女らは、今ものすごいピンチに陥っていた。つまり、お金がないのである。

「まさか、スられるなんて…。うっかりだったよ…」

お金はまとめてビルレッティが管理していたのだが、先日町でスられていたことに気付かず現在は街道の真ん中で呆けている状態だ。

「ビルゥゥ…。おなか減ったよぉ」

そんなことを言っているのはファリアナである。それなりにいいとこのお嬢さんなので我慢があまりきかないらしい。

そんなこんなで今彼女らはお金なしで次の町まで行かなければならないのに、食料を買うのを忘れたという悲劇の真っ最中である。

「あの、魔物の肉を食べれば良いんじゃないですか?幸い少し外れれば魔物の多く生息する森のようですし」

セリーナは二人に提案するが、

「魔物の肉かい?あんなもの食ったことないから、正直食いたくないね。まあ、贅沢言ってる場合じゃないしそうすべきなんだろうけ

どね」

「そうね。食べたくないけどこのまま食べないで飢え死にするよりいいかも…」

そんなこんなで魔物狩りに出かけることとなった。

街道から少し外れた森。多くの森はたくさんの生物が存在し豊かである。それゆえに魔物も数多く危険地帯として有名である。そこまでのランクの魔物はいないのであるが…。

「ええ。現在、動物どころか魔物一匹すら会えません…」

どういうことなのか、森に入ってこのかた一切の生物と会えないのである。豊かな森にしては不自然なほど静かである。

その現状に3人はどうするのか決めあぐねていた。

「どうなってるの?これ。普通何らかの虫だっているもんじゃないの?」

「だねぇ。これは異常だよ。食事は諦めて全速力で近くの町まで行って現状知らせるかね?」

ビルレッティとファリアナは相談しつつセリーナに意見を求める。

「セリーナはどうした方がいいと思う?このまま進む?それともビルの言った通り全速力で近くの町まで行って現状知らせる?」

「正直なところ『全速力で近くの町まで行って現状知らせる』の方がいいと思うんですが、さすがに近くに人が来てたりすることを考えると探索したほうがいいと思います。それにさっきから探知（サーチ）をかけてますが生命反応はないわけじゃないんですよ。だから、多分大型の何かがいて命令系統を作っているんじゃないでしょうか？」

「だね。じゃあ、私はギルドに連絡鳥を飛ばすよ。最後の一匹だし使いたくはなかったけど、仕方ないね」

そう言うとビルレッティは馬車のほうへ向かって行った。

「じゃあ、ビルが戻ってきたら探索開始ね」

「ええ。では、それまでに探知（サーチ）を森全体まで一度かけちゃいますね」

そう言うとセリーナは魔法を全力で起動した。

数分後、ビルレッティが帰ってきたので探索を開始した。

「調べた限りここの奥にある洞窟が怪しかったです。なのでそこに向かおうと思うんですがお二人はどうします？」

セリーナは二人に意見を聞いた。すると、

「じゃあ。二手に分かれようかね。その洞窟はセリーナが、その周辺を私たちが探索しようかね。何かあったら大声で互いに助けを求めるってことで」

そういい、二手に分かれ探索を本格的に再開した。

洞窟の前に着き、二人と別れたセリーナは真っ暗な洞窟を進んでいた。

「暗いですね…。まあ、私は吸血鬼ですしこのくらいの暗闇はむしろ好みですが」

独り言を漏らしながら進む。

どうやら、この洞窟に何かがいるのは間違いないとセリーナは確信した。

先ほどからいたるところで見受けられる何かの動物の骨や飛び散った血から、その何かは外の森を支配しているのもわかった。

だからこそ、分かっていて一人で来た。ここにいるのは分かっていたし、ビルレッティも分かっていたからこそあんな提案をしたのだろう。

血の匂いが充満して気持ち悪いが、気にしている場合ではない。

いつ、この洞窟に住む森の支配者が襲ってくるとも限らない。

そしてその時が来た。

「わおおおおおおおおおおおおぉぉんんっっっ！！！」

出てたのは白銀に輝く毛並みを持った大きな狼型の獣だった。

「ちょっとちょっと！これは予想外かな。なんでこんなのがこんなとこにいるわけ？庭園にいる種でしょこれ？」

そこにいたのは≪黒の庭園≫にいる魔物でもA＋ランクに分類される最強クラスの獣のボスだった。しかも、ここにいたのはその中でも凶暴で名前を付けられたものだった。

「魔狼フェンリル…。デビルハウンドの最強種…」

魔狼フェンリル。≪黒の庭園≫にて群れをなし他の魔獣を襲う凶暴種デビルハウンドのボス的存在。今までもたくさんの冒険者が挑んだがデビルハウンドを殲滅できてもこのフェンリルだけは倒せず逃げ帰ってきているという話もある。ちなみにデビルハウンドは黒の毛並みを持っているのでフェンリルは一目瞭然だ。しかも、単独で名前付きの魔物であるためランクはSランクに分類されている。

「貴様。どのような理由があってここに来た？」

フェンリルが突然喋りだし問いかけてきた。

「え？喋れたの？」

「質問に答えよ。我に用があるのか？」

「いえ、別にこれといた用はありませんね。まあ、森の様子が明らかにおかしかったので探索に来た感じですけど…」

セリーナは理由を話した。

「そうか。どのようなことになっているのだ？」

「森の動物がほとんどいませんね。魔物すら…。あなたがやったんじゃないの、フェンリル？」

「我がやっているのではないだろうな。我はここに傷を癒しに来るだけである。来るときに森が少し静かだとは思っておったがそんなことになっておったか。それにこの洞窟が少し血なまぐさく感じておった」

「じゃあ、他にこんなことをやってる奴がいると？」

「ああ、そのようだ。我はこの森によく来るのでな、むやみに殺したりはせん」

セリーナはフェンリルとの会話で彼がやったのではないと確信はしたが、

「じゃあ、この惨状はいったい何が？」

「さあな。我にもわからぬよ」

「そいつもきっとこの洞窟にいるんだよね？」

「ああいるだろうな。我に近づくことはせんようだし我より弱いのであろうな」

フェンリルより強い種なんてほとんどいないと思うセリーナだったが口には出さず話を続ける。

「そう。まあ、現状を打破するにはこんなことをしてるやつを倒さないとダメみたいだし頑張ってみるしかないかな」

「そうか。ところでそなた名はなんという？」

「本名はセリーナ・A・アインスフィア。聖女って呼ばれてるその人だよ」

セリーナがフェンリルの問いに答えるとフェンリルは固まった。

「どうしたの？」

「まさか生きておったのか…。我的にはうれしい限りだがの…。これで我が友との約束も果たせるゆえ」

突然止まったフェンリルは平伏し、セリーナに提案をした。

「我が友ゼアノートとの約束だ。我と契約を頼む」

「ええっと。それはどういうことなのかな？」

セリーナはフェンリルに言われたことをすぐに理解できなかった。

契約とは魔物などと行える召喚魔法のための契約である。

召喚魔法は契約をしたものを召喚できるただそれだけの魔法なのだが、精霊魔法と違い召喚に魔力をほとんど使用せずにできる。そのため、多くの冒険者が契約をしようとしたが基本的に自分と同等、もしくは自分以上のものと契約しないとさほど役に立たないのであまり広まらなかった。

ちなみに、契約を行っている魔物はそのほとんどが名前付きであり、それくらいでなければ契約しても意味をあまりなさないのである。

なお、契約と一種の服従でもある。そのため、多くの魔物は契約をしないし、失敗して魔物に食い殺された例もあった。

なのに、名前付きの有名なあのフェンリルが契約してくれといったのだ。驚くに決まっている。

「我が友ゼアノートと約束していてな。『もしも、我が主がゼノンを打倒しえたときけいやくしてもらえんか？彼女には今後も大きな力が必要となるゆえな』とな」

「あいつがそんなことを…。いいわ、契約しましょうか」

こうしてセリーナは心強い味方を手に入れた。

ちなみに契約した魔物は存在を昇華し霊獣として扱われるので基本的には天界に行くこともできるし、主人のもとにいることもできる。

そんなわけで、良い食事とお金を手に入れるためにセリーナは小型化したフェンリルと共に謎の森の支配者を探して奥に進んでいった。

第捌話　向かうは総合教育機関≪アカデミー≫。しかし、金はあらず、食事もまともに取れず。

ものすごくグダグダです。
次回はまともな戦闘描写を書けるかな？
洞窟の奥にいる魔物何にしよう…

第玖話　大老熊ベヒーモス（前書き）

遅れてすいません。
［２０１１／１０／２２］一部表現を修正
［２０１１／１２／２０］一部ミスを修正

第玖話　大老熊ベヒーモス

簡潔に言おう。浅慮だったと。

「うわぁ。最悪ねこれは…。こんなのとやるのはさすがに嫌ね…」

思わずセリーナは言葉を漏らした。

「我も思いもよらなんだ。ここまでの大きさに育っているものを見るのは初めてであるぞ」

体を普通の狼並みの大きさに変えたフェンリルが言った。

そこには大老獣の一角であるベヒーモスがいた。

＋＋＋　†　＋＋＋

時は少しさかのぼり、ビルレッティとファリアナは近くにあった泉で休憩していた。

「いいんですの、ビル？こんなとこで休んでて」

「いいのさ。私たちが行っても足手まといになるのは目に見えた強敵だよ。あの洞窟の前から感じた気配だけで嫌になったよ」

ビルレッティはファリアナに説明する。

「あの洞窟に何がいるのかは分からないけどあたしらに出来ることはなにもないよ。とてもじゃないけどあそこにいたのは肌で感じれただけでもＡ＋ランク以上だったよ。洞窟の奥からはなってる気配だけでそれだけ感じるんだ。推定する限りあそこにいるのはＳ＋ランク級のものが居てもおかしくないよ」

そう言うと、ビルレッティは酒をあおった。

「あたしらももっと強くなりたいね…。肝心な時に人にまかせんとあかんなんて悔しいよ…」

「そうね。もっと強くなってたくさんの人を守れるようになりたいわ…」

そう言ってファリアナは向かい酒でビルレッティに答えた。

＋＋＋　†　＋＋＋

大老獣とは異常なほどの力や生態を持つ魔物の一部をその強さから特別扱いするために付けた名称である。

大老獣には様々な種がいるとは言えないが、その中には一匹だけで国を破壊したといわれている魔物もいる。しかも、大老獣のほとんどが名前付きに匹敵する実力を持つため、個別に名前を付けることはないが、その種としての強さはまさに別格なのある。

ここにいたベヒーモスもその大老獣の一匹である。

大老熊（たいろうゆう）ベヒーモスと呼ばれるこの魔物は、過去様々な村や町を破壊したとされている。知能はそこまで発達してはいないもののその獰猛さからSランク以上の実力者ですら数人がかりでないと倒せないといわれるほど強い魔物である。

そんなベヒーモスだが大きさは大きくても１５メートルあればいいほうだという。だが、ここにいたのはその倍、３０メートルの大きさを誇るほどのものだった。

そんなわけで冒頭に戻る。

「あり得ない。こんなのをどうにかするなんて簡単に言えるほど私

も自分を過信してないわよ…」

「うむ。最悪大きな都市一つを一晩で廃墟に変えるなど何の問題もなくやってのけるであろうな」

そんなことをしゃべっているとベヒーモスはこちらに気付いたようだ。そして、叫び声をあげた。

「うがあああぁぁぁぁぁぁぁぁあうううぅぅぅぅぅぁあああぁぁっっ！！！」

その声は洞窟全体に響き渡り反響した。その反響音により洞窟全体が揺れるかのようにぶれる。

「っつぅ！耳が痛いなぁもう！」

少し怒り気味にセリーナが言う。

ベヒーモスの叫び声がやみ、セリーナ達に向かい襲いかかってきた。

「まあ、予想どおりね。さあ、久しぶりの戦い（殺し合い）よ」

そう言って、ベヒーモスとの戦闘が開始された。ちなみにフェンリルは、戦闘に参加せずに今一度、主の強さを見極めるためにセリーナの戦いを静かに見つめていた。

セリーナは空間に手を入れ、魔王城で使ったものとは違う武器を

取り出した。取り出したのは大きなハルバート。その大きさはセリーナの背丈を大きく上回りその重さは明らかに通常のハルバートなんかよりもはるかに重そうである。

「さあ、やりあいましょう」

そう言って、洞窟の天井を駆けベヒーモスの頭を狙う。

ベヒーモスもそれに気付いていて腕を伸ばし爪での攻撃を狙ってくる。もちろんそんな大ぶりな攻撃はあたらず避ける。

避けたセリーナは天井をけりベヒーモスの頭の角目掛けて飛び降りた。ベヒーモスも黙っておらず攻撃を仕掛けてくるが当たらず、セリーナの目の前にベヒーモスの角がある状況になる。

大型の魔物のほとんどが大きな角を持っていて、それには多くの神経が集まっている。そのため、角をへし折ればその魔物に多大なダメージを与えられるのだ。

しかし、そんな弱点が無防備にさらされているはずもなく、その角は異常なほど頑丈で並の冒険者ではへし折るなど到底できはしない。知識のあるものなどは別として。

そんなベヒーモスの角は魔物の中でもトップクラスの硬さを誇る。セリーナはそれを分かっていながらもベヒーモスの角をへし折りに行ったのである。

ここで重要となるのが先ほど取り出したハルバートである。このハルバートは最初から角を一撃でへし折るためにセリーナが取り出したものである。

ハルバートは威力重視ではなく重さ重視で取り出したもので、それに加え天井からの高さで威力を増したのである。そう、単純な攻

撃力だけでベヒーモスの角を折りに行ったのである。

「はあぁ！」

振り下ろされるハルバート。それはみごとにベヒーモスの角に命中した。

しかし、その攻撃は無慈悲にもはじき返された。少しの傷をつけただけで…。

「嘘でしょ！これを受けて傷を少し受けるだけなんて！どんだけ硬いのよ！」

セリーナはそう言いつつ、ベヒーモスが仕掛けてくる攻撃を避ける。

セリーナは作戦を変えるべきか避けながら考えていた。ベヒーモスは頭が悪いので攻撃事態はその凄く単純で当たることはそうそうない。その上に３０メートルの巨体である。当たる可能性はほとんどないだろう。

しかし、その反面防御面は異常なほど頑丈だ。そのため、攻撃しても刃が通らない可能性すらある。

そんな、状況を打破しうる作戦を考えながら攻撃を避け続ける。

そして、二つの方法を思いついた。

一つはこのまま先ほど攻撃を当てた角に何度も攻撃を当て角をへし折ってしまうこと。だが、この作戦では異常なほどの時間がかかる可能性がある。

先ほど攻撃して削れたのはわずか数センチにも満たないほど小さな傷。一度でそれなのにその数センチにも満たない傷を狙いつづけ攻撃を当て続けなければならない。しかも、いくらベヒーモスの頭が悪いとはいえ同じことをし続けていればいずれはばれる。

つまり、セリーナにとっては簡単なのだが大きなリスクを抱えなければならないのだ。

二つ目の手段は切り札を切ることだ。だが、これについては正直考えていない。

目覚めたばかりセリーナの魔力量は当時に比べいくらか落ちている。そのため、切り札を満足に使えない可能性もあるし、アインスフィアという家の秘密にも触れる。まあ、幸いここにいるのはフェンリルだけなのでそのあたりは問題ないが。

ちなみに戦闘後で思いついたのだが、大きな魔法を使えば良かったのだ。ベヒーモスは頑丈だが魔法の耐性がほとんどない。なので魔法を当てれば少なくとも簡単に勝てたとは言わないがもっと楽に倒せたはずなのである。

閑話休題。

まあ、そんなわけでセリーナは一つ目の案を採用しようと思ったのだが、フェンリルが念話をかけてきた。

（何を迷っているかは知らぬが、遠慮などせずに本気を出せ。ここで時間を食ってもさほど意味はない。お前が倒れたならば運んでやるし安心しろ）

セリーナはそう言われ決心した。

（わかったよ、フェンリル。でも、ここで見たことは見なかったこ

とにしてね）

そう言って、セリーナは言葉を紡いだ。

「我が求めしは失われし過去。今ここにそのすべてを明かせ。全てを記せし禁断の書庫≪ロストライブラリ≫…」

言葉が紡がれた瞬間、世界が変わった。

まるで、世界がセリーナを中心とし回っていくような感覚である。

セリーナの前に一冊の本が現れる。そして、さらに紡いでゆく。

「検索≪サーチ≫。どんな頑丈なものでも切り裂く無敵の刃」

その間、ベヒーモスは動けずいた。まるで、何かに取りつかれたかの如く。

「発見≪ディスカバリー≫。能力を具現。読み取り≪ロード≫」

セリーナが言葉を紡ぎ終わるとその手には一振りの剣が握られていた。

「悪いけど一撃で決めさせてもらうわ。魔力がほとんど残ってないからね」

セリーナはそう言って、ベヒーモスの角目掛けて飛翔した。まさに、飛んでいた。

そして、切り付ける。

「全てを切り裂く無慈悲なる聖剣≪デュランダル≫！」

切りつけられた角はまるでバターを切るかの如くなめらかに切り取られた。

そしてベヒーモスは倒れた。

「じゃあ、死んでもらうね。貴方みたいのが居るのはさすがにごめんだからね」

セリーナはそう言い、持っている剣でベヒーモスの心臓を切った。

大量の血を浴びたため来ていた服は真っ赤に染まったが。

戦闘は終わり森に平和がもたらされたのである。

そのあと、申し合わせたかのようにセリーナは倒れたのだった。

第玖話　大老熊ベヒーモス（後書き）

戦闘描写ひどいですね。もっと長くすべきでした。
次は、まともな戦闘描写を書きたいです。

閑話　世界の全てをその手に収めんとするモノ・世界を見つめる少女の憂鬱が消えた

遅れまくりました。
すいません。
［２０１１／１０／２２］変換ミスを修正

閑話　世界の全てをその手に収めんとするモノ・世界を見つめる少女の憂鬱が消える

セリーナがベヒーモスを倒した時遠くにあるとある城の一室にいる魔族の青年がつぶやいている。

「ふむ。キングベヒーモスがやられたようだな」

「そうなのですか、主？」

青年の言葉に反応するように執事服を着た青年が問う。

「ああ、まさかあれが簡単にやられてしまうとはな…。あれをやれる人材がいるというのは少しばかり脅威だな…」

「ですが、ご主人様に敵う人がいるとは思えませんし、そう難しく考えなくてもいいのでは？」

答えた青年の言葉にかぶせるようにメイド服を着た少女がさらなる問いをかける。

「かもしれぬが、楽観視をして足を掬われるのも困るな。お前たちには苦労をかけるな。すまん」

そういう青年の言葉に執事とメイドは答える。

「謝らないでください、主。私たちは主に命を救われたからこそここにいることができるのです」

「そうですよ、ご主人様。ですから、何かをするのならば遠慮なく

申しつけください」

「そうか。今後もよろしく頼む」

そう言うと、思い出したように青年は尋ねる。

「そう言えば、奴はどうしたのだ?」

「勝手に出かけたようです。というよりも『主の為に都市を奪ってくる』などと言って消えましたよ。全く、勝手なことをしないでいただきたいものです…」

「そうですね。ご主人様に褒められたいからってちょっと度が過ぎます。まだ、動くべき時は来てないんですから自重を覚えてほしいですよ」

そう言う二人を青年はなだめる。

「まあ、いいさ。あれもまだ若いのだ。お前たちほどではないにしろ力を持っているのでな、持て余すなら発散させてやらんと。かわいいものだよ、まだまだ。兵たちも連れて行ったのだろう?いい訓練だ」

その言葉に執事はしぶしぶ了承した。メイドは執事の様子を見ると、お茶を汲みに行った。

「主がそう言うならばいいでしょう。主はそう遠くない未来の為に力を蓄えてくださいませ」

そう言うと、執事は部屋を出て行った。そうして、青年は一人に

なると小さくつぶやいたのだった。

「そうだな…。我はあの方を超えて真の魔王になるのだから…」

＋＋＋　†　＋＋＋

「ああもう、なんて暇なのかしら…」

王都≪メアスフィア≫にある城・スフィア城の奥深くにある庭園とそこにある小さな塔。それは、まるで誰かを閉じ込めるかの如くそこにあった。

そこには一人の少女が何かを憂いたような表情をして立っていた。

「どうせ何もすることなんてないし、いい加減にしてほしいわ。私に何を期待してここに居させてるのよ…」

「まあまあ、貴女様がいてくれますからこそこの城は守られているのですよ」

「分かってるわよ。この城の守護精霊としてこの城にいることくらいね。でもね、私は何もすることもないんだから暇なのよ。せめてアカデミーに行かせてくれたらいいのに…。私が離れてたって守護は効くから問題ないのに…」

少女はすねる。それをなだめるメイドも困った顔をしていた。

「それはそうなのですが…。貴女様がどれだけこの国にとって重要な方なのかをお考えください…。貴方様にもし何かありでもすればこの王都が危険にさらされてしまいます。それだけは避けねばならぬのです…」

「だから、分かっているってばもう！」

そういうと少女は塔の中に入って行った。もちろん、メイドも後を追った。

少女は部屋に戻ると即座にベランダに出た。

「ふう。息が詰まるわね相変わらず…。まあ、私がここにいるのは望んだ結果なんだし文句なんて言っていいわけないんだけど、まさかここまで何も出来なくさせられるなんて…。ほんと退屈…」

少女は望んだのだ。この国を守りたいと。そう望んだから彼女はここを守る守護の精霊となった。

分かってはいる。でも、世界はどうにも退屈なのだ。

することもなく、ただただここで時が過ぎゆくのを見つめつづけ

る。

そう、少女はただ過ぎていくときの中で憂鬱を感じ続けている。やることもなくただただ世界を見つめ続けている。

そんな毎日を送り続けていればどんなものだって嫌になるのは当たり前である。

「はあ、何か楽しくなるようなことがおきないかなぁ…」

少女がそうつぶやいた瞬間少女は何かを感じ取った。このときはちょうどセリーナがベヒーモスを打倒したときであった。

「えっ！ほんとなのこれ？嘘じゃないの？」

少女は感じ取った何かが嘘じゃないのかと疑う。

「ふふ。ふふふ。ふふふふふふふふふふふふふ」

不気味に笑う。

「どうしたんですか？何かありました？」

メイドは部屋からベランダに出てきて少女に問いかける。

「何でもないわ。でも、多分これからとても面白いことが起きるわ」

「え？どういうことなんですか？」

「意味などないわ。ただねきっとこの後楽しいことが起きるはずなのよ」

少女はそういうと部屋の中に戻る。

その時少女は小さくつぶやいた。

「お姉さま。早くここまで来てくださいね♪」

閑話　世界の全てをその手に収めんとするモノ・世界を見つめる少女の憂鬱が消えるまで

いろいろと重要キャラが出てきました。
いい加減登場キャラ紹介を考えようと。

第拾話　旅路で出会った青年（前書き）

意外と長くなりました。
［２０１１／１０／２２］変換ミスを修正

第拾話　旅路で出会った青年

セリーナが目を覚ますとそこはちゃんと天井のある場所だった。

「ここどこ？」

セリーナがそう言うと近くにいたらしいフェンリルが声をかけてきた。

「目が覚めたか主。倒れた主を運んでいたら二人組が来てな、それで近くの町まで運んできたのだ。ここは、城塞都市≪クシロメリア≫にあるやどだ」

フェンリルは説明し終えると近くに伏せてそのまま無言になった。

どうやら話から察するに、倒れた私を洞窟から運んでいたらビルレッティとファリアナが来て馬車で近くのこの都市クシロメリアまで連れてきたらしい。ありがたい話だった。

セリーナはベットの上から部屋を見回した。

ビルレッティは椅子に座ったまま寝ていた。どうやら、ベットが足りなかったらしい。ファリアナは隣のベットで寝ていた。ビルレッティが譲ったのだろう。

折ったベヒーモスの角はちゃんと持ってきているようだ。バカでかい角が壁にたてかけてあった。

一通り見回したところ窓からは何も見えないほど暗かった。どうやら、夜のようだ。

二人を起こすわけにもいかないなと思うとそのままベットに寝転

んだ。

そうするとさっきまで黙っていたフェンリルが小さく声をかけてきた。

「ところで主、奴を倒すときに使ったものは何なのだ？」

フェンリルの問いにセリーナはこう答えたのだった。

「内緒よ。使う時にいったでしょ。『ここで見たこと（・・・・・）は見なかったこと（・・・・・・・）にしてね』って」

フェンリルは黙るしかなかった。しかし、セリーナは後を続けた。

「まあ、パートナーだしね。そのうち教えてあげる」

そう言うとセリーナは眠りに落ちて行った。

＋＋＋　†　＋＋＋

翌朝、セリーナが起きると二人が声をかけてきた。

「おお、起きたかい。さすがに二日も目を覚まさなかったんで吃驚したよ…」

「そうですよ、全く心配させないでください…」

そう言われ吃驚した。まさか二日（正確には一日半）もの間寝ていたのだそうだ。

まあ、魔力のほぼすべてを使いきってそれだけの日数で済んだ方が奇跡ではあるのだが。

「まあ、起きてくれて助かったよ…」

ビルレッティはそう言って部屋を出て行った。

ファリアナはビルレッティが出て行ったのを見て、こちらに話しかけてきた。

「ちょっとお金がなくて無理言ってこの宿借りたのよ。だから、この主人の依頼をやらなきゃいけないんだけど貴女が起きないと安心できないって今まで待ってもらってたのよ。まあ、その間は給仕をしたたんだけどね」

どうやら、ギルドに報告はしていないらしかった。

起きたセリーナは下に降りて主人に挨拶して、そのあとビルレッティに声をかけてからファリアナと一緒にギルドに向かった。

ベヒーモス討伐の報告とどうなっていたのかのちゃんとした説明

の為である。

「失礼しま～す。報告に来ました」

ファリアナはカウンターにいる女性に向かって言った。

「はい。依頼はどのようなものでしょうか？」

そう言われファリアナは一枚の紙を取り出した。

「はい」

渡された紙を見て女性は吃驚したような声をあげた。

「緊急Ｓランクですか！」

その声を聞いてギルド内は騒然となった。

「Ｓランクだって？」「何かの間違いじゃないのか？」「緊急依頼とか初めて聞いたぜ」

いろいろと聞こえてくるがとりあえず無視して話を進める。

「ええっと。では、森の様子とどのような事態になっていたのかをお教えください」

「はい。まず様子ですが、まるで生き物の気配がありませんでした。森はそこにあるのに何一つ気配を感じない状態でした」

ファリアナが説明している。その間セリーナはやることもなく話

を聞き流しつつギルド内を眺めていた。
いろんな人がこちらを見ている。

「では、その調査で分かったことをお教えください。」

「それはこちらの子から」

「えっ！」

いきなり話を振られたセリーナは少し吃驚してしまい止まった。

「ええっと。教えてくれますか？」

「はい」

そう言ってセリーナは洞窟での一件を説明した。

「では、大老獣の一角である大老熊ベヒーモスがいたんですね？しかも、一般的な大きさの倍はあるような」

「はいそうです」

説明を終えると女性は依頼書を取り出してきて書き始めた。

「では、討伐依頼を出します」

「ちょっと待ってください。すでに討伐しちゃいました…」

そう言われた女性は大きな声をあげた。

「あり得ません！そんな、大きさのベヒーモスを一人で倒したっていうんですか！」

「ううー。はいー。証拠にへし折った角を見せましょうか？今持ってきてますしー」

そう言って、セリーナは持ってきたベヒーモスの角を見せた。

身の丈の実に数倍はある角を軽々と持っているのを見て吃驚したような声を上げたがすぐに対応した。

「理解しましたー。一人で倒したんですか？」

「ええっと。私以外にこの人ともう一人、あと召喚契約した霊獣一匹でです」

嘘をついた。ここで本当のこと、つまり一人で倒したなんて言えばどうなるかはわかったもんじゃない。

だけど、少人数でも角のみを狙ってやればできないことはないのだ。

しかも、ビルレッティとファリアナはA＋ランクの冒険者だ。納得された理由の一つである。

「分かりました。では、報酬を計算いたしますので明日にお越しください」

そう言ってギルドを出た。ちなみに折ったベヒーモスの角はギルドに渡した。ついでにセリーナのギルド登録もしたが。

もちろんベヒーモスの死体の確認はそのあとすぐに行われて全て

の素材が高値で市場に出回った。まあ、余談ではあるのだが。

＋＋＋　†　＋＋＋

その後、宿に戻って、主人の依頼を行うことになった。

主人の依頼はグリフォンの羽を取ってきてほしいとのことだった。

グリフォンの羽はとても貴重な素材の一つでそれだけで金貨数枚の価値はあるといわれている。薬の材料としてもとても優秀で羽を使った薬は万能薬としても有名だ。

主人の依頼はつまり万能薬の材料を取ってきてくれというものなのだ。自分で用意さえできれば安く作ることができるのだ。

そんなわけで、ギルドに行った翌日、ギルドに赴き、お金（金貨４～５百枚はあった）をもらってからグリフォンの多く住む近くの山へと向かった。

「そんなわけで来たのですが何かおかしくないですか？」

セリーナが言った。

セリーナが言ったことは的を射ているのである。確かにグリフォンはいたのだが大きさがあまりにも小さかったり傷ついていたりとどこかおかしいのである。

「確かにそうですね。何かおかしいですね。凶暴で有名なグリフォンが襲ってこないのもおかしいですが…」

ちなみにビルレッティは宿での手伝いのため来ていない。そのためファリアナが答えた。フェンリルは現在、天界に行っている。

なので、二人で来たのだが満足な羽を手に入れられるグリフォンがいないのである。

「何が起きてるのよ…。以上な大きさのベヒーモスといいこの惨状といい…」

ファリアナがつぶやく。

セリーナは考えていた。自分が生きていたときにこのようなことが起きていたのかを。

（確かにおかしいのは分かるんだけど…。まさか、何らかの力を与えている存在がいるのかしら…）

セリーナの考えは正しい。本来の進化の過程上であそこまで大きくなる前に何らかの騒ぎがあるはずなのだ。特にベヒーモスはその

凶暴性から大老獣に選ばれているのである。出てくるときには大体15メートルであり、それで猛威をふるう。

つまり、あそこまで大きくなるならそれこそ何かしらの被害がでているはずなのだ。それなのにギルドで聞いた限り最近はベヒーモスが出たなどという報告はなかったという。

明らかにおかしいのである。

「とりあえず、採取できそうなグリフォンを探しましょう。私たちの出来ることはすべきです」

セリーナはそういうと羽を採取できそうなグリフォンをファリアナと共に探し始めた。

＋＋＋　†　＋＋＋

ルーキス・M・アインスフィアは依頼であるグリフォンの羽を取りに来ていた。

グリフォンの羽は防具として使われることもあれば薬になることもなる。つまり万能な素材のひとつなのだ。

その為、多くの単位も出るし、実力的にもちょうどよかったのでルーキスはこの山に来ていた。

しかし、来てみると採取できそうなグリフォンがほとんどいないではないか。

その為、山の山頂付近まで登る羽目となったのだが、最悪の事態になっていた。

キィンッ！カアン！パキィン！

何かを打ち合う音がする。

「なんでこんなとこにキメラグリフォンがいやがるんだよ！」

そう言いつつ応戦する。

ルーキスが山頂に登ってみたところそこには、人口的に作られた魔物であるキメラがいたのである。しかも素体はグリフォン。その為キメラグリフォンといわれる。

キメラは基本的に人工である。しかも、作ったキメラは人間に従順になるように躾けられる為、このように襲ってくるなどあり得ない。

現状から見るにこいつがグリフォン達を襲ったようだ。

ガキィン！

剣で応戦する。

「いい加減にしてくれや！これじゃ満足に魔法も使えん！」

叫んでみるが伝わるわけもない。その為、魔法も使えない状況で応戦し続ける。

身体強化の身で勝てる相手でもないのは分かっているが、現状で魔法が使えるほど楽な状況でもない。

つまり、最悪の状況だ。ジリ貧でしかも自分の体力が多く削られていく状況。

（ああ、最悪の場合、俺はここで死ぬのかなぁ…）

そう思いつつも出来る限り応戦する。

ミアが自分のことを待っている。だから死ねない。だけど、現状がきついことも事実だ。

そう思っていると魔法がどこかから飛んできた。

「【吹く風は業風。顕現せしはおおいなる神の息吹。我は風を纏いて全てを吹き飛ばさん】！！ゴッドブレス！！」

キメラグリフォンが吹き飛ばされたので、後ろに下がる。そうすると助けてくれた二人組が声をかけてきた。

「あの大丈夫でしたか？」

＋＋＋　†　＋＋＋

「あの大丈夫でしたか？」

セリーナは声をかけた。

山頂に上がってみたら何かが戦っている音が聞こえたので駆けあがってみたらグリフォンらしきものと青年が戦っていた。

それを見たファリアナが瞬時に魔法を使い青年を助け、グリフォンらしきそれと対峙した。

「ああ、助かった。まさか、助けが入るとは思ってなかったんで」

「それはよかったです」

そう言って、セリーナは戦闘態勢をとる。ファリアナはすでに魔法の準備をしている。

「あれはいったい何なんですの？」

ファリアナは青年に尋ねる。

「多分ですが、グリフォンを素体としたキメラだと思います」

そう言って青年は戦闘態勢をとる。

セリーナは武器をどうしようか悩みつつ、羽を出した。

「へぇ。羽もちだったんですね」

ファリアナがセリーナに言う。

「そりゃそうですよ。真祖が持ってないとかあり得ないでしょ」

セリーナは答えつつ、準備する。

「自己紹介とかは後でしますから、今は、あいつを倒してしまいましょう」

そう言って、3人は戦闘を始めた。

第拾話　旅路で出会った青年（後書き）

相変わらず微妙ですね…。
もっと頑張らなく…

ズズズ…

作者「ては…。ってここどこですか！」

少女「私の部屋ですわ」

作者「誰…？」

少女「貴方が考えた人物でしょう？忘れるんじゃありません！」

作者「えええぇ…。まだ、ちゃんと出てないんだから、まだ出てこなくても…」

少女「いいえ、ここで出なくては私は今後ちゃんと出れない気がしますので呼ばせていただきましたわ」

作者「ええっとそうですか…。まあ、今後の予定としては貴女の出演は結構先になっちゃうんですけど…」

少女「分かってますわ、そんなこと。だからこそ、ここに出てきたんですわ」

作者「まあ、自分としては気に入ってるのでもっとはっちゃけさせた上で出したいとは思ってるんですが、どうですか？」

少女「最高じゃないですか！ああ、早くお姉さまと会いたいですわ！」

作者「……。なんかトリップしてますので今日はこの辺で…」

ズズズ…

ってなわけでここで感謝をユニークが１５００、ＰＶが８５００をいつの間にか越えてました。
いくら感謝しても感謝しきれません。
今後ともよろしくお願いします。

第拾壱話　依頼完了！・二人と別れアカデミーに

はっきり言おう。勝負にならなかった。

空を飛ぶセリーナとファリアナを見たキメラグリフォンは焦ったようでいきなり動きを雑にした。

そのおかげでセリーナは出した二本の片手剣で羽を切りつけた。

すると簡単に切り取れてしまい、キメラグリフォンは地面に落下していった。

後は、ルーキスが落ちてきたキメラグリフォンに剣を突き立て戦闘終了。

元々グリフォンはBランクの魔物だ。そこまで苦労するような相手ではなかったのだ。

このキメラグリフォンは良くてB＋～A－ランクだ。

閑話休題。

「ふう。終わったね。ところで君は？」

セリーナは空中で切り取った羽を回収しつつルーキスに話しかけた。

「普通聞くより前に名乗るもんじゃないのか？まあ、いいや。俺はルーキス・M・アインスフィアだ。ルークって呼んでくれ」

「そう。私はセリーナ・A…。セリーナ・エインフェリアよ。こっちはファリアナ・レヴィアンス」

「よろしく」

そう言って自己紹介を終えるとファリアナがルークに問いかけた。

「アインスフィアってことはスフィア王国の王子様？」

「ああ、まあな。今はアカデミーでのクエスト実習をやってるとこだな」

（まあ、実際には家出みたいなもんのついでだが）

「そう。とりあえずなんだけど、この羽でも大丈夫なのかな？」

セリーナは疑問をぶつけた。すると、ルークではなくファリアナが答えた。

「問題はないはずだよ。キメラって基本的に素体が大もとになって作られてるから、この羽自体はグリフォンのものと何ら変わりないはずだよ」

そう言いつつ、もうひとつの羽を切りとると、ファリアナはルークに手渡した。

「はい。ここに来るってことはこれが依頼なんでしょ？」

「そうですね。ありがとうございます」

ルークはお礼を述べる。

「とりあえず下山しましょうか。ルーク貴方も一緒に行きましょう？」

セリーナはルークを誘う。

「分かった。さすがに一人であんなんと戦ってたから結構疲れたんだ。一晩くらいは休みたい」

そう言って、一緒に下山した。

＋＋＋　†　＋＋＋

「ただいま帰りました」

ファリアナが元気よく宿の扉をあける。すると、ビルレッティが声を掛け返した。

「おお、お帰りさん。どうだった？」

「山の様子がおかしかったですね。まあ、原因は排除してきましたけど」

「そうかい。まあ、一応ギルドにいって報告しときな」

そういうとビルレッティは奥にすっ込んでいった。

「俺はどうすればいいんだ？」

「とりあえず、一緒にギルドに行こうか。ファリアナ、ギルドにいって報告して来るよ」

「ん～。行ってらっしゃ～い」

送りだされたセリーナはルークと一緒にギルドに向かった。

「ところで、お前の名前聖女様と一緒なんだな。最近は少ないって聞いてたんだが」

セリーナは突如話しを振られたため反応がおかしくなった。

「えっ。うん。まあ、そうね…」

（その聖女は私らしいんだけどね）

「まあ、いいけどな。ところで君はそんな小さいのに冒険を？」

「ええっと。とりあえず、アカデミーに入学しようと思って。あの二人はついでの付添だよ」

「そうか。ん？アカデミーに入学するのか？年齢制限あるぞ？」

その言葉にセリーナはうなだれた。

「そうだよね…。見た目って重要だよね…。私これでも１８何だけど…」

セリーナの言葉にルークは

「マジで！？こりゃぁ吃驚だぜ。世の中いろんな人がいるもんだ」

そんなこんなで話してるうちにギルドに着いた。

ギルドに着いたセリーナはルークと一緒にカウンターまで行き、山での事態を報告した。

聞いた話によると最近、よくこのような魔物の生態系に異変が起きたりするようなことが各地で起きているらしかった。

何が原因かも分からないが凶暴化した魔物も多く出てきていたりするので警戒が必要だそうだ。

そんなわけで報告したので、宿に帰ると主人に羽を渡してすぐに寝た。

余談だが、その羽で主人の奥さんは元気になったそうだ。

＋＋＋　†　＋＋＋

翌日。

「じゃあ、アカデミーにはそいつに連れてってもらうんだね」

「はい、貴女達にこれ以上の迷惑をかけれませんので」

「迷惑だなんて思ってないわよ。楽しかった」

そうやって、二人と別れることとなった。

「じゃあ、行くならこれを持ってきな。アカデミーに着いたら受付に渡しな」

そう言って渡されたのは封筒だった。

「なくさないでね、結構重要なものだから」

「分かりました、いろいろとありがとうございました」

「こちらこそ、また縁があったら会おうじゃないか」

そうして、しばらくの間過ごした友に別れを告げた。

「あの子、強かったね。やっぱり本物はすごいね」

「うん。私たちももっと強くなろうねビル♪」

「ああ、もちろんさね」

この後、二人は世界的にも有名な二つ名付きのSランク冒険者となる。『毒霧の葬者』ビルレッティ・ポイズンレアと『零下の風雷』ファリアナ・レヴィアンスといえば知らないものはいないというくらいまでの。

余談ではあるのだが。

＋＋＋　†　＋＋＋

馬車に乗って三日が過ぎたころ、王都の近くにある街までたどり着いた。

馬車はここで一日休憩をとってから王都に向かうようでセリーナとルークは仕方なく宿を借りた。

「そういやさ。お前武器を空間から取り出してたよな？あれどういう原理だ？」

「簡単に言うと創ってあった武器を空間で保存してあってそれを取り出して使用してるだけ。魔法の応用よ」

「そんな魔法聞いたことがねぇよ」

「魔法は奇跡を起こすものよ。だから、その魔法という現象で説明できないものはない。つまり、人の思い描くことができるすべてのことは魔法という事象で説明できるわ。まあ、はっきり言っちゃうと原理さえ理解してれば魔力の足りる限りどんな現象でも起こせるのよ」

「そうなのか。まあ、俺はほとんど魔法は使わんし、よくわからないけど」

借りた部屋は一つの為二人で話しつつ暇をつぶす。

「町に出てみるか。暇だし」

「そうね。やることは待っててもないし見て回りましょう」

街に出ることになった二人はいろいろな店を見て回ることにした。

「ふぅむ。武器とか防具を今更、買いなおすことはないし。セリーナはなんかいるものあるか？」

「魔法具を扱ってる店があると助かるな」

「そうか。じゃあそういう店を探そうか」

そんなこんなで、そういった物を扱う店を探すと意外とすぐ見つかった。

「いらっしゃい」

「いいものありますか？」

「人それぞれだよ、それこそ。まあ、見てくれればいいよ。王都のほうが品ぞろえはいいだろうがね」

店内にあるものを見て回る。

武器から防具果てはアクセサリまで様々なものをとり扱っていた。

「アクセサリ系でいいのってありますか？」

「ううん。あまりないね。物によっては呪いを持ってるやつもあるそうだしあまりお勧めできるものはないかな」

「そうですか…。ありがとうございました」

そう言って、店を出た。

「良かったのか？」

「まあ、仕方ないかな…。そんなに期待してなかったし」

「まあ、セリーナがよければいいんだが」

そうして二人は適当に食事をした後、宿で休み、次の日王都行きの馬車に乗った。

＋＋＋　†　＋＋＋

それから馬車に揺られること一日。大きな城壁が見えてきた。

「あれが王都≪メアスフィア≫だよ」

「大きいね」

（ラブリオール城より強固な城になってるわけね。場所はラブリオールの首都だし）

「俺たちの祖先であるベイシス・クリストフ・ラブリオール様が父であり王であったグロリアス・ババルドス・ラブリオールの暴虐を暴いて王都を一日で陥落させ、そこに築いた国がこのスフィア王国だ。そして、そこに築かれた国を繁栄させるために作られた機関が総合教育機関≪アカデミー≫なのさ」

「そう。楽しみ」

セリーナは心躍らせていた。自分の知らない世界を知るためここに来た。そして、これからの世がどのように動いていくのかを…。

第零話　暗躍する者たち（前書き）

ＰＣの調子が悪くて時間がかかりました。

第零話　暗躍する者たち

遠くにあるとある城の一室にてその会議は行われていた。

「では、方針は今まで通りゆっくりと進めるとのことでよろしいのかな、マスタークライン？」

「ああ。破壊で制圧するだけではすぐに反発勢力が来る。そうしたら甚大な被害が出るであろう？無駄な犠牲は払わずやるのがいちばんだろう？」

「そうですね、マスタークライン。しかし、奴はどうしますか？」

「放っておけばいい。今のところ奴が暴れてくれているからこちらの行動がばれていないのだよ」

「わかりました。では、本日はこれにて解散！！」

そうして、集まっていた者たちは静かにその場から去って行き、残されたのは魔族の青年と執事、メイドの三人だけであった。

「主、お疲れ様です。いつもながら馬鹿な老人たちの対応お見事です」

「言うな、ガルス。奴らは奴らなりに考えておるのだろう…。まあ、よい。メリス、例のものは用意できておるか？」

「はい、すでにできておりますよ、ご主人さま」

「そうか、では、参るとしようか」

そうして三人は、その部屋から歩き出す。

「もう少ししたら例の計画を実行する。お前たちには働いてもらうぞ、ガルスメリス」

「「はい」」

「では、今日はもう休むとしよう」

そうして青年は部屋へと戻る。

部屋に戻った彼は小さくつぶやいた。

「さて、キングベヒーモスを倒すほどの実力者はどんなものかな…。期待はずれなんてことはやめてくれよ…」

青年のつぶやきは闇へと吸い込まれていった。

第零話　暗躍する者たち（後書き）

第二章です。
誤字等がございましたら、連絡お願いします。

第壱話　アカデミー入学と新たな友達

無事、王都についたセリーナたちはまっすぐにアカデミーへと向っていた。

街中を歩きつつ、セリーナはルークと会話をし王都がラブリオールの首都であったハイゼンベルグであることがわかった。つまり、このスフィア王国とは旧ラブリオール王国であり、もうどこにもラブリオールという国はないということ。

なおかつベイシス・クリストフ・ラブリオールはスフィア王国の始祖でありサフィは王妃だったらしい。

セリーナはあらかたの情報を聞き終えた頃、アカデミーにたどり着いた。

「じゃあ、受付に案内するよ。ついてきてくれ」

ルークにそう言われ、セリーナはルークの後ろについてアカデミーの中に足を踏み入れた。

アカデミーの中の廊下はまるで王宮の廊下のように綺麗であった。

「綺麗ですね」

「まあな。国営だしな」

「そうなんですか」

「ああ。それに王国の騎士団や魔導師になれる確率もあがるしな」

そんな話をしていると受付にたどり着いた。

「ここが受付だよ。俺はクエストの報告してくるからまた後でな」

「はい、ここまでありがとうございました」

そう言って、ルークと別れ受付の人に話しかけた。

「どのような御用件でしょうか」

「入学の願書を提出しに来ました」

「では、推薦状はありますか。時期外れの入学には冒険者の方の推薦状が必要です」

そうなのかとセリーナは驚いた。しかし、そんなことを知らなかったセリーナはそんなもの持っていない。

そう考えていると、ふとビルレッティとファリアナに渡された封筒のことを思い出した。それで渡された封筒を取り出してみると推薦状が入っていた。

「これですか？」

「はい。ええっと、ビルレッティ様とファリアナ様ですね」

そういうと受付は受け取った。その後、

「すごいですね。Ｓランクになれるといわれているお二方の推薦をもらってくるなんて」

「知り合いなんです」

そう答えつつ内心、吃驚していた。まさかあの二人がそこまでの人物だと思っていなかったからである。

「そうですか。では、入学ですが了解しました。明日試験を行いますので明日の１０時にこの受付まで来てください」

そう言われ、受付を後にする。

＋＋＋　†　＋＋＋

受付に行き、クエストの完了を報告する。

「はい、確かに依頼品です。２単位認定です。これからも頑張ってください」

そう言われたが、進級用の単位自体はもう集まっているのだからあまり関係ないのだが。

そう思いつつもセリーナを待つために受付近くのベンチに座りセリーナを待つ。

待っていると授業がちょうど終わったのかたくさんの人が受付前を通り過ぎていく。

その中にミアの姿があり、ミアはルークに気付いたようで友達に声をかけてこちらにすごい形相で迫ってきた。

「ちょっとルーク！話したいんだけど、い・い・か・な！」

有無を言わさぬ物言いに思わずたじろいだが冷静に対応する。

「あ、ああ。なんだ？」

「ルークは私と結婚するのが嫌なの…？」

上目使いでルークに問いただす。ルークは思わず顔を赤く染めつつ答える。

「そ、そんなわけないだろ！俺だってお前のことは好きだし…。このまま、結婚していいのかって考えたんだよ！お前を幸せにできないんじゃ俺はきっと後悔するし…」

「えっ！」

それを聞いたミアも同様に赤面する。

「何してんのあなた達？」

振り向いてみると何かあきれたような顔をしているセリーナがいた。

＋＋＋　†　＋＋＋

受付に背を向け歩き出そうと視線を前に向けてみるとルークが綺麗で可愛い女性と話している姿が目に入った。

青春してるねぇ。と思いつつもまた後でと言われたので声をかけようと近づいていると

「そ、そんなわけないだろ！俺だってお前のことは好きだし…。このまま、結婚していいのかって考えたんだよ！お前を幸せにできないんじゃ俺はきっと後悔するし…」

そんなルークのセリフが聞こえてきた。

まあ、なんというか受付の近くでこんなこっ恥ずかしいセリフをよく言えるなぁと考えつつ、声をかける。

「何してんのあなた達？」

声をかけたとたんルークと綺麗な女性が吃驚したのかビクンと肩をはねさせた後、セリーナのほうを振り向いた。

「お、おお、すまん」

何が済まないんだろうと思いつつも、とりあえずは女性のことを聞いたほうがいいと思いセリーナは問いかけた。

「そちらの方は？」

「あ、ああ。こいつはミア・シア・カシミア。商国カシミア王国の第3王女で俺のこ、こ、婚約者だ」

恥ずかしいのかどもっていた。

「こっちは、セリーナ・エインフェリア。クエストの途中で知り合って、アカデミーに入るってんで一緒にここまで来た」

「よろしくねミア」

「ええ、よろしくセリーナ」

＋＋＋　†　＋＋＋

ミアはルークが紹介したこのセリーナという少女が何者なのかを“視”てしまっていた。

カシミアの王族に伝わる魔眼がある。それは、そのものがどういったものかを見極める魔眼である。つまり一種の透視なのである。

カシミア家はこの力を使い小さな商人の家系だったものを一王族まで押し上げたのだ。

なおこの魔眼で見えるものは様々だが、主に売る商品の信憑性において使用し有名になっていったのである。

ミアの受け継いだのは“物”を見る魔眼ではなく“人”を見る魔眼だった。

つまり、人の出身地などの情報を見ることができる魔眼である。

あくまで情報だけであり思考までは読み取れないが。

しかし、ミアはこれを使ってセリーナの本当の名前を視てしまったのだ。

この少女が聖女セリーナ・Ａ・アインスフィアであると。

だが、ミアはそれを胸に留めることにした。この少女がこの学校に入って寮に入ったならば問い詰めようと思ったのだ。

もし、この場で聞いてしまえばルークの耳にも入ってしまう。

もしそんなことになれば、王宮の中が大混乱に陥りかねない。

だから、ミアはその胸にその情報を収めた。

＋＋＋　†　＋＋＋

街に出て二人と歩いているうちに次第に打ち解けあうことができた。特にセリーナとミアは好みが合うのか意外と仲良くなれた。

「お前ら本当にあったばっかかよ。長年友達だったみたいだぜ？」

「女の子には時間なんて関係ないの。息さえ合っちゃえばどんな話だってできるんだから」

ルークにそんなことをミアは言っていた。

セリーナにとってそれは人生で初めての経験だった。

「ねえ、ミア・ルーク。友達になってくれる？」

思わずそんなことをセリーナは言ってしまった。恥ずかしくて顔は真っ赤である。

ミアとはそんなセリーナを見て笑うと二人でこういった。

「ああ、もちろんさ」「ええ、もちろん」

こうしてセリーナに新たな友達ができたのだった。

第壱話　アカデミー入学と新たな友達（後書き）

誤字等がありましたら連絡おねがします

第弐話　入学試験でやっちゃった（前書き）

すみません…、遅れまくってます…。

第弐話　入学試験でやっちゃった

翌日、セリーナは言われたとおりに受付へと来ていた。

ちなみに、ルークに王宮に招くと言われていたが丁重にお断りしアカデミーの近くの宿に泊まった。

朝になって校門に行くとルークとミアが待っていて「頑張って」と応援された。

そんなわけで、今から入学のための試験が始まる。

＋＋＋　†　＋＋＋

第一の試験は筆記。

数秘学や文学等やり方さえわかればできるものに関しては簡単に解いていった。

問題は魔法学と歴史学だった。現代の魔法のほとんどを知らない

セリーナにとってこの問題はまさに地獄だった。理論はいくら理解できてもどういう方法で発動しているのかがわかっていない。はっきり言ってボロボロだった。

歴史学は知らない５００年間の歴史に関してだけなのだが５００年より前の歴史自体があまり問題となっていなかった。魔法学同様にボロボロだった。

余談だが、魔法学の中には古代魔法に関する問題も含まれていてその部分に関してだけは完ぺきな解答をしていたそうだ。

第二の試験は面接。

聞かれる内容は「どうしてこの学園に来たのか」や「何になりたいのかな」等の普通の質問から、「武器は何を使っているか」「どういう魔法を使っているか」等のことまで聞かれた。

言えるところだけを答えつつ言えないところや言いづらいところはぼかしたりごまかしたりでやり過ごした。

またもや余談だが、面接を受けた時の受け答えがあまりにも綺麗すぎてどこの令嬢だと思われていた。

第三の試験は実技。実技を先にやるべきじゃ？とセリーナは思った。

まずは、教師との模擬戦。使うのは貸し出された木製の武器だが。ちなみに使った武器は斧槍型のものだ。

教師との戦闘では本気でかかってこいと言われたので本気でやったら教師が吹っ飛んで行ってしまいそのまま終了。

ちなみに、この戦闘での評価は問答無用で満点だった。
次に魔法試験。なんでもいいから使ってと言われたので、古代魔法でも定評のあった魔法をいくつか発動した。どれもこれもが高火力過ぎて学園が大きく揺れたりした。
ちなみに、この魔法の評価も満点だった。
余談ではあるが、戦闘を担当した教師は元Aランク冒険者であったとか。魔法のほうを担当した教師は使われた魔法の出来に感激しすぎており、セリーナが使った魔法が古代魔法とは気づいていなかった。

これにて、アカデミー入学試験は終了したのだった。

＋＋＋　†　＋＋＋

そんなわけで入学試験を終え出て行ったセリーナは、ルークとミアと合流し街を歩いていた。

「入学試験どうだった？」

「筆記がちょっと危ない感じかな…」

「そう、でも大丈夫じゃないかな。話す感じそれ以外は大丈夫だったんでしょ」

「そうなんだけど…」

「いいじゃん。発表は明日だ。それまで、暇だろ？」

「そうね」

そう言って、街に繰り出した。

＋＋＋　†　＋＋＋

セリーナたちがそんな感じで街を歩いていた時、アカデミーでは教師の中でも位の高い教授たちが集まって会議を行っていた。

「此度入学試験を受けたセリーナ・エインフェリアについての報告

会議を開始したいと思いますが、皆様、資料は回っていますね？」

そう確認したのはこの学園の理事長であり、王宮付きの魔導師長でもあるカリエラ・エンブリッシュである。

「では、おほん。此度、入学試験を受けたセリーナ・エインフェリアですが、実技である戦闘・魔法に関しては担当教諭から文句なしの満点が出ています。理由ですが、戦闘では、始めた直後に模擬戦相手であったガンティス教諭が一撃で倒されております。魔法では担当教諭であるマリス教諭を驚かせるほどの魔力量と制御などを見せていますね」

話を聞いていた教授たちが一斉に騒ぎ出す。

話に出たガンティス教諭はここ最近入ってきた教諭だが、実力は冒険者ランクAという凄腕だ。むろん、少しは衰えてはいるものの、彼を一撃でしかも一瞬で倒せるものなどそうそういない。

次に、マリス教諭だが、これまた最近宮廷魔導師となった人物だが、魔法に関しての知識とその技能は魔導師長でもあるカリエラに継ぐとまで言われる人物である。そのマリスを驚かせるほどの人物などほとんどいないだろう。

そんな二人に満点を出させるセリーナ・エインフェリアとはどんな人物なのか。それこそ不思議なものである。

「静かに、話が先に進みませんよ。おほん。では、次に面接ですが担当者からは『どこかのお嬢様なんじゃないか』との声を聞かされました。調査を出しましたが、たぶん出てはこないでしょうが」

カリエラはエインフェリアという家名が貴族や王族の中にないのを知っていた。それに有名な商家なども把握しているカリエラの記

憶にエインフェリアという家名は一度も入ってきていない。では、彼女はお嬢様ではないのだろう。

「では、最後に筆記ですがこれが問題でした。数秘学や文学等の基礎学は完璧でしたね。しかし、歴史と魔法がちょっと違う意味でひどかったんです」

「ふむ、どのようにひどかったのじゃ？」

聞いたのは、便宜上理事長代理であり校長でもあるパリオット・G・クルメティア。カリエラはすぐに答えた。

「歴史ですが聖女様の出てくる５００年前の問題はすべてあっているのですがその後の５００年は一つも正解がないのです。魔法に関してもそうです。魔法の基礎はできているのに現代魔法の問題はすべてバツ。ついでに古代魔法に関しての部分はすべてマルというおまけつきです

このような試験結果からこのセリーナ・エインフェリアを特待生として迎えることを検討したいのですが、よろしいでしょうか？」

「どういうことじゃ？筆記試験はひどいのじゃろ？」

「いえ、そこら辺はどうでもいいのです。後からでも教えれば済むことです。重要なのは古代魔法に関しての知識を多く持っているという可能性です。我々の中でもそれなりに古代魔法を研究しているものや使用できるものもおりますが、ずいぶん昔に廃れた技術です。なかなか、分からない点が多いのですよ」

「ふむ、では、古代魔法を扱えるかどうかの確認を本人に取り特待生として迎えるか、普通の生徒として迎えるかを検討しようかの～。

では、カリエラ理事長そのようにお願いしますぞ」

「わかりました。ではこれにて会議を終了します」

そうして、アカデミーの会議は終わった。

このあと、セリーナのもとに連絡が入り、またいろいろ聞かれたのは言うまでもない。

そんな理由（わけ）でセリーナは特待生としてアカデミーに入学することとなった。

第弐話　入学試験でやっちゃった（後書き）

テストが近いので更新が遅れます。
誤字等がありましたら連絡お願いします。

第参話　アカデミーの授業とランキング

試験の翌日。セリーナは理事長室に呼ばれた。ルーク達と街を回って宿に帰るとアカデミーからの使者が来ていていろんなことを聞かれた。ちなみに嘘をつくなと言われすべてはかされた。聖女であるということはもちろん隠してはいたが。

そんなわけで今、セリーナは理事長室の前にいる。

「ううん…。ノックすればいいのかな…？」

そんな感じで迷っていると中から声が聞こえてきた。

「そんなとこいないで入ってきなさい」

「はい。失礼します」

セリーナが入るとそこにいたのは若いエルフの女性だった。

促され席に座ると自己紹介から始まった。

「あなたがセリーナ・エインフェリアさん？はじめまして、アカデミーの理事長で王宮付き魔導師のカリエラ・エンブリッシュです」

「セリーナ・エインフェリアです…。それで、私はなぜここに呼ばれたのでしょうか？」

「あなたの試験結果と対応についてですね」

セリーナは息をのんだ。まさか何かやっちゃいけないことをやってしまったのだろうかと不安そうな顔をしていると

「緊張しなくていいわ。入学試験は合格ですよ。ちなみに第3学年に入ってもらいます」

「わかりました」

「で、それでなんだけど、あなたを特待生として迎えるから、授業料とか寮費とか全部タダになるけどいいかしら？」

何を言われたのかわからないセリーナは茫然とした。特待生何の冗談？

「ええっと。理由はあなたの知識を教えてほしいって言うのが大きいかな。講師として古代魔法の授業をしてほしいのよ。この学園のシステムは知ってるわよね？」

「はい。生徒の中でも優れた知識がある場合は、研究室を持たせてもらったり、講師をしてもらうんですよね？」

「そう。それで、古代魔法の知識を教えてほしいわけよ。理論はある程度資料が残っててわかってても実際のところ、古代魔法の使い方とかほとんど知られてないのよ。

なのにあなたは古代魔法完璧に覚えてるみたいだし教えてほしいわけ。もちろん講師としての給金も出るわ」

「ええっと。いいですけど…」

「ありがと。その他にもアカデミーの仕組みを書いた資料を渡しち

ゃうわね」

渡された資料には『総合教育機関“アカデミー”の全て』と書かれていた。内容は授業の仕組みやら学園の地図やらだった。

「そういえば、ギルドカードは持っているかしら？」

「はい、持ってますけど」

「じゃあ、貸してくれる？この学園は生徒の管理をギルドカードで行ってるからね。今書き変えちゃうわ」

ギルドカードを渡し、しばらく待つ。

「はい、これで今日からあなたはアカデミーの生徒ね。今日は授業はないから、その冊子でアカデミーの授業スタイルをつかんでね」

そう言われ、理事長室をでる。

出ると、メイドらしき人物がいた。

「セリーナ・エインフェリア様ですね。寮までご案内させていただきます。ついてきてください」

「あ、はい。お願いします」

そうして、セリーナは寮の部屋へと向かった。

＋＋＋　†　＋＋＋

寮に帰り冊子を開く。

『クラス制度や進級について

アカデミーではクラスという分け方をしない。そのため、自分が取りたい授業のみを取り単位を取得する。

この単位は一定以上であると次の学年に上がるようになっているが単位の総量がその次の学年の分まで達していた場合飛び級することもある。なお、これを取らなければいけないという単位はなく、個人の力量に応じ授業をとることとなっている。

しかし、この単位は学園で受けられる授業のみで補えないようになっており、その分を学園ダンジョンの攻略やギルドのクエストでの単位を取得する必要がある。もちろん、非戦闘員の人にはそれに応じたクエストなども用意されているのでそれをこなしてもらう。

なお、毎年大勢の生徒が単位不足で年末にクエストに出かけることが多いのでそんなことにならないよう取得することをお勧めする。

』

すごい制度だと思いつつ、読み進める。

実に様々なことが書いてあったがその中で気になったものがあっ

た。

『戦闘系授業を受けている生徒の義務について
戦闘系授業を受けている生徒はその力を把握するためにランキングバトルを行ってもらっている。これは絶対参加であり、学園側からの指示でやってもらっている。
しかし、本人たちの同意があればその限りではなく戦闘を行ってもらう。
このバトルでのランキング上位者には単位が与えられる。ちなみに上から五人はSランクと呼ばれる。その五人以下１０人はAランク。その１０人以下１５人はBランク。その１５人以下２０人をCランク。その２０人以下２５人をDランク。その２５人以下３０人をEランクとし、Sランクから１０・８・６・４・２・１となっている。
しかしながら、死亡者を出すような戦闘は禁止されているが死ぬギリギリまでなら最良の医療術師で治すことができる。参加する諸君がんばってランカーになってくれたまえ。』

すごいことをしているなぁと思った。

模擬戦ではなく本気の戦闘。教師が判定をするために近くにいるため死亡者は今のところ０らしい。

「参加しちゃっていいのかな私…」

そんなことを考えつつ、ベットに横になる。

家具は備え付きでしかも部屋は王族などの人が入ることのできる上級の寮だった。

疲れが出たのかセリーナはベットで横になったまま寝てしまった。

＋＋＋　†　＋＋＋

そのころ、スフィア城の奥深くにある庭園では少女が舞い踊っていた。

「ああ、お姉様がようやくメアスフィアまで来てくれた。ああ、すぐ会いたいよ～♪」

「何が嬉しいのですか？」

「何がって、暇をつぶせる…おほん！もとい大好きなお姉様にもうすぐ会えるかもしれないんですよ。もう、待ちきれないわ～♪」

「はしゃぎすぎだぞ。嬉しいのはわかるがほかの精霊まで巻き込んで踊らんどくれ、城が揺れるわ」

そう言って出てきたのは国王であるブラムス。

「ごめんなさいね～。でも、抑えきれないのよ～。この４００年近く大きな戦闘とかもないし、暇つぶしで行ったアカデミーもすぐに連れ戻されちゃうし～」

「何もないのはいいことだよ。それにしてもお姉様とはどういうことだ？」

「簡単な話よ～。セリーナお姉様が帰ってきたの！今、この王都にいるのよ～♪」

その言葉にブラムスとメイドは驚いた。

「それは誠なのか！」

「ええ、でも騒ぎ立てちゃだめよ。クリスちゃんもね。お姉様だって静かにいたいだろうし。まあ、一度ここに呼ぶつもりではあるけど」

「わかった…。お前いいな」

「はい。その時までにもっときれいにしなくちゃ！」

クリスと呼ばれたメイドはそのまま掃除をし始めた。

ブラムスはそのまま少女と話を続ける。

「ところで、お前さんはどうするんだね？セフィリア・ティス・アインスフィア初代王妃殿下」

「もちろん！パーティの用意よ！」

その時の少女、セフィリアの顔はものすごく輝いていた。

第参話　アカデミーの授業とランキング（後書き）

次回はセリーナがミアに問い詰められます。

第肆話　ミアの問い詰めとセリーナの答え

セリーナが寝てしまったころミアは寮の部屋でセリーナが合格したことを知った。そして、特待生として迎えられ、上級の寮である貴族寮へと入ったことも知った。

だが、今すぐ部屋に行っても、きっと大変だろうと思い、夜に尋ねることにしたミアは、暇をもてあまし、魔法の研究をすることにした。

ミアの学内ランクはSランク3位という最高位クラスの位置にある。しかしそれは、普段のたゆまぬ鍛錬と魔法の研究の結果であり、決して才能という一言で済ませられるものではなかった。

ちなみに彼女の戦闘スタイルは魔法を主体とした接近戦である。武器は槍であるが、操作の魔法により空中での行使をし、しかも6本もの槍を同時に扱うという離れ技やってのけるのである。しかし、それほどの数を行使する場合自分の近くでなければならないという理由から接近戦をやっているのである。

むろん、手で使っても強い。普段は2本の槍を自らの手で繰りランキングでの勝利をしている。特別に強い相手でなければ滅多に使わないのである。

というわけで、彼女は今時間をかけて、魔法を研究している。今研究しているのは現在魔法の呪文詠唱破棄や高速呪文詠唱である。

現代魔法は古代魔法と違い形骸化され誰でも簡単に強い魔法が使えることが魅力である。強い魔法を使うのも簡単ではあるが、呪文が長くなっていってしまうのが難点であるため前衛の人間がいなけ

ればやりずらいのだ。
　ミアのように自身が強く、詠唱もできる集中力を保てるならいいのだがそういう人物は少ない。特に魔法を使う戦士が多いこの世界では、戦士の魔法は基本的に弱く詠唱の短いものが好んで使われている。強い魔導師の魔法はあまり使って行ける人物は少ないのである。

　そのため、ミアの研究している呪文詠唱破棄や高速呪文詠唱といった技術の研究は多くされている。しかし、どちらの方法も威力が下がり、下級の魔術と同程度の威力になるのに使う魔力量が多いという何とも不名誉な状態なのである。

　それを解消する研究をする方法を探すのは現代魔法を研究している人たちにとって一番の命題なのである。

　もちろん、新魔法の研究もされてはいるが現状では呪文詠唱破棄や高速呪文詠唱の研究が一番多いのである。

　ミアもその研究者の一人なのだが個人としては成功段階まで来ていた。槍の操作に使われている魔法は呪文詠唱破棄を利用している。しかし、その魔力変換効率は程１００％近い値でできているのだがこれは現状では操作や飛行といった攻撃魔術ではないものに限ってしまってる。論文としてアカデミーには提出して公表はされているものの、やはりあまり参考になっているわけではないらしく、攻撃魔法への転用はいまだされていない。

　しかし、古代魔法ではこの呪文詠唱破棄や高速呪文詠唱という技術はほぼ完璧に確立していた。現代魔法と違い古代魔法は魔力の違いで威力を分けていた。その為、呪文詠唱破棄や高速呪文詠唱を使用するときは流し込む魔力を少し多くすれば解決していたのである。

単純といえば単純なのだが。

そのため、ミアは古代魔法と現代魔法を組み合わせることで呪文詠唱破棄や高速呪文詠唱が可能になるのではと考えて結果として上記のような結果を得たのだが、やはり現状では使い勝手が悪いのが難点であった。

まあ、そんなわけでミアは自身の研究を進めている。操作等の魔法の呪文詠唱破棄での変換効率１００％とはいえ複雑な命令系統が確立できているわけではない。あくまで簡単な操作での１００％であり、複雑な命令での試行となると効率は３０％程度まで下がってしまうことすらあった。

そんな彼女ではあるが、複数同時思考（マルチタスク）による二重詠唱等のスキルすらある。

しかし、呪文詠唱破棄や高速呪文詠唱は最大の命題である。現状では、誰一人として攻撃魔法への実用はできていないのであった。

「変換効率は最大で８０％が限度でしょう…。操作なんかの簡単な魔法なら１００％近くまでは行けてもね…」

先にも言ったとおり呪文詠唱破棄や高速呪文詠唱を使用すると威力が下がってしまう。しかし、この二つの魅力は高速での魔法発動。その為、威力が多少下がる程度なら気にしないであろう。ちなみに、８０％というのは、このあとセリーナとともに完成させた完全に呪文詠唱破棄や高速呪文詠唱が確立したときの実際の変換効率である。

そんなわけで研究に没頭していたわけだが、ふと気がついて時計を見るとすでに１８時であった。

時間もちょうどいいだろうと考え、ミアは食堂へ行き2人分の食事をもらうとセリーナの部屋へと向かった。

＋＋＋　†　＋＋＋

ドアをノックする音でセリーナは起きた。どうやら誰かが訪ねてきているらしい。

「ふぁ～い。今開けますね～」

ドアを開けると、ミアがお盆を魔法で宙に浮かせ扉の前にいた。

「ごめんね、こんな時間に。もうご飯食べた？」

「まだですね」

「そう。よかった、無駄にならなくて」

どうやら、ミアは食べたかもわからないセリーナの分の食事まで持ってきていたようだ。

「ありがと」

「ううん。いいの。私としては別の本題があるからそのついで」

「？まあ、いいやあがって」

そう言って、セリーナはミアを部屋にあげた。

入ったばかりで最低限必要なもの（理事長が用意した）しかなかったが机と椅子があったのでそこに座り食べることとした。

食事の挨拶をしそのまま無言で食べる。二人でいるのに無言で食べるのに気まずさを感じるセリーナだったがミアの雰囲気からとてもじゃないがしゃべりかけることはできなかった。

食事が終わり、一息つくとようやくミアが声をかけてきた。

「聞きたいことがあるけどいいかしら？」

「答えられる範囲でなら」

無意識に答えた。

ここに来るまでにもいろんな人と話をした。そこで覚えたのは必要以上に自分を語らないということだった。だからこそ、答えられる範囲内をはるかに超えた一言が飛んできてセリーナは固まってしまった。

「なぜ、あなたが今ここに生きているのかしら、セリーナ・A・アインスフィア様？」

「へ？」

飛んできた言葉に思わず固まる。

なぜばれた？なんでわかったのなどの疑問符が頭の中で飛び交っている。

しばらく、そんな状態のまま答えられる時間がすぎる。

時間がたち少し落ち着いたセリーナは恐る恐る聞いた。

「ええっと、なんでそんなこと言うのかな？」

その言葉にミアは平然と答える。

「なんで？簡単ですよ。私には人の情報を見ることのできる魔眼があります。ルークが連れてきた女の子が何者なのか気になってつい使って見てしまったら、紹介された名前は偽名表記で本名はセリーナ・A・アインスフィアよ。何の事かと正直自分の目を疑ったわ。まあ、名前だけならおんなじ名前はいるかもしれないわ。でも、私の魔眼は、その人の持つ二つ名までをも見ることができるわ。だから、聞いたのなんで、歴史上死んだはずのあなたがここにいるの？」

セリーナはため息を付き、どう答えようか考えた。

だが、深く考えても仕方ないと思い、すべてを正直に答えることにした。

「わかった。全部教えてあげる。
５００年前の魔王騒動の真実と私がなぜ生きているのかを。
正直、思い出したくなかったけど曖昧な記憶の整合性がさっきまで見て夢で整ったみたいだし」

一息つき再びいう。

「今から語るのは、魔王ゼノンと私の話。
聞かなきゃよかったなんて言っても遅いんだからね」

そうして、セリーナは語り始める。
ねじ曲げられ、違う形で伝わっている歴史を。

第肆話　ミアの問い詰めとセリーナの答え（後書き）

説明が思った以上に長くなってしまったのに、問い詰めはたった数行に…。

次回は、セリーナの記憶回想による魔王ゼノンとの会話とセリーナの選んだ結果です。
次回は早めに投稿できるといいなぁ…。

第伍話　魔王の真実

魔王と対峙している。私はあいつを倒すためにここにいる。

「ゼノン。あなたは私が倒さなきゃいけないんだけど、先に聞かせてくれないかな？何であなたは国を襲うの？」

疑問だった。私にはこの魔王が国との戦争をしているのか。確かに見た目から魔王と呼べるほどの威圧を放ち、その能力も魔王にふさわしいのもであったし。

「語るまでもないな。もし、知りたいのならば我を倒せばよかろう。さすれば教えてやる」

「そう。なら戦いましょう」

始まった戦いは熾烈を極めた。近くに倒れていたベイはすぐにわき寄せてあったから問題なし。

魔王を倒す手段はすでに決まっている。これを使うならゼノンが油断しているときを狙う方が良かったけど、私にも思うところがあってこうして剣を交えている。

でも、結局わからなかった。だから、私は奴の首筋に歯を立て噛み付いて術式を流し込んだ。

流し込むと同時に自分の中から何かが抜けていく感覚もある。これが副作用だろうと思いながらも流し込み続ける。

すべてを流し込み終わりゼノンから離れる。

「何をしたのだ」

「破滅の術式を流し込んだの。いくら不死身といわれるあなたでも破滅から逃れることはできないでしょ？」

「何をばかなことをしているのだ。貴様が命を失うかもしれんものだぞ」

「わかってるよ。でもね、これが私の覚悟だ」

そういうと、ゼノンは黙り込んでしまった。

しばらく経つと魔王の体が少しづつぶれて見え始めた。

「なるほどな。まあ、これが私の運命だろうな」

あれ？ゼノンの口調が変わった。

「私は君たちにとってはわかりやすい的だったというわけか…。滑稽だな」

「どういうこと？」

「戦いを始める前に聞いたな。何故国を襲うのかと。答えようか。

現ラブリオール王を倒すためだよ。

それが私の目的だ」

それってどういうこと?

「いいだろう。教えようか。
現ラブリオール王・グロリアス・ババルドス・ラブリオールは自国に住む人間以外の種族を奴隷とする法を出そうとしていたのだよ。
ついでに言うとな、奴はこの大陸すべてを自らの国としようとしておったのだよ。
私のやりたかったのはそれを止めること。だが、奴はそういったことを表に出そうとしていなかったために私はわかりやすい敵になってしまったのだよ」

嘘でしょ…。現在(いま)を記せし禁断の書庫≪セカンドライブラリ≫にそんなこと記されてない。

「ほう、アインスフィアの一族か。まあ、よい。私にとってそのほかの種を守れるものがいればよかったのだが、もう無理であろうな。
そなたはどうするのだ?」

「私は…」

私はどうしたい…。……。

「私を封印してもらえない?」

「何故だ」

「簡単よ。私はラブリオールの王族に逆らえない。何かあった時に私は従うしかない。それに、そこにいるベイは絶対に良い国を作れるわ。

だから、私は信じる。彼が国を変えてくれるって。だから、私はいない方がいいの。きっと、私は邪魔になっちゃうから」

「いいのか？」

「うん。お願い。ああ、私を封印したあとベイに真実を伝えてあげて」

「いいだろう。私の日記を渡そう」

「ありがと。じゃあ、お願い。でも、私はあなたが嫌いよ。全く最初から真実を言えばいいのに」

「私にもいろいろあるのだよ。では、眠れ」

「うん。じゃあね。みんな……」

そうして、私の意識は消えた…。

＋＋＋　†　＋＋＋

「これが真実。魔王がやりたかったのは人間以外の人種を守ること」

セリーナが語り終えるとミアは黙り込んでしまった。

「どうしたの？何か納得がいかなかったの？」

「違うの。今の話を考えるとなぜラブリオール王国が聖女様が魔王を倒してからすぐにベイシス様によって倒されたのかの整合性が出るの」

どういうこと？という顔をしたのはセリーナだった。確かにこの国はスフィア王国と呼ばれているのは理解していた。でも、ベイシスが王国を倒した？なんで？といった疑問があるのだ。

「ええっとね。

聖女様…セリーナが魔王を倒した一か月くらい後にね、ベイシス様によって革命が起きたの。革命を起こした理由は伏せられていてわからないのよ。

でも、今の説明を考えると仮説だけど答えが導き出せる。

ベイシス様は最後のラブリオール国王の暴虐を止めるために革命を起こしたことになる。

それなら、整合性がとれるの。これはちょっとかなりヤバい真実ね」

セリーナはミアが話していることを聞いて思った。

なんで、伏せられたんだろうと。

「伏せられた理由は他の国への体裁かな。後、魔王とベイシス様が話しているはずなんでしょ？なら、あなたのやったことも知ってるはずよね。それがなかったことにされてるのも、きっとそれによってばれてしまうことを考えて伏せてるんだと思う。これは、本当に歴史を覆すような話ね」

的確にこたえていくミア。セリーナは、

「そう…。とりあえず、ここで話したことは内密にお願いね」

「わかってるわ。じゃあ、明日は一緒に朝ごはん食べましょ」

そう言ってミアは部屋に帰って行った。

「ベイ。あなたも悩んだんだね。ありがと、この国を守ってくれて」

セリーナは静かに泣いていた。その後、静かに眠りについた。

第伍話　魔王の真実（後書き）

……。

なんか、ものすごく書いていて、整合性が取れてない気がする…。
それに、何か無理やり話を進めてしまった気も…。

次回からは学校に行きます。っていってもセリーナは特待生なので、
かなり楽に単位が楽に取れます。
とりあえずランキング戦までが第一目標です。
早めに書ければいいな…＾＾；。

第陸話　授業（前書き）

［２０１１／１０／２２］変換ミスを修正

第陸話　授業

ミアに問い詰められた翌日、セリーナは理事長室に前に来ていた。

クラスというものが存在していないため、どうするべきかなどは全く分かっていないためだ。

取る単位数は少なくてもいいと理事長からは言われているものの、さすがに取れる分は取らないといけないし、そもそもどんな授業があるのか全く説明を受けていない。

だから、それを聞くためにここまで来たのだがやっぱり入り辛く、数分間扉の前で固まっている。

意を決し扉をノックしようとしたとき。

「いい加減、入りなさいな」

「はい。失礼します」

中に入るとカリエラは紅茶を飲んでいた。

「やっぱり来たわね」

「そうですね。知ってる人はあなたしかいませんし…」

「まあ、いいわ。もともと呼ぶつもりだったし。出る授業を決めてもらうことについては説明が必要でしょ？」

「はい」

セリーナは迷わずうなずく。このまま、放置されても何もできない。なので黙って話を聞く。

「授業に関してだけど、あなたは魔法学と歴史学のみでいいわよ。後は戦闘系の授業すべて取ってもらうわ。それだけね。

後、やってもらう授業だけど後期からやってもらうわ。今は初秋の月だからすぐにやってもらうことになるわ。

ギルドで依頼を受けるときは後で集中講義をやってもらうことになるから気をつけてね」

「わかりました。では、今日は授業はありますか？」

「自分で見て頂戴。はい、これが授業予定表」

そう言って予定表を渡された。

「今日は火曜よ」

火曜の欄を見る。あったのは、実戦式戦闘講習と戦闘訓練。見てみるとほぼ毎日戦闘訓練の授業が組み込まれている。

「わかりました。戦闘訓練は無理に出なくてもいいんですか？」

「ええ、出る必要があると思っている人だけが出てるわね。まあ、戦闘をしない人くらいしか休まないけど」

「それは暗に出ろって言ってます？」

「出てくれるならいい刺激にはなると思ってね」

「わかりました。出させていただきます」

「助かるわ。ああ、それと、近々大規模なランキング戦が行われるわ。必ず参加してね」

「わかりました。…？ランキング戦って一年を通して組まれてるものじゃないんですか？」

ランキング戦。それは生徒の実力を測るものであり、毎日行われている。

「そうなのだけれど、今回のは毎年行っている闘技大会のようなものよ。普通のランキング戦と違って大きく順位の離れた相手とも戦える。それがいつものランキング戦と違うところよ。あなたの場合、今後の相手を見極めるの必要だから絶対にでてもらうわ」

「わかりました」

「ああ、このランキング戦はＳ・Ａランクに入ってる人は強制参加よ。まあ、Ｓランク一位の人は理由があって出ないけど」

そうして、そのあとも少し会話したあとセリーナは理事長室を後にした。

＋＋＋　†　＋＋＋

セリーナは今、実戦式戦闘講習の講師と相対していた。実戦式戦闘講習の講師はセリーナの入試を担当した講師だった。名前はガンティス。もともと冒険者で紆余曲折あってこのアカデミーにきた講師だった。

ではなぜ、セリーナがいまそのガンティスと相対しているのかというと。

授業を受けに来て、始まった戦闘訓練を見ていると講師がやってきてこう言ったのだ。

『セリーナだったか？こいつらに本当の戦いってものをちゃんと見せてやりたいから手伝え。できるだろ？』

と言われ仕方なくやるはめになった。

使うことになったのは大剣。ハルバートじゃないのか？とも言われたが、どんな武器でも扱えるセリーナにとってはどんな武器でも問題ない。そのため、大剣を使うことにした。

「じゃあ、お前ら見とけよ。やるぞ」

見ている生徒にとってはセリーナは初めて見る生徒だ。その生徒がいきなり、ガンティスの相手をしろと指名を受けた。だからこそ、なぜ?という顔をしたものがほとんどだった。

しかし、戦闘が始まるとその顔は変わることとなる。

はじめに仕掛けたのはガンティス。使うのは片手剣。袈裟切りに振り下ろす。セリーナはそれを武器で受け止めた。

そして、受け止めたかと思うと次の瞬間にはガンティスは次の攻撃に入っており、それを見越したかのようにセリーナは受け流す。受け流すとすぐに流れのままガンティスに向け、大剣を水平に振る。

ガンティスはそれを楯で止めると無防備になったセリーナへと片手剣を振りかざす。それをセリーナは大剣をすぐさま地面へと突き刺し、体ごと避け距離を取る。

まさに実戦。普段であれば見ることも出来ない様な高度な技術満載の戦闘が目の前で行われている。切り方一つを取ってみても相手の隙を見抜き的確に入れる。それをうまくかわし次の攻撃に移る。その繰り返ししかしていない戦闘だったが、その中身はあり得ないほどの高度な技術が万歳だった。

１０分ほど経ったころガンティスが戦闘をやめる。

「ふう。助かった。普段見れない技術を見せることがなかなかできんからな」

「そうですか。役に立てたようで私も嬉しいです」

その日、ガンティスのもとには彼女は何者かという生徒が続出し

た。

もちろん、答えられるのは編入生ということだけなので聞きに行った生徒は納得のいかない顔をしていたそうだ。

＋＋＋　†　＋＋＋

その日、ルークはブラムスに言われ城の奥まで進んでいた。

「父上は何がしたんだろうな…。この奥にいった何があるんだ…」

何も知らされずただ行って来いと言われた。

その為、奥へ奥へとその歩みを進める。

しばらくすると、庭園が見えてきた。

「こんなところに庭園なんてあったか？」

確かに城は広かった。だけど、こんな庭園は見たことがない。

「いや、一度だけ来たな…」

小さい頃に一度だけ迷い込んだことをルークは思い出した。それは、もう遠い記憶でほとんど覚えていなかったが。

ふと思い返したように庭園の方を見るとそこには少女がいた。

「あら、いらっしゃい。ここにあなたが来たってことはブラムスが行けって言ったのかしら?」

国王でもあるブラムスを呼び捨てにした。それは、ルークには信じられなかった。

「あなたは?」

「もう、一度会っているのに忘れるなんてひどいわね。まあ、いいけど」

そう言って、無邪気に少女は笑う。

ルークは言われた言葉に疑問を抱かなかった。なぜだか、それがものすごくしっくりきたのだ。

「あなたには、お姉さまをここに呼んでほしいのよ」

と少女は言う。

「お姉さま?誰ですか?」

ルークは少女の頼みを聞いた。何の疑問も抱かずに少女の願いをかなえようと。

「あら、あなたが王都まで連れてきてくれたんじゃない。その人をここまで呼んで？」

「はい、わかりました。ところであなた様いったい…？」

ルークは最後に問うた。少女が何者なのかと。少女は答える。

「セフィリア・ティス・アインスフィア。初代王妃にして、この国の守護精霊よ。ちなみにあなたと召喚契約している楯の精霊は私の生み出した精霊よ」

第漆話　再会（前書き）

久しぶりに早い投稿です。

［２０１１／１０／２２］変換ミスを修正
入力ミスを修正

第漆話　再会

最初の授業から一週間程経った。受ける授業は魔法学と歴史学だけで後は戦闘系の授業。

出る授業すべてで模擬戦をやらされ、有名になりたくもなかったはずなのに有名になってしまった。しかも教師が懇切丁寧に教えてしまっていた。

その為、歩いているだけでも好奇の視線に曝されるセリーナはうんざりしていた。理事長が対策は打つとは言ってくれてはいるもののそう簡単にはいかないのも事実である。

だけど、今日は違った。夜に王宮に招待されたのだ。ルーク曰く『友達なんだから一度はね』とか言ってはいたもののなにかあるのだろうとセリーナは思っていた。

でも、訪れるのは一応５００年前と変わらぬ姿を見せる城。名前は変わってもその城が示すものは何も変わらない。それに、ベイシスの墓参りもできるかもしれない。そう思うと、セリーナは嬉しくて仕方ないのだった。

そうやって、セリーナは今日もアカデミーに行くのだった。

＋＋＋　†　＋＋＋

その頃、王宮奥の庭園では着々とパーティーの準備が進められていた。

少女・セフィリアは嬉しさの余り踊っているのだが、準備をしているメイド達はどことなく迷惑そうな顔はしているもののここ最近は見せてくれなかった笑顔を見れているのでまあいいかという感じである。

「来るのは夜だっけ？」

「はい、そうです。セフィリア様も手伝ってくれると助かるんですけど…」

セフィリアの専属メイドであるクリスはセフィリアに意見をする。

クリスはセフィリアのメイドではあるが同時に友達でもあった。

セフィリアが禁呪を使い自らを精霊とした頃からの友である。彼女は現在ではほとんど残っていない竜の血を持つ竜人である。その為、友としてメイドとして騎士としてセフィリアという友のために自分の生涯を使っている。

「わかったわよクリス。あなたに言われたら断れないもの」

「ありがとうございます」

「いいのよ。っていうか本当はその敬語もやめてほしんだけどね」

「仕事中ですので」

「堅いわね～。まあ、いいわ。何をやればいい？」

「はい、ではこちらに」

そう言って、クリスについていくセフィリア。

それを遠くで見守っている者がいた。

「セフィリア様の笑顔を初めて見たな…」

そう呟いたのはブラムス国王だった。

彼がまだ国王になる前、アカデミーを卒業し第一継承権を持つ者として王宮で過ごしているときのことだった。

その日はなぜか迷うはずもない王宮で迷い、彷徨っているといつの間にか見たこともない庭園にいた。そこで会ったのが少女であり、セフィリアという初代の王妃であった。

それからも何度も会ってきたが、この様に無邪気に笑っている姿は初めて見たのだ。

いつもいつもどことなくつまらなそうにしていたはずのあの王妃が笑っているのだ。信じられないものを見た気がした。

楽しそうに笑い、嬉しそうに踊る。

「ふむ。ここにいても仕方ないか…。仕事に戻るか」

そうして、ブラムスは戻って行った。

その後もセフィリアの嬉しそうな笑い声は響いていた。

＋＋＋　†　＋＋＋

アカデミーでの授業も終わり、寮に戻る。

セリーナは夜のパーティーに着ていく服を考えなければと思ったのだが、よく考えたら制服以外の服はほとんど持っていない。

そう思っていると、ミアがやってきた。

「やっほ」

「どうしたの？」

「着ていく服ないと思ってね。買いに行こ？」

「いいの？」

「あたりまえじゃない。それとも恥ずかしい思いをしたい？」

「ううん。ありがと」

「じゃあ、行こっか」

そうして、ミアとセリーナは服を買いに出かけた。

セリーナの背にあったドレスを買い寮の部屋に戻って着替えると迎えが来る時間になっていた。

ミアと一緒に寮を出ると既に迎えは来ていた。メイド服を着た女性がそこに立っていた。

「ミア・シア・カシミア様とセリーナ・エインフェリア様ですね」

「はいそうです」

「では、乗って下さい。城まで案内させていただきます」

そう言われ馬車に乗る。

１０分もした頃には城についた。

「着きました。案内しますので付いてきてください」

案内をしてくれる人の後ろを付いていく。

付いていく内にミアがセリーナに小声で話しかけた。

「こんな奥まで来たことないんだけど…。何度も来てるけどこんな奥にパーティーできる場所なんてないはずなのよ…」

「そうなの？」

「うん…」

そう話していると聞こえたのか案内人が

「大丈夫でございますので、心配なさらず付いて来てください」

「う…すいません」

「いえ、城のこんな奥まで連れてこられて不安になられるのも無理はないかと。ですが、問題ありませんので」

「分りました……」

メイドは優しく微笑む。

更にしばらく歩くと扉が見えた。

「ここです」

そうして扉が開いた。

開いたとたん少女がセリーナに向かって飛び出してきた。

「お姉さまーーーーーーーーー！」

「！？」

セリーナは飛びつかれた人物をまじまじと見る。

「って、セフィ！？」

第漆話　再会（後書き）

ようやく姉妹が再会しました。

ランキング戦まで遠いなぁ…。

第捌話　セフィリア初代王妃の歴史話（前書き）

遅れましたが投稿します。

［２０１１／１０／２２］変換ミスを修正
［２０１１／１２／３０］表現を変更・入力ミスを修正

第捌話　セフィリア初代王妃の歴史話

「お姉さま、お久しぶりです」

セフィの言葉を正面から聞くセリーナ。

状況が分らないセリーナは混乱し、どうすればいいのか分からないのか思考能力に限界を迎え、完全に停止していた。

「お姉さま？」

セフィが心配そうに言う。だが、セリーナは止まっていて答えない。

「はあ、まあこうなっちゃっても仕方ないか。死んでるはずの私がいるんだしね」

「そうよ！何でいるのよ！」

突如としてセリーナは声をあげた。

「あ、お姉さま♪」

「『あ、お姉さま♪』じゃない！なんで生きてんのよ！？」

「ええ？いいじゃないそんなこと。せっかくの姉妹の再会なんだから喜んでよ」

「あの、ちょっといいですか？」

話に割って入ったのはミア。

「聞きたいことはたくさんあるんですけど時間も少ないんですから食べながらでも話しませんか？」

ミアの言葉に全員納得したのだった。

＋＋＋　†　＋＋＋

パーティーを始めてすぐにセフィはセリーナのもとに駆け寄った。

「お姉さま～」

「セフィ！話を聞かせてもらうわよ！」

「いいよ～」

「呑気に言わないでよ…」

「私もいいかしら？どういうことなのか話を聞きたいですし、私はルークの婚約者として知っておきたいです」

「俺も参加した方がよさそうだな」

「うん。そうだね～。じゃあ、お話しましょうか。ゼノンを倒した後のベイ様の行動と私の行動を…」

そうしてセフィは語り始めた。５００年前のゼノン討伐より後の歴史の１ページを。

＋＋＋　†　＋＋＋

「この国を信じられないって？何でよ？」

私は突然ベイに訳の分らないことを相談され困っていた。

「いや、そうだな。我が父の言葉を聞いてしまったのだよ」

「どんなよ？」

「分りやすくまとめると我が父とその側近の貴族たちはは最初から私に近づくセリーナを魔王を討伐して帰ってきたら殺すつもりであったと言っていたのだ。そして、その手間もなく済んで良かったと。そして、自分たちの国が魔王を倒すという大きな成果をあげたことで他の国からたんまりと謝礼金を受け取り、それをどう分配するかを話し合っていたのだ」

私は耳を疑ったわ。正直それは私の神経を逆なでするものよ？お姉さまを殺す？

「ふざけているのかしら？お姉さまを殺す？」

「ああ、そう言っていた…」

「ふうん。そうなの」

「後、ゼノンの日記からわかったことも聞いてほしい」

その後、私はベイの話を聞き続けた。話が終わると彼はこう聞いてきた。

「私はどうしたらいい？」

迷わず答えたわ。

「ならみんな殺して、国を乗っ取ちゃえば？お姉さまを苦しめようとした奴らに容赦なんて絶対にしちゃダメ。貴方がお姉さまのした

ことを言いたいのなら、あいつらがいたら出来ないものだからこそ、乗っ取っちゃうのが一番だと思うな？」

これが最善の答えだと私は思っていた。ベイはその言葉を聞いて戸惑っていた。だから、私はだめ押しをするためにもう一言を追加した。

「あなたは優しい人だよ。でもね、あなたが求めるのはどんな国なの？あなたのお父さんの求めるような国なの？違うでしょ！なら、迷わずに進みなさい。私はいつまでもあなたを支えてあげる。お姉さまが守ろうとしたあなたをいつまでも守り支えてあげる。だから、迷わず突き進みなさい！」

その言葉にベイはうなだれていた顔をあげた。あげられたその顔には迷いや戸惑いといった色は全く見えず決意が見て取れた。

「ああ、わかった。なら、手伝ってくれないか？最高の国を作るために」

「ええ、いいわよ」

そうして、私達は革命を起こすために準備を始めた。

＋＋＋　†　＋＋＋

革命を成功させ国を立ててから一か月私は自分の体に違和感を覚えていた。

何というか頭の中で何かがちりちりと鳴っているような感じ。

何とも言えない違和感。感じることしかできないし何が起こっているのかも全く分からない。

「もう何なのよ…」

思わずため息をつく。5日前ベイと正式に結婚することが決まったし、これからもかなり大変になるって思っていた。

でも、この違和感は何なのか。こんな時期に最悪のことが起きても困る。

「病気になんてなってる暇がないんだから…」

そう思っていると何かが聞こえるような感じである言葉を感じた。

私はその言葉を口に出して言っていた。

「我が求めしは失われし現在(いま)…。今ここにそのすべてを明かせ…。現在(いま)を記せし禁断の書庫≪セカンドライブラリ≫…」

言葉を紡ぐとそこに出てきたのは一冊の本だった。

私はその本を開け読んだ。そして、すべてを読み終え理解した。

「そういうことなのか…。なら、私は…」

私はお姉さまを変えたという禁呪を迷わずに使った。

その後私は精霊へとその身を変えた。守護をつかさどる精霊としてベイの作り出した国と契約した。

その後も、様々な問題を解決しつつ暮らしていった。

ベイの死とかもあって泣いたりもしたけど今まで生きてきた。

＋＋＋　†　＋＋＋

「そんな感じの人生を送ったかな？」

セリーナは聞き終わるとセフィにあきれていた

「セフィ…。言っちゃダメなこと忘れてない…？」

「あ」

何を言っているのかわからないルーク・ミアは質問した。

「何を言ってはいけないんだ？」

「気にしないでいいよ～。でも、ここで聞いたことは心の中にとどめておいてくれるといいかな？」

「分りました。後、あなた様は初代王妃殿下でよろしいのですね？」

「そうだよ～。まあ、お姉さまがいたなら、お姉さまがなっていたとおもうけどｗ」

セフィはそういうと笑った。

「それはいいわ。じゃあ、あなたはあれを使ったのね？」

「うん。ほかの人にこれを背負わせるわけにはいかないしね」

「そう…。なら、いいわ」

そういうとセリーナは黙り込んだ。

その後もパーティーは進んだ。

＋＋＋　†　＋＋＋

パーティーも終わりメイド達は片付けを始めていた。

「お姉さま」

「どうしたの？」

セリーナはセフィに話しかけられた。

「その、今日はすいませんでした…。ご迷惑をおかけしたようで…」

「ん～。別に迷惑だなんて思ってないわ。正直に言うとベイの話とか聞けてよかったと思うし、何よりあなたとまた会えたことがとても嬉しいの。もう二度と会えないと思っていたんだからね、セフィ」

「そうですか。今日は楽しんでいただけましたか？」

「ええ。そういえば、セフィはこの都市から出られないの」

「うん。私は精霊でこの都市の守護を司っているから…」

「そう…」

セリーナはうなだれたように言うともう一言セフィに言った。

「じゃあ、私はたまにここに来るようにする」

「!?いいのですか、お姉さま?」

「ええ、また会いましょう」

「はい♪」

その日はそうして姉妹は別れた。

「あ、そうそう。お姉さま。闘技大会頑張って下さいね。見に行きますから」

「プレッシャーかけないで!」

セフィが別れ際に言った言葉にちょっぴりこれは負けられないなと思った。

第捌話　セフィリア初代王妃の歴史話（後書き）

次回は闘技大会の予選を書きたいと思います。

第零話　ランキング闘技大会予選始まります（前書き）

すいません。投稿が遅れました。

［２０１１／１２／２０］一部表現を変更

第零話　ランキング闘技大会予選始まります

あのパーティーから早一か月近くたった。

ランキング戦の最高峰である闘技大会があと数日で開催される。

かくいうセリーナも妹の前で恥ずかしい姿は見せられないと張り切ってはいるのだが、本気を出すわけにもいかずもっぱらどこまでの力を出すのかを考えながら一か月を過ごしていた。

今は、ミアと一緒に食事を楽しんでいた。

「あと少しで始まるわね」

「そうね。今年こそルークに勝てるといいんだけど…」

「ルークはSランク2位なんだっけ？」

「うん。勝てたことがないかな…」

ここ数日セリーナはミアの愚痴をかなり聞いていた。

というのも、ミアは入学したての頃からかなりの実力を持っていた。その為、第一学年が終わるときには既にAランク5位の実力を持っていた。もちろん彼女のランクをここまで引き上げたのは闘技大会である。

ルークもこの大会でAランク2位となっていた。

その第一学年の時の闘技大会でミアはルークと戦って負けている。

ルークはミアに勝った後にSランクの人に善戦しながらも負けた。

次の年の闘技大会ではミアとルークは決勝戦で戦った。
ミアはこの時には呪文詠唱破棄を利用した無詠唱での操作の魔法をある程度のところまで完成させており、６本の槍でルークと戦った。ルークも持てるすべての力を使い戦った。結果はルークの勝利。この年もミアはルークに勝てなかった。
ちなみにこの年の闘技大会で二人はＳランク２位と３位になった。Ｓランク１位は数十年前から欠番もいいところでＳランクの最高位は２位であると今では考えられるようになっていた。

今年こそはとミアは思っているのである。

ちなみにパーティーが終わった後の夜、セリーナはミアに呼び出されお願い事をされた。

『魔法の研究手伝って』

もちろんセリーナはそのお願いに即うなずき、この一か月で呪文詠唱破棄や高速呪文詠唱の技術をほとんど確立させていた。操作などの簡単な魔法であれば完全に１００％の高率で、攻撃魔法に関しても５０％以上の変換効率をたたき出すまでに至っていた。

なので、これで今年こそはとミアは張り切っているのである。

出来得るならばミアに勝たせたいという気持ちもあるがセリーナにとって今回の闘技大会は妹の期待がかかっている大会なのだ。

セフィも本気のセリーナならばこんな闘技大会などでなくても勝てるとわかってるはずだ。つまり、こういうことだ。

『見ていて楽しめる戦いを』

勝ち負けで測ることのできない“モノ”を見せろ。そういうことなのだ。

皆それぞれに思うところがあってそれぞれが闘技大会に挑んでいくのである。

＋＋＋　†　＋＋＋

数日後、闘技大会本番。

闘技大会ではＳランク５人とＡランク１０人は参加義務が課せられている。それ以外は全員自由参加である。まあ、Ｓランク１位は実質的にいないも当然なので１４人が参加義務を課せられている。

もちろんこの大会に参加するのは戦闘系の学生ほぼすべてである。その為、最初から本選出場が決まっているＳ・Ａランクの１４人以外は予選をし本戦で戦う３２名の内１８人を決めるのだ。

予選はサバイバルである。全9戦でそれぞれで2人づつ選ばれる。今日からはその予選9戦が行われるのである。セリーナはこの予選からの出場である。

もちろん大乱戦になるのはいつものことで、本当に実力のあるものはこの予選でランク外だったとしても予選を通過してくる。だからこそ、この闘技大会はランキング戦の順位を上げるに持ってこいの場所でもあるのだ。

だからこそ、会場の熱気はものすごいことになっている。

それを肌で感じながらセリーナは大会の開催式典が終わるのを今か今かと待ちわびた。

第零話　ランキング闘技大会予選始まります（後書き）

次回から闘技大会です。

第壱話　予選一回戦～三回戦（前書き）

遅れてすいません。
短いです。

第壱話　予選一回戦～三回戦

セリーナが出場するのは予選九回戦の為、現在セリーナはルーク・ミアと一緒に水晶モニターの前に座っていた。

魔法の力により映像を飛ばす魔法で水晶を媒体に映像を映し出しているのだ。

会場は一つなので一回戦ごとにやるのだが、いかんせん時間がかかるそのため基本的に一日三試合やり、三日かけて予選を終わらせるのである。

今日は一回戦から三回戦が行われる。その為、やることもないので観戦することにしたのだがコロシアムの席は既にうまってしまっていたのでこうしてモニターで見ることとなったのである。

一回戦での本命と言われているのはBランク一位、マルセルス・スルト・エンブリオ（人間）。３代前の当主が聖騎士（パラディン）の地位を得て貴族となった、比較的歴史の浅い家の長男で実力はそれなりでA～Bを行ったり来たりしている。第５学年である。

もう一人本命がおり、こちらもBランク４位、クルック・クルックゥ（バーディア）。こちらは平民ではあるが国の創設時よりずっと国の騎士団に誰かしらを排出しており、歴史ある名家とも言われるほどの一族である。第４学年。

「たぶん一回戦で勝ち残るのは、マルセルスさんとクルックさんかな」

「そうなの？」

「ああ。Ｂランクでもトップランカーだからね。特にマルセルスさんは実力的にはＡランクの人にも匹敵するほどの力は持ってるよ」

「そうなんだ」

ルークの説明にうなずくセリーナであった。

そんなわけで、一回戦が始まった。全体で１０００人近くの応募があり、予選は１１０人程度から２人選ぶ形になっている。

コロシアムはなかなか広いため、百人程度が入ったところで狭いことはないのではあるが…。

まあ、結論から言おう。一回戦の勝者はルークの言ったとおりになった。

＋＋＋　†　＋＋＋

二回戦である。

二回戦には本命と呼べるような人はいない。しいて言うならばＣランク一位が本命と言えるかどうかくらいである。

一回の戦いで出るのは１００人もいるのである。Ｂランクは１５人。入ってこないこともあるのだ。

「まあ、今回は純粋に実力のある人を見極めるために見る形になるのかしらね」

「たぶんそうだろうな」

ミアとルークが言葉を交わす。

始まった二回戦はなんといえばいいのか…、盛り上がりに欠けるような感じで幕を閉じることとなった。

開始直後から微妙な感じの泥沼な戦闘となり、勝ち上がったのはＣ・Ｄクラス一人ずつとなった。

味気ない戦闘だったが勝者には盛大な拍手が贈られた。

「なんというか…。味気ないね」

「うん。華がないっていうか、盛り上がる要素がことごとくなかったかな。本命と言われる人がほとんどいなかったしね」

「そうね。次に期待しましょう」

＋＋＋　†　＋＋＋

三回戦では、Ｂランク７位と１０位の人が活躍した。

この二人が常に多技を繰り出し、とても華のある戦いとなった。

『本日はこれにて終了です。また、明日の試合でお会いしましょう』

第弐話　予選四回戦～六回戦（前書き）

遅れました。

第弐話　予選四回戦～六回戦

本日は予選四～六回戦開催日である。

大きな問題もなく。セリーナ達は翌日を迎え、運よく席を取れたので今日は闘技場（アリーナ）で見ることとなった。

本日の本命はやはりBランクの選手に集まっていた。四回戦ではBランク2位と8位。五回戦はBランク3位。六回戦はBランク6位と9位。

妥当な判断だろう。やはり通過するほとんどの選手はBランクであると言われている。そのため、Bランク選手はほぼ全員無条件で本命と言われているのだった。

「で、今日はあまり期待できそうにないの？」

「そうだな。Bランク2位と3位の人が出る四回戦と五回戦はそれなりに見れるかもだけど、あまり参考にはならないかもね。どちらの人も結構冷静な人で勝てる程度の実力しか出さない」

「そうね。あの人たちに期待はできないわね。まあ、六回戦に出る6位の人と9位の人は仲が悪いことで有名だからつぶしあってくれるかもね」

「そうなんだ」

のんきな話をしながらセリーナ達は試合が始まるのを待つのだった。

＋＋＋　†　＋＋＋

四回戦。やはり試合は予想通り進んだ。Ｂランク２位の選手が来た人を迎撃しているだけだった。問題は８位の人。

全くの不意打ち感覚だった。大きな範囲魔法をぶっ放したのである。これも予想はできていた。もともとＢランク８位の選手は調子に乗りやすく、魔法に関してはかなり優秀だったのだ。

結果として放たれた範囲魔法で２位以外の選手が脱落そのまま試合は終了。

「正直あれはないと思うぞ……」

「そうね……。個人戦で負ける気はしないけど、やっぱり死屍累々になることが否めないわね」

「そうなんだ……。意外と楽しい勝負ができそうな気がしてきた」

セリーナは胸を高揚させた。まあ、語り継がれる聖女様にとってこの程度は造作もなくやれることであるのは確かなのだが……。

＋＋＋　†　＋＋＋

五回戦はBランク3位の人の独壇場だった。

何というか、誰ひとりとして対抗できない状態で戦闘が行われたという感覚。

結果、Bランク3位は予選通過。残りは、Cランクで生き残っていた人らしい。

「無いな……」

「無いわね……」

「うん、無いかなこれは……」

感想という感想は得られなかった。

＋＋＋　†　＋＋＋

六回戦。白熱した。Ｂランク６位と９位が本気で戦ったのだ。

まあ、結果としてその余波で他の選手は脱落。だが、終わるまであの間続いた白熱した戦闘は目を見張るものがあった。

「あれくらいいい勝負ができるといいな」

「ええ。でも、Ａランク同士だともっと激しい勝負になるでしょ？」

「そうなの？」

「ああ、最悪フィールドが原型をとどめないくらいまで壊れるな」

「あはははは……」

セリーナは乾いた笑いをこぼすのだった。

『本日はこれにて終了です。また、明日の試合でお会いしましょう』

第参話　予選七回戦～八回戦

本日行われるのは第七回戦～九回戦だ。

セリーナが参加するのは九回戦であるためセリーナは準備で忙しい。

そして、今回の本命はやはり基本はＢランクの生徒である。

セリーナは確かにちょっとばかり有名になってしまってはいるのだが誰も数少ない人達しか彼女が聖女と呼ばれている人物本人だとは知らないので本命とは思われていなかった。

そんなわけで始まる七回戦～九回戦だ。

＋＋＋　†　＋＋＋

七回戦。Ｂランク１０位以内の選手はほぼ出尽くした中Ｂランク選手でいまだ残っている選手１１・１３・１５位の選手が七回戦に出場する。

まあ、言わずともわかるだろう。

泥仕合だった。

１１・１３・１５位の選手の実力は伯仲してるわけではないが個人のやり方次第ではいくらでも変わるのだ。

結果は１１位と１５位の選手が勝ちあがった。

内容は１１・１３・１５位の選手が勝ち残りその後１時間近くに及ぶ泥仕合を展開した。

互いに牽制しながら攻撃を繰り返したためだ。

結局、体力の少なかった１３位の人が倒れ試合が終わった。

＋＋＋　†　＋＋＋

八回戦。

Bランクからは14位が出場。

聞く意味もなく、14位は勝ち上がりもう一人はCランクから勝ち上がることとなった。

＋＋＋　†　＋＋＋

「次はセリーナが出てくるわね」

「そうだね。本気を出す気はないんだろうけどどうするつもりだろ？」

「さあ？でも、本気なんて出したら結界を簡単に壊すでしょうね」

「それは、さすがに怖いよ。まあ、勝ちあがて来るのを楽しみにしよう」

「そうね」

ルークとミアはそんな会話をしながらセリーナの出場する九回戦の開始を待った。

第肆話　予選九回戦

第九回戦が始まる数分前セリーナは武器を確認していた。

空間から武器を出して戦うセリーナだがこの武器は別の空間に置いているものを取ってきているわけではない。その実は、その場で作り出しているのだ。

ではなぜ空間から取り出すのかだが、これはセリーナが作った武器を完全に再現し再び作れるようにするためだ。この空間にはセリーナが作り気に入った武器の設計図のようなものが登録されており、空間に手を入れると武器の名前と形が脳に現れ、それを選択し空間で再現し取り出すのだ。

セリーナが使っている武器すべてはゼノン討伐に赴く際に作り続け自分にあった武器を作ってそれを魔力で作り出すことで無駄を省いたのだ。

ちなみにこの設計図に書かれているものを取り出す際に変更することができる。設計図が変わるわけではないので問題はない。

だから自分で作った武器を刃引きしたものとしてとりだしたのだ。その場で取り出しても良かったのだがルーク達に言われそれはやめた。なぜか？現代魔法ではそんなことできるはずないからだ。

そんなわけで、セリーナは一番使い慣れている武器である先端が垂直に曲がった大きな二本の大剣を刃引きし用意した。

「さあ、行こうかな。手加減はちょっとでいいよね？」

そう言うと、セリーナはコロシアムのフィールドに向かって歩いて行った。

＋＋＋　†　＋＋＋

『さあ、これで予選は最後となります。九回戦です。注目はBランク5位マルク・ロイドネス選手。Bランク12位ロルチェ・クラルドス選手です。順当にいけばこの二人が勝ち上がるのではないでしょうか』

ナレーターの声が聞こえる。セリーナが注目されるわけはないのでルークとミアはちょっと苦笑した。

『この戦いで本選に進む32名が決まります。では、まいりましょう！』

そして、戦闘とは呼べぬ一方的な戦いが始まった……。

「まずは小さい奴から片付けるか。いい判断ね」

セリーナは始まった瞬間に多くの生徒に囲まれた。まずは弱い奴から、これは単純な理由だろう。強い奴を倒すよりも弱い奴を削っていった方が明らかに楽だからだ。

背負っていた二本の大剣を手に取る。

「さあ、始めましょうか」

セリーナは左手に持った大剣を水平に凪ぐ。

「【風の刃（ウィンドブレード）】！！」

振るった大剣より風の刃が生れ、向かってきた生徒を吹き飛ばす。

剣を凪いだ勢いをそのまま回転する。

「【大嵐（サイクロン）】！！」

生まれたのは小さな、だけど大きな風の本流。すべてを吹き飛ばす風の流れがすべてを吹き飛ばす。

セリーナは回転を止め、フィールドを見る。まさに死屍累々。参加していたはずの生徒の半分は今のセリーナの魔法に巻き込まれリタイアしていた。

コロシアムにいた一部を除いたすべての生徒が目を見開き、起こった光景を疑う。

それはそうだろう。セリーナの見た目は明らかに１０歳程度の子供の姿だ。そんな少女が一気に参加者の半分を削って見せたのだ。どうなるかなど自明の理だ。

参加していた生徒の目がいっせいにセリーナに向く。その目はこう物語っていた。

『こいつは早めにリタイアさせないと』

と。

次の瞬間、残っていた生徒のほとんどがセリーナに向かう。そんなことなど知らぬセリーナは再び魔法を使う。

「【大地震乱（アースクエイク）】！！」

瞬間、大地が大きく揺れた。地面に立っていたものは例外なく膝をつきバランスをとる。

そして、地面が裂けた。大きな断裂が生まれ地面が盛り上がりフィールドを破砕してゆく。

そして、すべてが収まるころに立っていられたのは両手でかろうじて数えられる程度の人数だった。

「へぇ、これでも耐えられる子がいるんだ。なかなか鍛えてるみたいだね」

セリーナは感想をもらす。

前にも論じたことがあるが古代魔法の威力は魔力を込めた量に依存する。使い方の違いから様々に使われるが現代魔法のように最適化されているわけではなく、力押しもいいところだ。

だが、セリーナにとって魔力は掃いて捨てるほどあるので無駄遣いしても何ら問題はないのである。

『な、なんということでしょう！始まってたったの数分！参加していた生徒は今や数えるほどしか残っていません！しかも、その状況を作り出したのは少女のような女の子です！』

「……。まあ、見た目は確かに子供だけどさ……」

軽くふてくされるセリーナ。実際は２０歳なわけである。見た目はいくら子供だからとはいえど傷つくものは傷つくのだ。

「まあ、いいかな。残ってる人もかかってきなさい」

セリーナは残っていたものを挑発する。

結果は聞かずともわかるだろう。

Ｂランク５位がかろうじて生き残り、本選に出場するのはランク外のセリーナとＢランク５位マルク・ロイドネスとなった。

ちなみに観戦していたルーク達は『これはないだろ……』という風にセリーナのやりっぷりにびっくりしていたそうな。

第伍話　本戦一回戦（前書き）

［２０１１／１２／２０］一部変換ミスを修正

第伍話　本戦一回戦

予選も終わり本戦が始まった。とはいっても、一日でできるのは最大でも8試合、最低でも2試合程度なので一回戦がすべて終わるのに最低でも2日、最高8日かかる計算になる。

その為、試合自体が後の方となっているセリーナは本戦の開始日に思いっきり寝坊し、ミアともども本戦開始のセレモニーに堂々と遅刻した。

と言っても、何かに影響があるわけでもなく、ただただ試合を見守ることとなる。ちなみにセリーナは一回戦最終試合である。

セリーナは順調にいけば決勝でミアかルークと当たることとなる。残念ながらルークとミアは（あくまで順調に進めばだが）準決勝で戦うことになっている。

ミアは決勝でルークと戦えないことを悔しがっていたが、決勝でセリーナと当たるならいいかとすぐに機嫌を直した。

セリーナの一回戦の相手はBランク一位マルセルス・スルト・エンブリオ。聖女であるセリーナが負けることはないが実力があるものであるのは確かである。

そんなわけで本戦スタートである。

＋＋＋　†　＋＋＋

第一試合

ルーキス・M・アインスフィア（Sランク2位）VSポルポッチョ・ラドクリフ（Bランク6位）

結果は言うまでもないがルークの勝利である。

ルークは魔法を使うまでもなく、剣の腕だけでポルポッチョに勝った。

第二試合

リターナ・クルペック（Aランク4位）VSロロイエ・グリブルトン（Aランク7位）

勝ったのはリターナ。

ロロイエは完全な砲台型の魔導師でリターナはスピード重視のレンジャー形のスタイルだった。

ロロイエも別に体術が弱いわけではない。でなければＡランク７位は取れないであろう。いかんせん相手が悪かった。スピード重視の軽戦士に体術が使える砲台型魔導師が勝つのはほぼ不可能である。

そんなわけで、リターナが勝ち上がった。

第三試合

ルンプルス・ルルクルス（Ｂランク１５位）ＶＳラックス・ゲオベルト（Ｄランク一位）

もちろん結果はルンプルスの勝ち。

地力が違いすぎて勝負にならなかった。

Ｄランクで本戦に出れただけでも十分とラックス言っていたが、悔しそうだったのは言うまでもない。

第四試合

モロス・クルンペランド（Ａランク９位）ＶＳエクスペリア・マンガーン（Ｂランク１０位）

勝者・モロス。

これまた地力の違いがはっきりと出た形になった。

第五試合

リューク・エルメロイ・クルワッハ（Cランク2位）VSマルクト・ランバラルム（Bランク11位）

勝ったのは何とリュークの方だった。

マルクトは魔法戦が得意な魔導師タイプだが近距離もなかなか強い。だが、計算違いだったのはリュークの速さと精密な狙撃だった。

リュークは遠距離戦を得意とし、弓と魔法を駆使し相手を倒すタイプだ。対しマルクトは近距離戦で稼ぎつつ大きな魔法を詠唱、一撃で仕留めるタイプだった。

相性の悪さから負けたのだった。

第六試合

クリット・クルククゥ（Bランク9位）VSバリウム・バリリンス（Bランク14位）

勝者はクリット。名前の通り、クルック・クルククゥの妹である。

勝因は一瞬の隙。クリットはアサシンタイプで一瞬の隙をつき倒

すことが得意で普通に戦闘をしつつ狙いを定め一撃で倒す。

そのため、攻撃が比較的大ぶりなバリウムは隙が出来やすく、開始5分でけりがついた。

第七試合

オーエン・リブロイエン（Aランク2位）VSミア・シア・カシミア（Sランク3位）

当然の如く、勝ったのはミア。

セリーナとの研究で完成した無詠唱魔法を使い操れるようになった12本の槍を使い勝負したミアは、始まった瞬間に相手を地面に槍で縫い付けた。そして、瞬時に近づき喉元に槍を突きつけ、降参を促した。

本当に一瞬のことで何が起こったのかわからなかった人が多かった。セリーナはミアの使いこなしを見てうなづいていた。

そんなわけで勝者はミアである。

第八試合

ルルイエ・ロックリバー（Bランク2位）VSマルクド・ムルルス（Cランク4位）

勝利者はルルイエ。

堅い防御をマルクドが突き崩せるはずもなく、ルルイエ得意の水魔法で終わった。

第九試合

マシュー・レイクリバー（Ａランク１０位）ＶＳブッシュルズ・レントレントン（Ｂランク３位）

何と勝利はブッシュルズ。

堅実なまでに攻めるマシューの攻撃を耐えつつ、少しづつダメージを与えて倒したのだった。

第十試合

モルモッツ・フリューゲル（Ｂランク８位）ＶＳリリアンナ・フォルシア・クリュレンツ（Ｓランク５位）

勝利者はリリアンナ。

ＡランクとＳランクを何度か経てようやくＳランクに落ち着いた彼女に予選で大量の選手を倒したような範囲魔法はもちろんＢランク８位が使うような魔法で倒されるはずもなく一撃にて終了。

魔法の剣による大斬撃。

あっけない終りに観衆は少し不満を漏らしていた。

第十一試合

黄泉瀬神威（Ｓランク４位）ＶＳエリック・ノードルント（Ａランク５位）

勝ったのは神威。

はじめはエリックの方が優勢に見えていたのだが、一瞬のうちに形勢が逆転。一撃にて戦闘終了。

誰もその一撃を見ることができなかった。

第十二試合

ゴートン・レミントン（Ａランク６位）ＶＳクルック・クルックゥ（Ｂランク４位）

接戦という接戦だったが勝ったのはゴートン。

接近戦は互角。勝敗を分けたのは魔法だった。

クルックの隙をついて拘束魔法を発動。その後、大魔法を叩き込んだ。

第十三試合

ラヴィニア・グリュンヒルド（Aランク1位）VSマルク・ロイドネス（Bランク5位）

当然、ラヴィニアが勝利した。

時間はかからず、高位の魔法を発動したラヴィニアの一撃が直撃。あっけない勝利といえよう。

第十四試合

ロロンヌ・シュビドゥビィ（Bランク7位）VSスルト・ラプンツェル（Cランク1位）

勝者ロロンヌ。

やはり地力の違いがはっきり出た。スルトは終始ロロンヌに押され、反撃もできぬまま倒された。

第十五試合

ラスタート・ブリューヌ（Ａランク３位）ＶＳランドマーク・タワーバベル（Ａランク８位）

勝者はラスタート。

魔法の打ち合いになり、最後に大きいのが入りランドマークが倒れ終了。

第十六試合

マルセルス・スルト・エンブリオ（Ｂランク１位）ＶＳセリーナ・エインフェリア（ランク外）

言うまでもないが勝者はセリーナである。

勝負はセリーナがマルセルスに修行をつけるかのごとく行われた。

セリーナは攻撃を仕掛けるマルセルスの攻撃をすべていなし、攻撃に対する評価を口に出し本当に修行を付けていたのだ。

マルセルスは納得しないながらもセリーナの言っている事すべてが事実であり納得せざるを得なかった。

結局一時間かけてセリーナは修行の如く戦闘を終わらせた。

もちろん最後は一撃でだった。

第陸話　本戦二回戦（前書き）

［２０１１／１０／２２］変換ミスを修正
［２０１１／１２／３０］変換ミスを修正

第陸話　本戦二回戦

本戦一回戦もすべてが終わり、本日から二回戦が始まる。一回戦ではそこまで大きな番狂わせもなければ普通に終わったといえるだろう。

そんなわけで二回戦も着々と行こうと思う。では、どうぞ。

＋＋＋　†　＋＋＋

第一試合

ルーキス・M・アインスフィア（Sランク2位）VSリターナ・クルペック（Aランク4位）

勝者はルーク。

ルークの魔法は普通の魔法とは違う。ハッキリ言うと悪いがルークは魔法が物凄い下手だ。まともに使えないといった方がいいかも

しれない。

だが、ルークにはそれを補っても余りある力がある。精霊召喚だ。

精霊たちに好かれる体質を持ち、たくさんの精霊と契約し、加護を受けているルークは魔法があまり使えない代わりに彼らに魔力を渡し精霊魔法を使ってもらうことで魔法を使う。

精霊魔法は現代魔法と違い、古代魔法とほぼ同質の存在で一瞬で発動する。そんな魔法を連打されて守りきることもできずリターナがダウン。

そのまま試合終了。

第二試合

ルンプルス・ルルクルス（Ｂランク１５位）ＶＳモロス・クルンペランド（Ａランク９位）

モロスの勝利。

ＢランクとＡランクの差は大きかったのか始まって数分で片が付いた。

勝負は非情なのだ。差が大きければその戦いは簡単となりつまらないものとなるだろう。

まあ、仕方ないのであろう。

第三試合

リューク・エルメロイ・クルワッハ（Cランク2位）ＶＳクリット・クルククゥ（Bランク9位）

勝負は熾烈を極めた。

一回戦での戦闘を見るに、クリットは近づいての一撃で仕留めるタイプであり、リュークは距離を稼ぎ魔法と弓でじわじわ責めつつ大きな魔法で一撃で仕留めるタイプである。

そんな二人の戦いである。クリットに近づかれ逃げるリューク。それが延々と続き、リュークによって放たれた大魔法を避けたクリットが一撃を当て勝負がついた。

接戦というよりは泥仕合のような熾烈を極めた戦いだったが、見ていた観衆は満足であったことだろう。

第四試合

ミア・シア・カシミア（Sランク3位）ＶＳルルイエ・ロックリバー（Bランク2位）

見るも無残な戦いだった。

先刻の通り、ミアは効率１００％の操作魔法を完成させた。その関係から、セリーナはミアに一つの魔法を教えた。

【剣舞（ブレイドダンス）】。これは、操作の魔法を完全な形態で完成させたものだ。一度の発動で空間に浮かべた武器を完全に掌握し、操作する魔法である。

これを利用することにより逐一唱えなおさなくとも武器を操作し続けることが可能となる。

そんな魔法を使い勝負するミアの攻撃はルルイエの堅い防御を徐々に削り続けた。耐え続けることもできず倒れたのだった。

第五試合

ブッシュルズ・レントレントン（Ｂランク3位）ＶＳリリアンナ・フォルシア・クリュレンツ（Ｓランク5位）

リリアンナはＡランクとＳランクを何度か経てようやくＳランクに落ち着いた。そんな境遇の為、ランクの差というものをしみじみと感じている。そのランクにいる人物がどの程度の実力を持ち、どのような攻撃を好むのかなどを徹底的に分析しつつ戦うのだ。

なお、リリアンナが得意としているのは魔法で編んだ剣による斬撃。範囲魔法にも匹敵するほどの大きさを持ちながら、迫ってくるそのスピードはまるで普通の剣を振るかのようなのだ。

堅実にダメージを稼ぐブッシュルズの攻撃はリリアンナの大斬撃

を前にしたら風前の灯に等しかった。

結果は言うまでもなく、リリアンナの勝利で終わった。

第六試合

黄泉瀬神威（Ｓランク４位）ＶＳゴートン・レミントン（Ａランク６位）

黄泉瀬神威。唯一の東方からの留学生。その戦闘スタイルは異常なまでの速さと精密な攻撃を組み合わせた、本当の意味での一撃必殺。学内で彼女のスピードに付いていける者はいないとまで言われるほど速いのだ。と言っても、ミアの槍の操作やルークの精霊魔法を前にしたらそのスキルも通用しないのではあるが……。

しかも、彼女は小心者で臆病なのだ。その為、隙を見つけるのが下手で逃げ回った末にようやく見つけた隙に一撃を叩き込む形で今の地位にいるのだ。

そんな彼女の戦いは一回戦と同じ形での決着となった。

拘束魔法を仕掛けようも高速で動きまわる彼女を前にゴードンは攻めあぐね高位の魔法を詠唱。結果、大きな隙をつくり、神威はその隙をついて一撃にて戦闘終了。

第七試合

ラヴィニア・グリュンヒルド（Aランク1位）VSロロンヌ・シュビドゥビィ（Bランク7位）

ラヴィニアは現在最もSランクに近いと言われている人物である。完全魔導師タイプであるのにその強さは異常なまでに高く、彼女を倒せるものはそういなかった。

とはいえ、現状として彼女はリリアンナと何度もSランクを争った相手でもあった。だが、ラヴィニアはまだ第二学年。まだまだ、先があるのだ。

そんな人物にBランク7位程度では対抗できるはずもない。現代魔法なのに大量に連続して飛んでくる魔法に耐えきれずダウン。

ラヴィニアの才能を垣間見ることのできる一戦だったといえるだろう。

第八試合

ラスタート・ブリューヌ（Aランク3位）VSセリーナ・エインフェリア（ランク外）

ラスタート・ブリューヌ。平民の中でも有名な一家でその実は首都において二番目に大きな商家の一家である。

そんな商家から出た天才児。剣も魔法も得意でかなりの強さになる。が、いまいちこれといった決定打がなく、いまいちな戦闘しか

できない。

そんな彼の戦闘スタイルを矯正することが今回のセリーナの目標だった。

セリーナは彼の癖というか考え方が彼の成長を止めていると気づいた。

それは、自分の限界を定めること。ここがもう限界と思いこむことにより自分の最大値を定めてしまっていたのだ。

そこでセリーナはラスタートに攻め続けさせた。延々と続く戦闘にラスタートが諦めかけた時にセリーナは声をかけた。あなたってその程度なの？と。

結果、彼は怒り、セリーナにラッシュをかけた。セリーナはそれも受け続けた。ラッシュが終わり、ラスタートが倒れた時にもう一度声を掛けた。やればできるじゃない。と。

第漆話　本戦三回戦（前書き）

［２０１１／１０／２６］変換ミスを修正

第漆話　本戦三回戦

本戦三回戦である。

二回戦も終わり、実力者が段々と分ってきた。今回もなかなか良い戦いとなるだろう。

＋＋＋　†　＋＋＋

第一試合

ルーキス・M・アインスフィア（Sランク2位）VSモロス・クルンペランド（Aランク9位）

勝者は当然の如くルーク。

戦闘の内容はあっさりとしたもので、モロスの攻撃は一撃通らず、終始ルークのペースで進んだ。結果、耐えきれなくなったモロスが倒れた。

第二試合

クリット・クルククゥ（Bランク9位）VSミア・シア・カシミア（Sランク3位）

言うまでもない。勝利はミアだった。

走り回り逃げるクリットを追いかけるミアという構図がしばらく続いたのだが、クリットが少し体勢を崩した瞬間に11本の槍をクリットを囲むように地面に突き刺し逃げられないようにして降参を促し終了。時間的には待った方であろう。

第三試合

リリアンナ・フォルシア・クリュレンツ（Sランク5位）VS黄泉瀬神威（Sランク4位）

神威のスピードは学内では神速と言われるほどに早い。かといって、リリアンナの魔法剣の範囲は範囲魔法に匹敵する。

そんな2人の戦いは、時間がかかった。リリアンナの振り回す魔法剣を持ちまえの速さで避け続ける神威。だが、範囲魔法にまで匹敵する魔法剣の攻撃を避けながらではなかなか近付けない。

そんな戦いが崩れたのは一瞬のことだった。一瞬の隙をついて神

威がリリアンナの懐に潜り込んだのだ。だが、リリアンナも負けてはおらず、入り込んできた神威を蹴り飛ばす。しかし、一度近づかれたせいで魔法剣は使えず、普通の剣を使い接近戦をする羽目となる。

その後、綺麗な剣捌きで神威を退け続けたリリアンナだが、神威のスピードについていけなくなりダウン。勝者は神威となる。

とても見ごたえのある戦いであった。

第四試合

ラヴィニア・グリュンヒルド（Aランク1位）VSセリーナ・エインフェリア（ランク外）

何と大魔法が飛び交うひどい戦いとなった。観客席には防御魔法が張られているものの大きな魔法を連発されかなり危なかった。セリーナはラヴィニアに合わせた戦い方を選んだつもりだったのだが結果として言えば大失敗だったのだ。

防御魔法が壊れかけたのを見てセリーナは戦術を変更。速さを生かした戦法へと変え、瞬時にラヴィニアを倒した。

いやぁ、失敗した。と、思っているのはセリーナだけで、観客としては高位の魔法をたくさん見れただけ収穫だったのかもしれない。

第漆話　本戦三回戦（後書き）

次回からは戦闘描写をつける予定です。
うまくできたらいいな……。（できなかったら前回までと同じになるかも……）

とりあえず、頑張ります。

第捌話　本戦準決勝第一試合

『本選もついに準決勝。残っているのはSランク2～4位とまさかのランク外選手！
さあ、今回も行きましょう！』

＋＋＋　†　＋＋＋

準決勝第一試合。

ルーキス・M・アインスフィア（Sランク2位）VSミア・シア・カシミア（Sランク3位）

『さあ、始まります準決勝第一試合。対戦は入学当初から頭角を見せ前年度には既に今のランクにたどり着いていた二人、Sランク2位のルーキス・M・アインスフィア3年生とSランク3位のミア・シア・カシミア3年生です。
一回戦から三回戦まで共にその実力は完全には発揮されておりません。この戦いではどのような勝負を見せてくれるのでしょうか！

では、戦闘開始まであと数分。皆様、ご期待してお待ちください』

「はは、そんなに注目されるとやりづらいんだけどね」

「そうね。でも、一言いいかしら？」

「ん？なんだい？」

「今日は負けないわ。今日こそ勝ってみせる」

「そうか。なら、俺も負けられないな。いい勝負をしようか」

「ええ。手加減とかしたら容赦しないわよ」

「それはお互い様だよ。おっと、時間みたいだな」

『それでは、始まります。
レディー、ファイ！』

戦闘が始まった。

まずはミアが古代魔法【剣舞（ブレイドダンス）】を発動。ほぼ同時にルークが剣精霊ヴァルアを召喚。ミアは瞬時に槍を数本飛ばすが剣によって弾かれた。

次に動いたのはルーク。ヴァルアに指令を出し、ミアを追撃すると同時に楯精霊セフィールを召喚。防御を固めつつ、剣精霊での攻撃を実行する。だが、ミアも負けてはいない。ヴァルアの攻撃を完璧に捌き攻撃を与えつつ、ルークへの追撃をする。

攻撃を与えつつも、耐えきれなくなったヴァルアは後退しルークのもとへと戻ると、ミアはそのまま追撃。ルークは戻ってきたヴァルアを武装形態にし、剣を手に取る。すでにセフィールも武装形態である楯の状態になっている。そこへと攻撃を加えるミアだが、ルークは飛んできた槍を軽く剣で振り払う。振り払った勢いのまま突っ込んでくるミアに袈裟切りで剣戟を加える。大ぶりなそれを受けるミアだが、あまりの威力に後退を余儀なくされ仕方なく下がり、膠着する。

「やっぱり、堅いし一撃が重いわね」

「そう言うミアこそ、その速さは一体なんだい？少しでも気を抜いたらやられそうだ」

「ふふ、大会が終わるまで秘密よ。槍よ踊りなさい！」

再び槍が舞い踊る。ありとあらゆる方向からミアの槍がルークに攻撃を仕掛ける。ルークは剣と楯を使い飛んでくる槍を防ぐ。防ぎながらルークは土精霊ドリアードを呼び出す。

「ドリアード！クエイク！」

『分ったわ』

ミアのいるあたりの地面が砕け割れる。ミアは慌てて、空中に逃げるがそこへさらにルークは追撃をかける。

「ヴォルト！サンダーボルト！」

『おう！』

ミアへと雷が迸る。ミアはそれを見て瞬時に槍に命令を出す。

「足場に！」

その命令に従いミアのもとにあった二本の槍を足場にその場から脱出。雷は槍に当たり、槍は黒く焼け焦げ使い物にならなくなる。ミアの槍は後１０本。再び、手元に二本を呼び寄せ、残りの八本も一度自分のもとに呼び寄せる。

その間にルークは氷精霊フロストを呼び出す。

「フロスト！フリーズ！」

『了解』

瞬間、ミアの足元が凍りつき始める。ミアは、すぐさま退避し、数本の槍を飛ばす。当然防がれるがそれを見越し、ミアは魔法を発動していた。

「【噴き出すは炎。応ずるは暗黒。すべてを飲み込み燃える黒炎よ。その全てを飲み込みて彼の身を焼け。全てを喰らいて我が敵を討て】！！ゲヘナブレイズ！！」

ミアのもう一つの切り札融合魔法。二つ以上の属性を持たせた魔法の発動は本来出来ないのだが、それを発動の段階から組むことで発動可能としたのだ。

ゲヘナブレイズは炎と闇の力を組み合わせた魔法。能力は発動段階で込められた魔力が尽きるまで焼き尽くす魔の炎を発生させるこ

と。制御により自身へのダメージは消せるが、制御自体が難しい為簡単には消すことはできない。作った本人であるミアですら使うのを躊躇うほどだが、今回の場合は相手の攻撃を限定させられるうえに魔法すらも燃やしてしまうため聖霊の使う魔法を抑えるためにはベストな選択と言える。つまり、ミアは接近戦を挑むために魔法を封じたのだ。

だが、ミアは公式な場としては初めて融合魔法を使った。融合魔法自体の構想は昔からできていたのだが、それを確実なものとしたのはセリーナがいたからこそなのだ。それを知らないルークはすぐさま黒い炎を消すために水精霊ウンディーネを呼び出す。

「ウンディーネ！ハザードウォーター！」

『うん！』

すぐさま大量の水が降り注がれる。だが、降り注いだはずの水は逆に炎の勢いを強くしただけで終わる。ゲヘナブレイズの黒い炎は魔法を喰らうとその魔力を吸い勢いを増すのだ。その為、炎は勢いを増し精霊すらも燃やしにかかる。それを感ずいたのかウンディーネやほかの召喚されていた精霊達は自分から消えていった。残ったのは、武装化してるヴァルアとセフィールのみだった。

『ルーク気を付けなさい。あの黒い炎は何かおかしいわ』

『うん。あの炎には絶対に触れないで』

「分った！」

ルークは黒い炎がない空間へと走る。そこにミアの槍が飛んでき

た。

「くっ！」

かろうじて防ぐルーク。ミアはすぐさまルークに追撃をかける。ルークは飛んできた槍を黒い炎の方へとはじき出す。その為、槍は炎の中へと消えていく出てくることはなかった。飛んできた槍をすべて弾き、炎の中に放り込み、飛んできた方を見据えると、ミアは槍を二本持ち接近戦を挑もうと走ってきていた。

「ミア！この炎はなんだ！」

「今、言わなきゃならないかしら？」

そう言い、接近戦が始まる。

二槍と剣と楯の勝負。ミアは槍の連撃を仕掛け、ルークは楯で防ぎつつ剣で確実に攻撃する。黒い炎は絶えず燃え続けるため、魔法戦が繰り広げられることはない。しかし、二人の接近戦は魔法戦にも劣らないほどに過激に行われた。

ミアが槍で突けば、ルークがすかさず剣で弾く。弾かれたと同時に槍を薙ぐように振れば、それを防ぐように楯が配置されすぐさま剣が迫ってくる。それを体を反らし避け、再び槍で薙ぐ。薙がれた槍を剣で防ぐと楯で突撃をかける。それを槍をクロスさせ防ぐと再び攻撃を繰り出す。

まさに熾烈を極めた戦いが繰り広げられた。そんな接戦が一時間も続いたが炎は消えず燃え続ける（実はミアが魔力を流し込んでいた）。そして、決着の時が訪れた。

ミアが槍を薙ぐが体制を崩し、その隙を狙いルークが槍をはじき出す。残り一本となった槍で応戦するミアだったが、ルークは楯で槍を弾き、剣を喉元に突きつけた。

「参ったわ」

『決まったーーーーーーーーーー！勝者、ルーキス・M・アインスフィア3年生！素晴らしい戦いをしてくれた両名に盛大な拍手を』

盛大な拍手が二人に送られる。

『ところでミア・シア・カシミア3年生。この炎はどうしたら消えるのでしょうか』

「あ、忘れてました……。しばらくすれば消えますが今日は整備に回して明日改めて第二戦をした方がいいと思うわ」

『そうなんですか？では、そのようにさせていただきます。では、皆様。明日の試合もお楽しみに！』

こうして、本戦準決勝第一試合は終了した。

第捌話　本戦準決勝第一試合（後書き）

第二試合も載せるつもりだったんですが時間がかかりそうなんで割ります。

第玖話　本戦準決勝第二試合（前書き）

［２０１１／１１／１９］変換ミスを修正
［２０１１／１２／３０］変換ミスを修正

第玖話　本戦準決勝第二試合

『ええ、本日は先日行われるはずだった準決勝第二試合を行います』

とまあ、そんなこんなで本戦準決勝第二試合始まります。

＋＋＋　†　＋＋＋

準決勝第二試合。

黄泉瀬神威（Ｓランク４位）ＶＳセリーナ・エインフェリア（ランク外）

『準決勝第二試合。選手は神速の二つ名を持ちその速さは学園一とまで言われるＳランク４位黄泉瀬神威（よみせかむい）３年生となんとランク外からここまで勝ち上がりその全ての試合で一度も傷すら負っていないセリーナ・エインフェリア選手だーーーー！』

その言葉にセリーナは苦笑いを浮かべつつも試合が始まるのを待

つ。

「そ、そんなことないです。私なんてまだまだです」

そう言っているのは神威。前述のとおり、神威は気弱で臆病な性格をしている。そのため、どんな言葉を聞いてもそんなことないと思ってしまっている。調子に乗るよりはいいのかもしれないが、逆に謙遜というか自分の否定がここまで行くとどうしようもないように思えてくる。

「ねえ？」

「は、はい？わ、私ですか？」

「あなた以外誰がいるのよ……。何でそんなに弱気なのよ？」

「え、あの、その……、何でと言われても……」

「自身を持ちなさい。あなたは間違いなく強い。私だって苦労するほどね」

もちろん嘘である。セリーナにとってあのスピードは対応できるレベルなのだ。もちろん、簡単とは言わないが。

「え、その、それはどういう？」

「試合を終えたら教えてあげるわ。あなたは間違いなく必要な人材だしね」

「？」

神威が疑問符を頭に浮かべている。もちろんあくまでそんな風に見えるだけであって、実際にはそんなことはないのだが。

（この大会が始まってからどことなく視線を感じる。というより、妙な魔力が渦巻いてる。下手に本気を出すわけにはいかないかな）

セリーナはこの闘技大会が始まってからずっと妙な視線を感じていた。それが、どのようなものか見極めようともしていたが、尻尾を見せないためそれも難しい。

（とにかく、何かが暗躍しているのは間違いなさそうだし、そうしたら間違いなく戦力がいる。私だけで出来ないことはないけど、かなり難しいしね。

とりあえずは、この子を本当に強い子に変えてあげないと）

『では、試合を始めます。

レディー、ファイ！』

瞬間。神威の姿が消えた。セリーナはすぐさま持っていた大剣（今使っているのはいつもの大剣ではなく刀身がまっすぐでたくさんの文字が刻まれている）を後ろに向け振る。その速さは普通の速さではなかった。

「ふへ？」

神威はあっけにとられた。最初から全力を出して自分の出せる最大の速さで後ろに回り込み迫ったのにも関わらず目の前の少女は何事もなく対応したのだ。だが、神威も負けてはいなかった。異常な速さで振るわれた大剣を二本の短刀をクロスさせ防ぐ。

「へぇ。これに対応できるんだ。性格とは違いかなり強引な攻めをするのね」

「な、何で？この速さに付いてこれるはずないのに……」

「簡単よ。だって、あなたの速さの出し方さえ分かってれば対応策はないことはないもの」

「え？私の速さの出し方がわかる？」

「ええ、今の一瞬さえあれば十分だもの」

セリーナは神威が消えた一瞬をしっかりと見ていたのだ。そして、その一瞬からその速さを可能にしている方法と対応策を紡ぎだしたのだ。

「嘘……」

神威はその事実を受け止められなかった。この学園に入ってからの三年間で自分の速さに対応できるものはいなかったのだ。ルークとミアはきちんと防御した上で止まったところを的確に攻撃し神威を倒している。つまり、神威の速さの術は誰にも暴かれておらず、対応もできていないのだ。言うなれば、防御に徹しきちんと隙をつく以外はないのだ。

だが、セリーナは違った。どのようにその速さを実現し、どうやって防げばいいのかすら暴き、神威の必殺の一撃を完全に防いだのだ。

実はこれには裏がある。セリーナはわざと神威に打ち込ませたのだ。前の試合をしっかりと見ていたセリーナだが、その速さがどのように生み出されているのかは理解できなかった。その為、最初から打ち込ませるためにわざと大剣を選び、なおかつ、打ち込んでは来ないだろうと見えるように態と力を抜き神威に打ち込ませ、その速さを見極めたのだ。

「なら試してみなさい」

神威はその言葉と共にセリーナに再度突撃を仕掛ける。

セリーナは腰にさしていた短剣を引き抜き、神威の突撃を防ぐ。

「まず、その速さの秘密ね」

セリーナは神威にしか聞こえないように小さな声でしゃべる。もちろん、その間にも神威は何度も神速の攻撃を仕掛け続ける。

「まずは自分の体に薄い空気の層を作って身体保護を作り出す。これで、怪我はないわね。

次に、身体強化。しかも、符術による簡易式。発動は任意で一瞬で発動が可能。これで蹴りだす瞬間に使ってスピードを作り出す。

最後に、風の魔法によって速さを倍加させる。これによってスピードは蹴りだしたときの数倍で、この間、僅か一秒にも満たないわね。

これで、突撃を仕掛ける。まあ、種が割れれば簡単ね。だって、風の魔法で常に自分を押しているのだもの。風の流れさえ読めれば対応はできる」

神威の動きが止まる。

「あ、あなたは何者なの？今まで、誰一人この方法を見破れた人はいないし、対応して見せた人もいない」

「試合が終わったら教えてあげる。断言するけどあなたのその術、間違いなく一級品よ。ここの教師だってそのスピードで３つの術式を発動なんてできないもの。だから、自信を持ちなさい」

「わ、分ったわ。わ、私の術を見破れる人からの言葉だもん」

セリーナはその言葉にうなずく。

「じゃあ、最後の講義ね。あなたの方法は確かにすごいけど、非効率的よ。もっと効率的にその速さを実現できるわ」

セリーナはそう言うとある術式を唱える。もちろん、古代魔法なのだが。

「【電光石火（ソニックムーブ）】」

瞬間、セリーナは神威の後ろにいた。

「速さを追い求めた人が作り出した術式よ。純粋に速さのみをあげるならこっちの方が明らかに効率がいい」

「は、はい」

「降参するかしら？」

「う、うん。だってこれ以上やったってたぶん勝てないから」

神威がそう言ったことにより決着はついた。

『決まったーーーーーーーー！昨日は2時間近く時間をかけた戦いでしたが、本日はたった数分の攻防でした。ですが、やはりここまで来るだけあってすごい戦いを見せてくれました。両者に拍手をーーーーーーー！』

盛大な拍手が二人に送られる。

「あ、今日の夜私の部屋に来てもらえるかしら？」

「わ、私ですか？」

「だから、ここにはあなたしかいないでしょ。まあ、いいわ。お願いね」

「分りました」

こうして、準決勝第二試合は終わった。

第玖話　本戦準決勝第二試合（後書き）

何でこんな簡単な勝負に……。もっと長くてきつい勝負になるはずが、セリーナの強さを考慮して書いていたら、明らかにセリーナが強すぎる事態に。まあ、実際に強いわけですしいいんですが……。

とりあえず、これで次は決勝戦です。いい勝負をさせてあげられるといいな……。

第拾話　決勝前夜の話

「え？それほんとなんですか？」

「ええ、でも、口外は禁止よ」

「い、いえいえ。そもそも、私あんまり友達とかいないし話す人もいないです……」

セリーナと神威の準決勝の終わった夜。神威は言われたとおりにセリーナの部屋に訪れていた。神威が部屋に入ると、セリーナだけではなく、ミアもいたので若干うろたえた神威だったが、セリーナが気にするなというと本当に気にしなくなった。裏話的に言うと、セリーナが精神安定の魔法を使って落ち着かせたのだが。

それで、やってきた神威にセリーナは自分の正体を明かした。本来なら、叫んでしまうような性格をしてる神威だが、先ほど言ったようにセリーナが精神安定の魔法を使っていたため、落ち着いた反応をした。

「そう。でも、今日からは私達が友達になってあげるわ。ミアもいいわよね？」

「ええ、でも、あなたの目的はなんなわけ、セリーナ？」

「戦力がいるの。まあ、理由は言えないけれどね。というか、まだ、

正確なことはわかってないの。だから、ちゃんとわかるようになったら教えるわ」

「え、えっと。じゃあ、私をパーティーに入れるってことかな？」

神威の質問に答えたのはもちろんセリーナ。

「当り前よ。あなたは育てがいがあるし、戦力には申し分ないわ」

「伝説の聖女様にそう言われるとちょっと自信がわいてくる」

「言ったそばから……。まあ、いいわ。取りあえず、口外しないようにね。国のトップは私が生きていたことは知ってるけど、公表する意味がないってことで隠してるから。

まあ、私自身が戦力やらにされるのがいやなだけだけど」

その後、セリーナは、神威・ミアと一緒にお茶を楽しみ。その日を終えた。決勝戦は一日置いてからだ。

＋＋＋　†　＋＋＋

とある宿屋で、メイド服を着た少女と執事服を着た少年が話し合っていた。

「あの少女がキングベヒーモスを倒した少女ですよね？」

「ああ、そうだね、姉さん。彼女で間違いないよ。魔力波動が一致してるし間違いないはずなんだけど……」

「実力を隠しているだけなのか、魔力波動が一致してるだけの別人か」

「それはないよ。魔力波動が同じ人物なんて世界中探して一人いれば奇跡のレベルだ。一卵性双生児ですら違うことが多いというのに」

「だよね。じゃあ、間違いなく彼女よね？」

「ああ、でも、あの少女がどうやってキングベヒーモスを倒したのかが全く分からない」

「考えても仕方ないのかしら？」

「そうだね。だから、今は主から仰せつかった計画を進めないと」

「そうね、そうしましょうか」

そして、夜は更けていく。彼女らが何をしているのか明らかになるのは大会が終了した後である。

第拾話　決勝前夜の話（後書き）

かなり遅れましたが最新話です。
というか、あれ？短い？それなりに話を作る予定が必要なことを書いてたら、というか必要なことしか書いてない。
とりあえず、次回は決勝戦です。

第拾壱話　本戦決勝戦（前書き）

［２０１１／１１／１９］変換ミス等を修正
［２０１１／１２／２０］入力ミスを修正

第拾壱話　本戦決勝戦

『本選もついに決勝戦。今大会もいよいよ終わりを迎えます。では、参りましょう』

＋＋＋　†　＋＋＋

決勝戦。

ルーキス・Ｍ・アインスフィア（Ｓランク２位）ＶＳセリーナ・エインフェリア（ランク外）

『決勝戦！学内ランク現最高位とされるＳランク２位のルーキス・Ｍ・アインスフィア三年生に対するは、ランク外から勝ち上がるもその戦闘センスは、あの神速の二つ名を持つ黄泉瀬神威三年生を経ったの数分で倒す実力の持ち主、セリーナ・エインフェリア三年生だ！』

「セリーナ、君に勝てないのはわかってるけど自分の全力を持って

戦わせてもらうよ」

「謙遜しないで、あなたの実力は軍でもトップに入れていいレベルよ」

「勝てないのは事実だろ？」

「さあ、どうかしら。全力で来なさい」

「ああ」

『では、試合を開始します！両者準備はよろしいですね？』

「ああ」「ええ」

『両者の確認も取れました。では、始めます！
レディー、ファイ！』

始まった瞬間だった。ルークはすべての精霊を召喚し、武装化した。

様々な武器の形態を取る精霊達。セリーナが視認できただけでも、剣に槍、鞭に斧と様々だ。もちろん楯になるものもいれば鎧になっているモノもいる。

「あら、本当に全力で来るのね」

「もちろん」

「それ重くないの？」

「ないな。精霊に重さの概念はほとんどないからな。物質化（武装化）しても重さはほとんどない」

「そう、なら私も全力でいかせてもらうわ。できる限りだけど」

そう言うと、セリーナは空間を割る。出てきたのは剣の山。それが空中から降り注ぎ、剣の森とも呼べるようなフィールドが完成する。

「な！？」

「私の全力を見せると言ったわ。いちいち出しなおすのも面倒だから今まで作ったほぼすべての剣を出したわ。使いたければ使うといいわ。まあ、あなたには精霊達の武器があるし、使う必要は感じないけど」

「……そうですね」

ルークは絶句する。魔力による物質生成は魔力が切れれば消える。だが、その維持に必要な魔力だって馬鹿にはならないのだ。それを軽々とやるセリーナがやっぱり規格外なのだと再確認した。

セリーナは近くに刺さっている剣を抜くとルークに突撃を仕掛ける。もちろん、ルークも応戦するために剣精霊が武装化している剣を引き抜き、楯を構える。

そのままセリーナは袈裟切りに剣を振る。それを楯で防ぎ剣で攻撃を仕掛けるルーク。しかし、セリーナはあり得ない行動を起こした。防いだ楯にぶつけた剣を使い体を浮き上がらせそのまま剣を捨

て、空中に逃げたのだ。

「んな！？」

「何の為にこの量の剣があると思ってるの？」

そう言ってセリーナは着地した場所の近くにある剣を二本引き抜き、再びルークに攻撃を仕掛ける。

「っ！

イフリート！火炎激！」

『おう！』

炎が生れ、セリーナへと迫る。それを、剣を軽く振るっただけで消してしまうセリーナ。

そのままの勢いで、ルークに切りかかるセリーナ。今度は二つの剣を使った大斬撃。それを楯ではなく背にある斧を手に取り防ぐ。防いだと同時に斧を大きく振り攻撃を仕掛けるが、まるで、背に羽根が生えているのではないかと思えるほどに空中を駆け避けてしまうセリーナ。ここまで、一分も経っていない。

「さすがね。防御が堅いにもかかわらずちゃんと攻撃まで仕掛けてくる。やりづらい」

「セリーナこそ早過ぎるし、攻撃が変則的すぎる。対応できてるのが奇跡みたいに思える」

「あら、そう？でも、これで終わりじゃないんでしょ？」

セリーナは持っていた二本を放り捨て、近くにある大剣を手に取る。

大剣を振りかぶるセリーナ。防ぐために再び盾を手に取るルーク。だが、その一撃は簡単には防ぎきれず、防いだには防いだが、勢いのまま後ろへ吹き飛ばされる。

その後も素早く動き的確に攻撃を加えるセリーナだが、一撃一撃の威力が小さくなってしまう。大剣を使えば確かに威力の大きな一撃を放てるが少し遅くなってしまう。逆に普通の剣ならば威力不足。かといって、本気の本気で攻撃すれば抜けないことはないがルークに大きな怪我を負わせかねない。

逆にルークはついていくのがやっとだった。セリーナの正体を知っているからこそ、彼女が全力ではないのはわかっているが、かと言って簡単にどうにかできるわけではない。剣が乱立しているおかげで動こうにも移動しづらいし、逃げることに意識を向けてしまえば一気に勝負を決められる。やれるのは、その場からあまり動かず、確実に攻撃を防ぎ、攻撃を加えられれば加えるというスタイルのみだった。

一方的な勝負ではあるが、こんな状況で、耐えているルークは十分すごいのだ。

試合が動いたのはそれから１０分後。このままでは打開できないと考えたルークは乱立する剣をどうにかしようと考えたのだ。

「ドリアード！クエイク！
ウンディーネ！タイダルウェイブ！」

『分ったわ』『うん！』

地震により突き刺さった剣を地面から抜き、水で流したのだ。もちろん、発動と同時にルークが空中に飛ぶことで、セリーナを巻き込めたらと考えたのもある。

全ての剣は流され、スタジアムの端に行くと消えていく。どうやら、セリーナがこれ以上は無駄と思ったのだろう。

水が引くと、ずぶ濡れにはなっているが無傷のセリーナが出てきた。

「やるじゃない」

そう言いつつ、セリーナは魔法で服を乾かす。一瞬で乾く服。

「じゃあ、私の好きな獲物を使わせてもらいましょう」

そう言って取り出したのは、先端が垂直に曲がった大きな二本の大剣。

「ディシオムって名前よ。まあ、名前つける意味なんてないのだけど。これには魔法を弾く効果があるの」

「な！？」

「つまり、あなたの精霊達の魔法をあなた自身に跳ね返すことも可能ってこと。無駄撃ちすれば自分を傷付ける結果になるわよ？」

そう言って、再び攻撃を仕掛けるセリーナ。セリーナの実力を考えれば魔法は危険だと考える以上、ルークは接近戦を甘んじて受けるしかない。

だが、大剣を高速で操り攻撃を加えてくるセリーナに対応しきれるわけもなく、徐々に削られていくルーク。

「くっ！！」

「どうしたの？恐れてたらどうにもならないわよ？」

更に高速の攻撃を繰り返すセリーナ。

「敵の言葉をそのまま鵜呑みにしてしまうのはダメよ。私が嘘言っているとは思わなかったの？」

その言葉に、ルークは愕然とする。その通りなのだ。結局のところ、いくら相手がセリーナだったとはいえ、ここは戦場だ。敵の与えた情報が嘘である可能性は高いに決まっている。

「皆！」

ルークは精霊の武装化を解いた。

「何？魔法を打ち合おうと言うの？」

「ああ、俺は結構限界なんでな。悪いけど、付き合ってもらう」

そう言い、セリーナから距離を取る。

「皆、【虹の閃光】！」

ルークが使える最大の攻撃。精霊すべての力を砲撃魔法とし打ち出す魔法。

「いいわ、受けましょうか。【すべてを守りし絶対の盾（シールド・オブ・アイギス）】」

実は、これは全て（ロスト）を記せし禁断の書庫（ライブラリ）に記されているものの力を反映させた楯だ。全てを記せし禁断の書庫から発動させた方が能力が高いのだが、古代魔法として発動することにより全てを記せし禁断の書庫を発動せずとも瞬間的に発動できるためセリーナが愛用している魔法なのだ。

虹の閃光が魔法の盾にあたる。打ち合いきしむ魔法の盾。

だが、虹の閃光は盾を打ち破ることなく消えた。そして、ルークは魔力をほぼ使い果たし、倒れた。もちろん、地面に倒れる前にセリーナが支えた。

「はは、やっぱり敵わないか……」

「これだけできれば十分よ。で、どうする？まだやる？」

「やめとく。もう立つのも限界だ。皆もいいよな？」

うなずく精霊達。

「ああ、俺の負けだ」

『な、何とーーー！優勝はランク外のセリーナ・エインフェリア三

年生だーーー！』

司会者の声が響き渡る。盛大な拍手も送られてくる。

これで、大会も終わりかと考えていたセリーナにまさかの言葉が聞こえてきた。

『ええ～、今しがた教師から紙を渡されました。え、読めってことですか？分りました。

優勝者、セリーナ・エインフェリア。あなたにSランク1位の生徒が戦闘を申し込んでいます……。Sランク1位！？』

会場が大きな声に包まれる。

「間違いなく。一位ってあの子よね……。暇とか言って通ってる間の話なんだろうけど」

『と、言うわけでエキシビション戦です。セリーナ・エインフェリア三年生とSランク1位の生徒の戦闘です。

試合は昨日と同じく一日開けてから行います。では、皆様ご期待を！』

司会の人物があおる。その言葉にセリーナはため息をつくのだった。

第拾壱話　本戦決勝戦（後書き）

セリーナが戦うと決着が速くなってしまう。いくらなんでも補正かけすぎたかも……。

とりあえず、大会戦は終わりました。次回はエキシビション戦です。戦闘相手は分りますよね？

では！

誤字等の報告。感想、お待ちしております。

第拾弐話　エキシビション戦／闘技大会終了（前書き）

［２０１１／１２／２０］一部ミスを修正
［２０１１／１２／３０］変換ミスを修正×２

第拾弐話　エキシビション戦／闘技大会終了

『さぁ、本日は誰もが入学以来抱いているはずの疑問、何故Ｓランク１位はいないのか？本当にＳランク１位はいるのか？その疑問は今日明らかになります。本日行われるエキシビション戦でその姿が明らかになる。対戦相手はランク外から優勝したセリーナ・エインフェリア三年生。さて、この勝負どうなるのでしょうか！』

＋＋＋　†　＋＋＋

エキシビション戦。

セリーナ・エインフェリア（ランク外）ＶＳセフィ・ティスリーン（Ｓランク１位）

『まさかまさかの展開で本日の試合が決定いたしました。教師陣すらその姿を見たことがないとまで言われている最強の生徒セフィ・ティスリーン一年生。入学初日でＳランク１位になって以来何十年も留年し続けＳランク１位の座を空席とした人物です！

対し、セリーナ・エインフェリア三年生は、今期の編入生。編入時は戦闘試験官を倒し、魔法試験官はその才能に驚いたとのことです』

「まあ、確かにそうなんですがね……」

コロシアムにはセリーナしかいない。始まるまで出てこないつもりだろう。

『おおっと、今教師に紙を渡されました。えぇ何々。セフィ一年生の登場は皆さんで盛り上げてください？
わっかりましたー！では、皆さん、一斉に呼んでみましょう！』

「あの子は何をしたいんだか……」

あきれるセリーナ。

『では、いきましょう！せーの！』

「「「「『セフィーさーん！』」」」」

大きな声で名前を呼ばれる。その声に応答するように声が響き渡った。

「はーい！」

すると、空に小さな黒い点が現れ、コロシアムの中心近くに着地した。

「はーい、皆さん初めましてー！セフィ・ティスリーンでーす！」

やたらと高いテンションで現れたのは、セリーナの予想通りの人物セフィリア・ティス・アインスフィアであった。

ちなみに会場はアイドルが現れたみたいに大盛り上がり。まさか、Sランク1位がこんなに小さく可愛い女の子だとは思っていなかったのだろう。

『な、なんと！セフィ一年生は小さな女の子だったーー！』

煽る司会。盛り上がる会場。熱気の増すコロシアム内。やる気の失せるセリーナ。

「セフィ……。あなた、何がしたいのよ……」

「何って、お姉様だけ楽しんでずるいです。私だって暇を持て余してるんです！」

駄々っ子のように言うセフィ。もちろん、会場の皆さんには二人の会話は届いていない。不幸中の幸いか？

「別に楽しみたくてやっているわけじゃないわ。私としても少し気になることがあってここにいるわけだし」

「だとしても、お姉様だけずるいです。私はこのメアスフィアから出られないんです。少しくらい付き合ってくれてもいいじゃないですか……」

「やらないとは言ってないわ。だけど、抑えなさいよ？私たちがやりあったら、最悪観客席にかけられている防御結界壊すわよ？」

「分かってるもん、そんなことくらいは」

「なら、よろしい。やりましょうか」

セリーナとセフィが構える。ちなみに、一昨日あれだけの剣を取り出したので、セリーナは武器を持っていない。セフィも同じく持ってはいない。

『おおっと、すでに対戦者達は準備万端のようです。では始めちゃいましょうか！
レディー、ファイ！』

始まった瞬間だった。セフィは一冊の本を手に取りだし、何か呪文らしきものを唱え始めた。

「検索（サーチ）。剣召喚」

「な！？」

セリーナはセフィが何をやっているか気づいた。だが、時すでに遅し。

「発見（ディスカバリーロード）。読み取り。【剣召喚（サモンソード）】＆【剣舞（ブレイドダンス）】～」

発動されたのは剣を作り出し召喚する魔法と剣を操ることのできる古代魔法。

「っ！？」

セリーナも、空間を割り武器を取り出す。取り出したのは先端が垂直に曲がった大きな二本の大剣。

手に取ると、すぐに剣を振るう。剣が振るわれると同時に甲高い音が響く。すでにセフィの魔法の制御下におかれた剣達が迫っていたのだ。

「くっ！」

応戦するセリーナ。だが、制御されている剣は異常なスピードで飛んでくる。しかも、剣にも種類があり防ごうにもいくつもの方法を取らなければならない。

まずは、刺突剣。レイピア・エスストック等に代表される剣で突き刺すことを目的とした剣で斬ることにはあまり着眼点を置いていない。その為飛んでくる際には猛スピードで真っ直ぐ先端を向け飛んでくる。

次に、片手剣。まさしく普通の剣だが、応用の幅は広い。刺突とまではいかないが突くこともできるし、斬ることもできる。様々な攻撃を仕掛けてくるため、しっかりと見ていなければやりづらい。

大剣。重さを使い威力を増すことを主眼とした剣。一撃一撃が重く、防ぐにも力が必要。攻撃の幅は片手剣と同じく広いが、動作が大きく見極めるのは楽だ。しかし、分かったからと言ってほかの攻撃のある中簡単には防げない。

刀。まさしく斬るための武器。剣は叩き割るといった使い方になるが、刀とは断ち切ることを目的としている。鉄すらも斬れるほどの力を持っているため、最悪武器を壊されかねない。まあ、技術がなければ難しいので鉄を切るような攻撃は飛んでこないのだが。

最後にソードブレイカー。剣を壊すことを目的としている武器。攻撃には特化していないが武器を壊すことにおいてはかなり優秀。

セリーナの持つ大剣を壊しに来るので避けざるを得ない。

必死に応戦するセリーナだが、少しづつ傷が増えていく。そんな中、セリーナは念話でセフィと会話をしていた。

（セフィ！）

（どうしたのお姉様？）

（あなた何考えてるの！アインスフィアの秘匿をそんな簡単にさらして！）

（ああそのこと？
大丈夫だって。お姉様の持ってる全て（ロスト）を記せし禁断の書庫（ライブラリ）と違って、こっちはただの魔法書にしか見えないから）

（そういうことを言ってるんじゃない！）

（だって、こうでもしないとお姉様との勝負が勝負にならないでしょ？はっきりって私弱いもの）

「くっ！」

その通りなのだ。ハッキリ言ってセフィは弱い。肉体面はどう見ても少女。筋力がまともにあるはずもない。守護精霊なので防御面は最強だが。

その守護精霊であることもネックなのだ。何かをつかさどっている精霊は、つかさどっている属性の魔法しかまともに扱えない。セフィは守護をつかさどる精霊だ。攻撃魔法など使えない。

では、何故強いのか？それは彼女らの持っている本が関わっている。

全てを記せし禁断の書庫と現在（セカンド）を記せし禁断の書庫（ライブラリ）。この二つはアインスフィアの一族が代々受け継いできたものだ。そこに記されているのは普通ではないことばかりである。全てを記せし禁断の書庫には失われた過去のすべてが。現在を記せし禁断の書庫には現在の歴史のすべてが記されている。

現在を記せし禁断の書庫には全ての魔法が書かれている。その性質上、一度でも使われたことがある魔法ならこの本に記され、使うことができる。セフィはその性質を利用して、使えない魔法を使っているのだ。

「やあ！」

セリーナの使う先端が垂直に曲がった大きな二本の大剣・ディシオム。ルークとの戦闘で言ったとおり、この剣には魔法を弾く能力がある。しかし、セフィの出した剣は魔法で召喚されているとはいえ実体を持った本物の剣である。その為、弾くことはできない。だが、実体を持っている以上は壊れる。だからセリーナは一本づつではあるが、着実に壊していった。

セリーナがすべての剣を壊し終わりセフィの方を向くと、既にセフィは次の魔法を発動させようとしていた。

「発見！読み取り！【虹の閃光】！」

発動したのは一昨日の試合でルークが使った魔法。だが、込めら

れている魔力のケタが違う。その威力はルークの数倍はあるだろう。

「くっ！」

セリーナは決断した。迷ってる暇はないと。

「全て（ロスト）を記せし禁断（ライブラリ）の書庫！」

出てきたのはセフィの持つ本よりも古ぼけた一冊の本。

「検索！最強の楯！発見！読み取り！すべて（シールド）を守りし絶対（・オブ・アイギス）の盾！」

現れたのは昨日の魔法で発現した楯よりも小さく、人が手で持つような大きさの楯。

セフィの放つ虹色の極光がセリーナを飲み込む。光が会場に弾け、砂埃が舞う。

光が終息し、しばらくすると砂煙も晴れた。そこには無傷で立っているセリーナがいた。

「あの子、一回しばき倒してやりましょうかしら」

被害も考えず、強力な攻撃をしたセフィに怒りを覚えてるようだった。

「もう、いいわ。こっちも本気でやらせてもらうわ。
検索、魔法を無効化する武器！発見、読み取り！魔を断つ（ゲイ・ジャルク）槍！」

セリーナが取り出したのはありとあらゆる魔法などを無力化し、

攻撃を与える魔の槍。

「これで、あなたの防御はすり抜ける！」

セリーナの目はどことなく怒りの色を見せていた。

「え？ちょっ！まって！」

セフィは焦って逃げ惑う。精霊は半分は魔法で体が構成されている。その為、魔を断つ槍の攻撃を食らえばタダでは済まない。

「お姉様！それ冗談じゃ済まない！」

「お仕置きだもの！冗談なわけないじゃない！」

セフィにしたらたまったものではない。命をかける戦いでもないのに命をかけているのだ。

逆にセリーナにとっては妹に対するお仕置きだ。その為、考えなしに取り出した武器をあてればどうなるかも考えてなかった。

「死ぬから！それ当てられたら私死ぬから！」

「じゃあ、１０分逃げきってみなさい！そしたら、違うのに変えたげる！」

その後、１０分間に渡り、セフィは必死に逃げ回り、セリーナはそれを追うなまはげの如き様相を見せながら攻撃を仕掛け続けた。

「はぁはぁ、死ぬかと思った。というか、当たれば死んでた……。よく逃げ切った私！」

「意外と頑張ったじゃない」

「ひどい！？」

セリーナの言葉に反応するセフィ。ああ、ついでに言っておくが、彼女らの言葉は会場の皆様には届いておりませんのであしからず。

「かなりの魔力使ったよ……。さすがにもう使わないで……、当てられたら本当に死ぬから、というかこの国終わる……」

「わかったわよ。さすがにやりすぎたとは思っているもの」

そう言い、魔を断つ槍を消す。

「でも、そう簡単には終わらせないから」

「うぅ。なら私も本気で行くから！
検索、高速移動！発見！読み取り！【電光石火（ソニックムーブ）】！」

高速移動の魔法を発動させるセフィ。対してセリーナは、

「検索、夫婦剣！発見！読み取り！干将莫邪！」

取り出したのは中国の夫婦剣。

セリーナは神威のスピードに対応しきったが、毛色の違う魔法で

ある【電光石火】には対応できるのか？答えはＹＥＳだ。
【電光石火】は確かにスピードを上げるのに適した魔法だが、使い方を分かっているものには対応もしやすいのだ。

だから……、

「速さで攻めるのは間違いよ！」

干将を投げる。干将は何もない空間へと飛んでいくがたどり着くと甲高い音が鳴り、そこには剣を構え防御をとったセフィがいた。

「っ！
さすがお姉様。これ位は余裕みたいですね！なら！
検索、瞬間移動！発見！読み取り！【瞬間移動（テレポート）】！」

【電光石火】を超えるスピードでの高速移動術、【瞬間移動】。ほとんど空間移動に変わらない速さで動くことから空間移動の名を冠すほどである。

「さすがね。でも、それも浅はかな考えよ」

干将が手元に戻ってくる。夫婦剣であるこの二つの剣は互いに引き合う。そのため、片方を持ったまま呼べば戻ってくるのだ。

戻ってきた剣を手に取り、セリーナは魔法を発動する。

「【電光石火】！」

二人の姿が会場からかき消えた。だが、消えたものの剣と剣を打ち合う甲高い音が会場中に響き渡る。

（なんで、なんでついてこられるの？）

セフィ疑問に思う。【瞬間移動】と【電光石火】とでは段違いに速さが違うのだ。なのにも関らずセリーナは何事もなく【電光石火】で【瞬間移動】についてくる。

「なんでかしらね？」

「！」

「簡単な話よ。スピードだけなら確かに【瞬間移動】の方が早いわ。でも、【瞬間移動】は動きまわることを想定して作られていない。だから、機動性に欠けるの。対して【電光石火】は動きまわることを前提に作られた魔法よ。だから、ただ速く動きまわる【瞬間移動】に【電光石火】でついていけるのよ」

そう言われ、セフィは魔法を解除する。それと同時にセリーナも解除した。

「やっぱり、敵う気がしないな」

「あら、意外とやってるわよ？相手が悪かっただけで」

「だよね。でも、お姉様に最初から勝てるとは思ってなかったし」

「勝つ気がないとか言わないの。観客に失礼よ」

「うん。そうだね。だから、最後に一発やるから」

「そう、じゃあ、私もやり返すわ」

そう言いあい距離をとる二人。そして、詠唱を開始した。

「検索、大砲撃魔法！発見！読み取り！【神の裁き（ジャッジメント）】！」

「検索、雷鎚！発見！読み取り！トール（ミョルニル）の雷鎚！【雷神の鎚（トールハンマー）】！」

セフィが大威力の砲撃魔法を、セリーナが神の使った武器の一撃を放つ。

力は均衡し、互いにその威力を削っていく。互いに魔力の限界近くまで注ぎ込み、決着へと向かっていく。

そして均衡が崩れる。押し切られたのは……、セフィだった。セリーナの【雷神の鎚】がセフィの【神の裁き】を上回ったのだ。

「ああ、やっぱりお姉さまには勝てないか～」

そんな暢気な言葉を言いながら、セフィは黄色い閃光に飲み込まれた。

＋＋＋　†　＋＋＋

『それでは表彰式に参ります。優勝者セリーナ・エインフェリア三年生。壇上へ。続いて準優勝ルーキス・M・アインスフィア三年生、三位ミア・シア・カシミア三年生、同じく三位黄泉瀬神威三年生。壇上へどうぞ』

その言葉に4人は壇上へと向かう。エキシビションはセリーナの勝利で終わり、セフィはそのまま学校を辞めることを宣言し一位の座を開け去っていった。

本当は何をしたくて戦ったのかはわからなかったセリーナだが、セフィが満足そうな顔をして去って行ったので「まあ、いいか」と納得していた。

結果、Sランクは入れ替わりは行われず、一位にセリーナが入ることになる程度で終わった。BランクとAランクは多少入れ替わったようではあるが。

『表彰。セリーナ・エインフェリア三年生』

仰々しく行われる表彰式。こうして、セリーナの最初で最後の闘技大会が終了した。

＋＋＋　†　＋＋＋

「セフィリア様、大丈夫ですか？」

「あんまり良くないかな……。ちょっとはしゃぎ過ぎたかも……」

王宮の奥の中庭でセフィはけだるそうに答える。その姿を見るに闘技大会のエキシビション戦だけの疲れだけではなさそうに見えた。

「お姉様にはやっぱりばれちゃったみたい。隠しときたかったんだけど……」

「仕方ありませんよ。セリーナ様ですから」

「そうだね～」

そう言い、セフィは体を持ち上げ紅茶を軽く飲む。

「近いうちに一度お姉さまを呼んで事情を説明しようと思うんだけど、クリスはどう思う？」

「良いんではないでしょうか。このままでは、大変なことが起こるのは目に見えているのですから」

「そうだね～。

まったく、誰だろうね。王都陥落なんて狙ってるバカな人は」

セフィのつぶやきは暗い空へと吸い込まれ消えていった。

第拾弐話　エキシビション戦／闘技大会終了（後書き）

ようやく3章終りです。
次回はシリアス展開へ持っていけそうです。
（武器がＦａｔｅ関係ばかりですね……。もうちょっと考えられらえば良かったんですが……）

感想等お待ちしております。

第零話　セフィリアの容体

あの戦いから数日。セリーナはセフィリアのもとを訪れていた。

「大丈夫？」

「大丈夫だよ、お姉様」

「嘘おっしゃい。辛いんでしょ？」

「えへへ、お姉様にはやっぱりばれちゃうか」

「当たりまえでしょ。私はあなたの姉だもの」

「ありがと」

セリーナはセフィリアの容体がどのような事態を招くのかを尋ねた。

「あなたが倒れたってことは……」

「うん。この王都への直接攻撃が通っちゃうね。この王都が陥落するかもね♪」

「暢気ね。ということはこの王都にあなたを弱らせるための何かがあるのね？」

「うん。でも、分るはずの場所も全く分からないかな。だから、探すのは難しいと思うよ」

「そう、じゃあ私はそっちに回るわ。悪いけれど、学校は休むわ」

「連絡しとけってこと？」

「出来ればね。このまま探索に入るわ。それに襲撃まで時間もないでしょ？」

「たぶんね」

「なら、なおさらよ。だから……」

「分った。行っていいよお姉様」

「ありがと。じゃあ、行ってくるわ。私の大事な妹を苦しめたやつにお仕置きをしにね」

第零話　セフィリアの容体（後書き）

間が空きましたが投稿です。
正直、この後から急展開になってしまうこと請け合いな章となってしまっています。（まだ書き終わっていませんが……）
そんなわけで、新章です。
では。

第壱話　消えた聖女

セフィリアの見舞いに行ってからその姿を消したセリーナ。当然だが、ミアやルーク・神威は心配した。同時に死ぬことはないとわかってはいるのだが。

しかし、学園側としてはたまったものではない。Ｓランク１位になったばかりでその姿を消したのだ。慌てないわけがない。

「セリーナは一体どこに行ったのかしら……」

「わからん。でも、必要だから帰ってこないんだろうな」

「そ、そうなのかな？」

「そうだろ。俺たちにできることはセリーナが帰ってくるのを待つだけなのかもな」

会話をしているのはミアとルーク、それから神威である。

「だが、やはりなぜ消えたのか気になる」

「ですね。私としてもセリーナが消えた理由がわからないもの」

「は、はい。私もそう思います」

ルークはうつむく。答えが見えそうで見えないのだ。

「何か手がかりはないのかしら……」

「そ、そうだよね。で、でも、わかるなら苦労しないよね？」

「……」

考える。だが、答えがあと少しで浮かびそうなのだがきっかけがない。

「そういえばルーク」

「ん？なんだ、ミア」

「セフィリア様のところ行ってみた？セリーナと戦った後、一度も行ってないでしょ？」

「それだ！」

「！？な、なんなの？」

「セフィリア様だよ！なんで気づかなかった！」

セリーナの妹であり、この国の初代王妃にしてこの国を守護する精霊であるセフィリア。彼女ならばきっと何か知っているであろうと、ルークは思いついたのだ。

「ミア！神威！行くぞ！」

「はいはい。わかったから落ち着きなさい」

「え？え？なんなの～！？」

しぶしぶと付いて行くミアに引っ張られる神威。その姿はどことなくほほえましく見えたそうな。

＋＋＋　†　＋＋＋

その頃、セリーナは王都にある様々な場所でセフィの作り出している結界を弱める作用をする魔法陣を探っていた。セフィの体は精霊となってるためこの結界はセフィと完全にリンクしている。そのため、結界が弱まればセフィの体は弱るのである。

その状態をそのままにするセリーナではない。その為、セリーナは授業をそっちのけで結界の探索及び破壊を優先したのだ。

だが、ここ数日で既に百を超える魔法陣を破壊したにもかかわらず、結界が修復される気配がなかった。つまり……、

「犯人はいまだに潜伏してるってことね」

セリーナは完全装備をして街中を走っていた。

できれば、犯人を見つけたいのだが結界を探るので精いっぱいなのだ。

「私一人じゃ、やっぱり間に合わない……。だけど、私に見つからないようにやるほどの手練（てだれ）だもの。未熟な人たちを巻き込むわけにもいかない」

セリーナはハッキリ言って最強だ。本気を出したセリーナに勝てる者などいない。しかし、それは戦闘に限っての話だ。戦闘以外では、セリーナはセフィよりも下になる。特に魔法に関しては現在（セカ）を記せし禁断の書庫（ライブラリ）を持つセフィの方が明らかに有利なのだ。

つまり、犯人は魔法技術や隠密術に関してはセリーナの上をいっているのだ。そんな相手に対応できる人物など限られてくる。つまり、犯人を見つけ叩くための人材はいないということになるだろう。

「はぁ、どうすればいいのかな……」

走りつつも探す。

「あった」

そう言うと、セリーナは方向を変え細い路地へと入りこむ。

「はぁ、やっぱりまた少し違う。これってやっぱり……」

魔法陣というものは意外と癖が出たりするもので、まったく効果が同じ魔法でも違う魔法陣であることはざらだ。つまり、癖さえ分かってしまえばどこの誰のものかもある程度はわかるのだ。

だが、セリーナはこれをやっている犯人は多くないと思っている。理由なのだが、これだけ多くの魔法陣を設置するためにたくさんの人間を配置していてはすぐに見つかってしまうからだ。しかし、魔法陣が人により違うことは知っていてなおかつ魔法陣の操作ができるならば、大人数でやっているように見せることは簡単なのだ。

つまり、犯人の発覚を遅らせるには非常に有効な方法なのだ。

「はぁ、どこの誰よ……。それに、このままじゃ間違いなくここの結界が弱まってるのがばれる。そしたら……、攻め込まれかねない」

今まで、幾度か攻め込まれたことのある王都≪メアスフィア≫だが、その一度として陥落したことも町に入られることすらなかった。だが、このままでは、メアスフィアは確実に陥落する。

「何としてもそれだけは阻止しないと……」

セリーナは魔法陣を消すと、すぐさま走りだした。

第弐話　王子の意思と聖女の思い

ルーク達3人はセフィリアのもとへと赴いていた。

「良く来ました。ですが、主は現在床に臥せっておりますので静かにお願いします」

「「はい」」

3人はメイドのクリスの後を付いて塔を登る。

「セフィリア様はどうしたんですか？」

「それは……」

『それは私から説明するから、早く上って来て～。クリスもそれでお願いね～』

「セフィリア様！ご無理をしないでください！」

3人は何が起きているのか分からなかった。どこからともなく聞こえてくる声が無気味に聞こえる。

「とりあえず、行きましょう」

「は、はい」

そのまま、登る3人。

そして、塔の最上階の部屋にたどり着くと、そこにはベッドに横になっているセフィがいた。3人が来たからか、その体を起こす。

話を進めたのはルークだった。ほかの二人は聞くだけである。

「セフィリア様、この度は突然来てしまい申し訳ありません」

「別に気にしてないよ～。で、要件は～？」

「セリーナのことです」

「ああ、そのことか～。それなら気にしないで過ごしてくれないかな？」

「何故ですか？それは、セフィリア様が倒れていることにも関係してるのですか？」

「うん。だから、これ以上かかわらない方がいいって言ってるんだよ？」

「嫌です。セリーナも危険に巻き込まれているのですよね。なら！」

「だめ！」

セフィが大きな声を上げる。

「相手は私のことを分って何かをしてるんだよ。お姉様ですら、数日かかっても解決できない相手だよ？そんな相手を相手にあなた達が何ができる？最悪死ぬよ？」

「そ、それは……」

「いずれお姉さまができる限りのことを調べて報告してくれる。最悪の事態になればどちらにせよあなた達だって動くことになる。無理に今動いて死ぬような事態になるのは私もお姉様も望まないよ？だから、あなた達が動きたいと思っても今だけ、そう今だけは待って」

「分りました……。ですけど！」

「分ってる。情報が来たらすぐに伝える。だから、あなた達の意思が固いものだとしても絶対に動かないで」

「はい、わかりました……。
行こう。ミア、神威」

「失礼しました」「し、失礼しました」

3人は納得しないながらも部屋を出た。出て言った瞬間セフィはベッドに倒れこんだ。

「セフィリア様！」

「あはは、やっぱりきついなぁ」

「当り前です。あなたの存在そのものに攻撃されてるんですから」

「ごめん。ちょっと寝るね。お姉さまが帰ってきたらお話は聞いておいて」

「分りました。ごゆっくりお休みください」

「うん、お休み……」

そう言って、セフィは深い眠りへと堕ちた。

「セリーナ様、どうかセフィちゃんを助けてください……」

その言葉はセフィには聞こえず、静かに消えて行った。

＋＋＋　†　＋＋＋

セリーナはいまだに探していた。犯人は見つからず、魔法陣は消しても消しても現れる。いつまでたっても終わらないいたちごっこである。

「犯人達の狙いは間違いなくこの王都の陥落。そしたら……」

セリーナは考える。このまま消し続けたからといってきっとこのいたちごっこは終わらない。その前にこの王都に何かが襲来するだ

ろう。だが、セリーナが生きていることは明かされていない。そのため、無理に力を使えば混乱が生じかねない以上はセリーナは襲来前に終わらせたいのだ。

「はぁ……。最悪の事態は考えるべきかな……」

セリーナはため息をつく。

どうにかしたくても自分一人でどうにか出来ないのだ。できるならば、セフィに協力してもらい犯人を見つければ早く終わるのだ。だが、セフィはかなり危ない状態だ。だから、セリーナは一人で何とかしようとしてるのだ。

「誰かに手伝ってもらいたいけど、命の危険がある以上頼めるわけないじゃない……」

セリーナは悩む。どうすれば解決できるのか。

だが、そんな悩みをよそに自体は急変していくのであった。

第参話　襲撃会議

そこは暗い場所で、そこには円卓のような物が置かれ、椅子の数は13あった。すでに椅子の半分近くは埋まっており、その場は異様な空気が漂っていた。

「がはは。集まるのが遅いのぉ」

「将軍、うるさいです。静かにしててくださいなのです」

「すまんすまん。だが、我らの王の招集に遅れてくるなどあってはならんではないか」

「んなことわかっているのです。連絡は今しがた出したとこです。あと少しで全員つくそうなのです」

「そうかそうか。がはははは」

大きな体格を持つ男と小さな少女の会話が空間に響く。のんきな会話とは言えないが場が持つ空気に当てられていないのはその性格もあるのかもしれない。

その時、扉が開き、6人の男女が入ってきた。

「遅かったではないか」

「将軍に言われたくはないね。僕たちはさっきまで遠征に言ってたんだ。これだけ早く着いただけでも十分すぎると僕は思うよ」

「そうかそうか」

「この人絶対にわかってないな……」

青年がため息をつく。これで11席が埋まった。残りは二席第1位の席と13位の席だ。

「そういえば、あの子は？」

「来るかもわかりませんのです。というか、連絡が届いてるかすら不明なのです。私の念話が唯一届かないものですからどこにいるかもわからないのです」

「そうかい。では、我らが王が来るまでしばし待つとしよう」

また場が静かになる。誰もしゃべらず、誰もが息をのむようなそんな場だ。

数分後、その静寂が再び破られた。

「すまない。遅れた」

入ってきたのは禍々しい服装を着た青年だった。

「いえ、この場の誰しも待ってなどおりませぬ」

「そうか。では、会議を始める」

「マスタークライン。あの人がまだ来てないのです」

「ああ、あれは放っておけ。私が呼べばいつでもくるからな」

「わかりましたです」

「では、始める。まず全員が来ていることを確認する。
序列第二位、グラスレイ・アルファリオス」

大きな体格を持つ男が声を上げる。

「おう！」

「序列第三位、マリアージュ・マルティアス」

小さな少女が声を出す。

「はいです」

「序列第四位、ロクル・ディスメロイ」

本を持った背の高い青年が答える。

「はい」

「序列第五位、マルクド・ソレイン」

ローブを着た細い男が対応する。

「はい」

「序列第六位、クラウン・クラレウヌ」

妖艶な体を惜しむことなくさらけ出している美女が応える。

「は～い」

「序列第七位、クスハナ・マイスティー」

将軍に次ぐ体の大きさを誇る男が応える。

「おう！」

「序列第八位、マルス・ツベスチア」

のほほんとした青年が応答する。

「はいさ～」

「序列第九位、ロンドロンド・アレスティ」

あどけなさの残る顔を持つ少女が応える。

「はい」

「序列第十位、ファントム」

影が薄くいるかもどうかわからなかった男が返答する。

「はい……」

「序列第十一位、ルーン・フォルセイ」

黒い肌をした大男が応える。

「おうさ」

「序列第十二位、トルトス・マリレイ」

少年としか言いようのない背丈の男が応える。

「おるわ」

「序列第十三位、増渕天下」

その席には誰も付いておらず、応える声もなかった。

「はぁ、天下ーー！」

マスターと呼ばれていた青年が大声を出す。次の瞬間、天井を突き破り、一人の青年がおりたった。

「マスター、呼んだか？」

あどけなさの残る顔だが、体の至る所に血や泥が付いている。

「会議だ。おとなしく席に座ってくれないか？」

「分った」

座る。そしてようやく全ての席が埋まり、会議が始まった。

「これより、スフィア王国首都≪メアスフィア≫攻略及び襲撃に関する会議を始める。何か質問のある者はいるか？」

クラインが話を進める。その言葉にまず声を出したのは、第四位のロクルだった。

「まずは、第一にあの首都は難攻不落以前に攻め込むことすら容易ではないはずでは？つまり、無謀なことなのでは？」

「その点については今から説明する」

クラインがそう言うと、円卓の中央に地図が現れた。

「これがメアスフィアの首都の地図だ」

「これがですか。マスタークライン、あそこを攻めるのが難しい理由はご存知なのですか？」

これに質問したのは第三位マリアージュ。

「もちろんだ」

「それは本当なのですか！？」

「そうだと言っている。でなければ、あの首都を攻めるなどというわけがないだろ」

「すいませんなのです……」

「いいさ。では、話を続ける。
今回、ここを攻めるにあたってだが、此処にいる何人かにやってもらうつもりだ。参加したい者はいるか？」

「おう！俺がやらせてもらうぞ！」

「将軍か。では、マリアお前も付いていけ」

「は、はい」

「他には」

「俺が行くー」

「天下か。お前は今さっきまでいた戦場に戻れ。放置していては面倒なことになる」

「ちぇー。わかりましたー」

「では、これにて会議を終える。決行は明日。将軍、マリア頼んだぞ」

「おう」「はい」

「では、これにて終了」

全員がその言葉に散って行った。

「ふう。これが終われば粗方の準備は終りだ」

青年の言葉は誰もいない部屋に響くのだった。

第参話　襲撃会議（後書き）

今年の投稿はたぶんこれで終わりです。
他の作品は分りませんが。

ぶっちゃけこう言うシーンは滅茶苦茶苦手なので自分で見てもつたない文章だなぁと反省しています。

第肆話　魔物襲来

あれから数日、セリーナは魔法陣を数百という数、消していた。だが、セフィの体調が良くなることはなかった。むしろ、自体は悪化の一途をたどっていた。

セフィの持つ守護の力がほとんど失われた王都には来るはずのない魔物が少しづつ押し寄せるような事態になっていた。その為、国の騎士団はその対応に追われ忙殺される状態にあった。

セリーナは犯人を見つけようと今も必死に探しているが、その尻尾さえつかむことはできず、徒労に終わっている。

ルーク達はセフィに話を聞いてからは訓練をしつつ、セフィから情報が届くのを待っている。

そんな日が数日続いた時だった。最悪の事態が起きたのは。

＋＋＋　†　＋＋＋

「え？どういうこと？」

「ですから、数万を超える魔物の軍勢がこの王都を目指して進軍しているらしいのです」

「……。つまり、私を弱らせたのはその軍勢を操っている奴らの仕業ってことかな？」

「はい。間違いなくそうでしょうね。ですが、騎士団は断続的に現れる魔物の対処で疲れ切っています」

「やばいかな～」

「そうですね。ですが、この事態にセリーナ様が動かないわけはないのでは？」

「そうだね～。お姉様なら、間違いなく動くかな～。正直に言うと今は動いてほしくないけど」

「何故ですか？」

「敵が魔物を操ってるってことは間違いなくゼノンクラスの実力のある人物。なら、今お姉様が健在なのを見抜かれるのは危険が高いかな～」

「そうですか……。ですが」

「間違いなく、お姉さまは動く」

「そうですか。では、セリーナ様に連絡を入れますね」

「お願いね～」

そう言いクリスは念話の魔法を発動させた。

＋＋＋　†　＋＋＋

「最悪ね、全くもって」

セリーナは王都の路地裏にて一人溜息をついていた。

「（はぁ、面倒くさい事態になってるみたいね。）クリスちゃん。セフィにつないでくれる？」

『ですが……』

「良いから。重要なことを聞くから」

『分りました……』

しばし待つと脳内にセフィの声が聞こえてきた。

『お姉様ですか？』

「ええ。セフィリア少しいいかしら？」

『セフィって呼ばないってことはそう言うことでいいのかな？お姉様』

「ええ。全て（ロスト）を記せし禁断の書庫（ライブラリ）を完全に開放して使うけど、現頭首として許可をもらえるかしら？」

『……。本音としては使ってほしくないよ……。でも、きついよね？』

「当り前よ。私としても使わないで終わらせたかったけど、簡単にはいかないのは確かかね」

『了解したよ。本気を使っていいよ』

「ありがとね。じゃあ、騎士団とかは出さないようにしてね。巻き込まれるわよ」

『分ったよ。お願いねお姉様』

「ええ。静かに寝てなさい」

そうしてセリーナは念話を切った。

歩きだしたセリーナの手には本が握られていた。

「さあ、戦争よ」

そう言った瞬間その場からセリーナの姿は描き消えていた。

第肆話　魔物襲来（後書き）

短いですね。
次回、セリーナ無双します。ついでに全てを記せし禁断の書庫が何なのかも明らかになります。（あくまで予定ですが……。できればいいなぁ～）

ではっ！

第伍話　襲撃直前

王都から数十キロの距離に大量の魔物の軍勢がいた。

「がはは。あと少しで王都か」

「そうなのです、将軍。ですが、少し静かにしてほしいのです」

「がはは。だがあと少しで絶対要塞とまで言われるメアスフィアを落とせるかもしれぬのだぞ？心躍るではないか！」

「分らないでもないのですが、少し静かにしてほしいのです。私にも準備があるのです」

「そうか、そうか。がはは」

この人分ってないと思うマリア。行っても仕方ないと諦め準備を進める。といっても、やることはほとんどなく魔物達の行軍に支障がないようにする程度のことである。彼女が準備しているのはもしもの事態が起きた時の為の準備である。

この数の魔物での襲撃だ。並の都市であれば間違いなく落とすことができる。だが、彼らが向かうのは天下無敵の絶対城壁とまで言われ、この五百年一度すら攻め込まれたことすらない都市なのだ。そう簡単に落とせるわけがないとマリアは考えている。だからこそ、マスタークラインの言うことに嘘がなくとも万全の対策を取ろうとしているのだ。

「何もなくて、簡単に攻め込めるといいのですが……」

「がはは。何を心配して居るのだ。儂がおるのだ問題はない！がははは！」

何も考えていないのか将軍グラスレイは大きく笑う。

「心配し過ぎて困ることは何もないのです」

「がはは。別にいい。お前に何が起ころうと儂がなんとかするわい」

「ありがとうございますです、将軍」

二人は笑い合う。この先にどんな強敵が待ち構えているかも知らずに。

＋＋＋　†　＋＋＋

王都の門の前数キロのところに一人の少女が仁王立ちしていた。着ているのは迷彩柄の軍服。この世界あるはずのない服だった。

セリーナは手の本を開き、何かをつぶやき続ける。セリーナの周りの空間は何もないはずなのに歪んでいる。何が起きているかなど誰一人分らない。

唐突にセリーナは本を閉じた。

「ふう。準備は終り。後は奴らが来るのを待つだけね」

腰にあるホルダーに本をしまい。腕を組む。その姿はまるで長年、戦闘を続けてきた鬼教官とでもいうべき格好だった。その姿がいくら小さかろうがそこに映る姿は最強の人間の姿だった。

風が吹き、髪がなびく。緋色をした髪が光り輝き、その髪はまるで何かを欲しているかのようだった。

「さぁ、早く来なさい」

セリーナの呟きは風にさらわれ消えて行った。

＋＋＋　†　＋＋＋

セフィリアの部屋にはルーク達が集まっていた。

「それで、セリーナに魔物達の排除を頼んだのか？」

「うん。それ以外の方法がないからね。個人的には不本意だけど、この王都を落されてはいけないからね」

「だからって！」

「だからね。君たちには犯人の排除と魔法陣の排除をお願いしたいんだ。お姉さまがやってたことをね」

「！？」

「私の守護の力を復活さえできれば王都に魔物は近寄れなくなる。だから……」

それに答えたのはルークではなくミアだった。

「分りましたわ」

「ミア！」

「今私達がやるべき事は、セフィリア様に言われたことだわ。私達がセリーナのところに行っても間違いなく足手まといになる。やるべき事は明らかだわ」

「だけど……」

「わ、私もそう思うの……」

「神威……」

「わ、私達にできるのは、そ、そのくらいだと思う」

「……」

うつむいたルークをよそにセフィは話を続ける。

「犯人達はいまだに魔法陣を作ってる。それにお姉様ですら簡単には捕まえられなかった」

「はい。セリーナ様はこの数日ずっとその為に動いておられました。ですが、セリーナ様ですら捕まえられなかった。ですが、魔物が迫ってきているということは彼らは間違いなく脱出するために動くはずです。ですので、魔法陣を消しつつ、犯人の探索及び討伐をお願いします」

「そう言うこと。お願いできる？」

「了解しました、セフィリア様」

「は、はい！」

「ルーク君はどうする？」

セフィリアは問う。ルークは、

「納得はいかない。だけど、この国の王子としてこの国の首都を落

させるわけにはいかない。だから……、やらせてもらう！」

「うん。お願いね」

ルーク達三人は部屋から出て行った。

「ほんとにお願いね……」

セフィリアのつぶやきは消えていくのだった。

第伍話　襲撃直前（後書き）

すいません。
ええぇ、書けませんでした！というか、繋げると微妙になりそうなんでわけます。
次回こそ、次回こそセリーナの無双を書ければいいな……。

第陸話　全てを記せし禁断の書庫

魔物の群れが視認できる距離に見えた頃セリーナは第二の準備を始めた。

「術式解凍（サージカ形コンプレンシセットアップ）。設定準備完了（コンプリート）」

セリーナが言葉を紡ぐとそこには様々な兵器が並んでいた。戦車や砲台、ありとあらゆる兵器と呼ばれるものがそこにはあった。そう存在しないはずのものがそこには並んでいたのだ。

「ふう、かなり魔力使ったかな」

少し疲れた様子を見せるセリーナだが、背の背中から感じられるものは威厳であり、強さだった。負ける要素など一つも見当たらなかった。

そして、時は訪れた。魔物の群れが後数キロの位置まで到来したとき、セリーナが宣言した。

「よし。じゃあ、行きましょうか。
全て（ロスト）を記せし禁断（ライブラリ）の書庫解放。一斉射撃！撃てーーーー！」

全ての砲台や戦車から砲弾が放たれる。それらが次々と着弾し、爆発を起こす。

一方、魔物側の陣営では混乱が巻き起こっていた。

「な、何なのだ！突然爆発が起きおったぞ！」

「分らないのです。ですが、何かが飛んできているのは確認できているのです。それが、原因だと推測するしかないですね」

表面上は冷静に見えるマリアだったがその内心は必死になっていた。前方に見えるのはたくさんの鉄塊と一人の少女。それらが数万は優に超す魔物の軍勢が数分もたたずに半分以上も削られたのだ。焦らずにいられるわけがなかった。

「将軍……」

「仕方ないな。儂が出る！マリア嬢は魔物どもを率いて撤退せい！」

「わかりましたのです！」

こうして魔物の軍勢は王都を襲うことなく撤退することとなった。

＋＋＋　†　＋＋＋

その頃王都内ではルーク・ミア・神威の三人が犯人を追っていた。

「ミア！」

「ええ、捕捉したわ！神威！」

「う、うん！【加速（アクセラレーション）】！」

ルークが魔法陣を探知破壊し、ミアが犯人の足取りを追い、神威が特攻を仕掛ける。この構図で追跡をはじめ数日。ようやく犯人の捕捉に成功したのだ。

そして、神威は犯人へと追い付いた。

「へ？」

目の前にいたのは、メイド服を着た少女と執事服を着た青年だった。だが、その頭には立派な角がある。

「まさか。僕たちが追いつかれるとはね」

「そうね。意外だったわ」

そうやって話している内にルークとミアもやってきた。

「あなた達ね。こんなことをしたのは！」

「いかにも。僕達が犯人で間違いないよ。おめでとう」

その言い方に怒りを覚える三人。

「随分と舐めた真似をしてくれるじゃないか」

「あらあら、随分と怒っていらっしゃいますね。ですが、これが私達の仕事なのですよ」

「どういうことだ！」

「もう分っているんじゃありませんか？この不落の都市の陥落ですよ！」

「そんなことは問うの昔に分ってるわ。聞きたいのはなぜ、そんなことを目論むかですよ？」

「簡単です。世界征服です」

「「「な！？」」」

三人は口を揃え驚きを示す。

「そんな事を何故！」

「あら、別にそんなことはいいではないですか。それともいいんですか？こんなところで時間を取られても。もうじき、魔物が襲来するはずですよね？」

「残念ながらそっちは大丈夫よ。強力な人が対処してくれてるから」

「あら、そうですか」

そんなとき、執事服を着た青年が声を上げた。

「姉さん！マリアさんから念話！撤退するって！」

「な、なんですって！？」

その言葉にルークは勝ちを確信した。

「どうやら、終わりのようだな」

「そうですね。ですが、此処で捕まるわけにはいきませんので」

次の瞬間。閃光が走り、青年と少女の姿は描き消えていた。

「くそ！」

三人はその場に立ち尽くすしかなかった。

＋＋＋　†　＋＋＋

「セフィリア様」

「ん～？どうしたの、クリスちゃん？」

「あなた様の姉君であるセリーナ様の持つあの本は一体何なのですか？セフィリア様の持つ本は以前聞かせてもらっているので、知っているのですが……」

「ああ～、そう言えばそうだったね。わかった、教えてあげる。まずは、私の持ってる本のおさらいね？」

「はい」

「現在（セカンド）を記せし禁断の書庫（ライブラリ）っていうのは今の歴史が語られ始めてからの歴史だってことは話したよね？こっちはね、今の歴史の全てを記録してるの。情報から詳細な歴史まですべてね。なおかつ、その情報の一部を再現して使用することも可能なのは知ってるよね？」

「はい」

「で、ここで質問ね。今の歴史が語られる前の歴史ってあったと思う？」

「分りませんが、あったと思います」

「何で？」

「理由はありませんがそう思うからです」

「うん。答えはあったんだよ。そう、間違いなく今よりもっと高度な文明をもった時代が築かれていたの。だけど、理由は伏せるけれど、その文明は崩壊した。そして、魔法というものが確立されて今の歴史が刻まれるに至ったの」

「そ、そんな……」

「で、全て(ロスト)を記せし禁断の書庫(ライブラリ)って言うのは、その過去の歴史の全てを記した本でね。その歴史の中で語られている神話とかの情報すらも内包してるの。ハッキリ言って、全てを記せし禁断の書庫を本気で使ったならば絶対に現在を記せし禁断の書庫じゃ勝てないんだよね」

「すごいですね」

「すごいなんてもんじゃないよ。かつて、この地球上にいた人間達の科学技術は私達の魔法技術なんか目じゃないものをたくさん生みだしてるんだから」

第陸話　全てを記せし禁断の書庫（後書き）

すいません。滅茶苦茶遅れましたね。

とりあえず、こんな世界でした、みたいな。

では。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

　ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n2295s/

翼を失った竜と血塗られた聖女

2012年1月11日07時52分発行